

Yanaginogosho Site

The 72th Excavation Report of the Local Government Office in Hiraizumi of the 12th Century



2012

Iwate Board of Education , JAPAN

岩手県文化財調査報告書第135集
平泉遺跡群発掘調査報告書

岩手県文化財調査報告書第135集

平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

岩手県教育委員会



柳之御所遺跡

第72次発掘調査概報

2012

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第135集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

第72次発掘調査概報

2012

岩手県教育委員会

序

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、平安時代末期の約100年間にわたり北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏の残した遺跡で、特別史跡中尊寺境内、特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡、特別史跡無量光院跡などの文化財と並び、当時の平泉の核をなしていた遺跡の一つであります。本遺跡は、昭和63年から岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会が実施した一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道4号改修平泉バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査により、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・堀跡などが確認され、また、膨大な量のかわけや各種木製品など、質・量ともに卓越した遺物が出土いたしました。これらの豊富な遺構・遺物により、本遺跡が『吾妻鏡』に記された「平泉館」であることが指摘されています。

このような経過のなかで、遺跡に対する建設省（現国土交通省）のご理解により、平成5年には遺跡の保存が決定し、平成9年3月に『柳之御所遺跡』として国の史跡に指定されました。県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、史跡公園として整備して後世に伝えとともに、広く活用していきたいと考え、平成10年度から史跡整備に向けた発掘調査を実施してきました。平成17年度から本格的に始まった史跡公園の工事も進み、平成22年の春から公開しており、これまで多くの方々にご来園いただいております。

また、残念ながら柳之御所遺跡は外れてしまいましたが、平成23年に「平泉の文化遺産」が世界遺産に登録されました。平成13年4月に世界文化遺産の暫定リストに登載されたことを受け、本登録に向け官民一体となった取り組みをすすめて参りましたが、それが実ったかたちです。今後は本遺跡をはじめ未登録の遺産についても、その価値評価にむけて活動を展開していく所存であります。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成に当たり、ご指導・ご協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方、文化庁記念物課、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所をはじめ関係各位に深く感謝申し上げますとともに、本書が平泉文化研究発展の一助になれば幸いです。

平成24年3月

岩手県教育委員会

教育長 菅野洋樹

例 言

1. 本書は、岩手県教育委員会が平成22年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る、史跡柳之御所遺跡の発掘調査の概要報告である。調査期間は平成22年5月7日から10月31日である。
2. 本事業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が主体となり、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。
3. 遺構の呼称は、昭和63年度に岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用し、本書でも記載している。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。
SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物 SC：道路状遺構 SD：溝・堀 SE：井戸・井戸状遺構
SG：園池 SK：土坑・柱穴の一部 SX：その他 SI：竪穴住居 P：柱穴
例：72SK1 第72次調査の第1号土坑
4. 図版、写真図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については一部を除いて縮尺は1/3を基本にし、スケールを図中に表示した。遺構遺物写真については縮尺不定である。
5. 本書の編集・執筆は生涯学習文化課柳之御所担当で協議の上、村田 淳・櫻井友梓が行った。執筆分担は、各項目の文末に記載している。
6. 調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備指導委員会等で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。
7. 遺構の埋土観察、遺物の色調観察に際しては、『新版標準土色帖』を参考にした。
8. 自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社への分析委託により実施したものである。
9. 後述する平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方をはじめとして、下記の方々・機関の御協力を得た。
相原康二 安達訓仁 伊藤博幸 井上雅孝 及川 司 及川真紀 岡陽一郎 島田祐悦 島原弘征
信太正樹 鈴木弘太 高橋千晶 西野 修 羽柴直人 古川一明 本澤慎輔 前川佳代 松本秀明
室野秀文 八重樫忠郎 八木光則 (50音順：敬称略)
岩手県立博物館 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 平泉文化遺産センター
文化庁記念物課
10. 本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は、岩手県教育委員会が保管している。

目 次

I 序 論	1
1 遺跡の位置と調査経緯	1
2 調査計画及び平泉遺跡群調査整備指導委員会	4
3 今年度の調査	5
II 調査内容	10
1 北 区	10
(1) 調査の概要	10
(2) 検出遺構	10
(3) 出土遺物	26
2 南 区	43
III 自然科学分析	45
はじめに	45
(1) 放射炭素年代測定	45
(2) テフラの分析	47
IV 総 括	50
1 堀跡の調査成果	50
2 掘立柱建物跡の周辺の様相	52

図 版 目 次

図版1 遺構 北区全景	図版12 遺構 72SX1、72SE1
図版2 遺構 72SD1・2	図版13 遺構 南 区
図版3 遺構 72SD1	図版14 遺物 かわらけ①
図版4 遺構 72SD2	図版15 遺物 かわらけ②
図版5 遺構 72SD2	図版16 遺物 国産陶器①
図版6 遺構 72SB1	図版17 遺物 国産陶器②
図版7 遺構 72SB1柱穴	図版18 遺物 国産陶器③
図版8 遺構 72SA1・2	図版19 遺物 国産陶器④
図版9 遺構 72SA1・2柱穴	図版20 遺物 輸入陶磁器・瓦・その他
図版10 遺構 72SD3、72SK3	図版21 遺物 木製品①
図版11 遺構 72SK6、P18、P47	図版22 遺物 木製品②

挿 図 目 次

図1	柳之御所遺跡位置図	2	図17	72SD1出土土器類実測図3	31
図2	柳之御所遺跡調査範囲図	7	図18	72SD1出土土器類実測図4	32
図3	北区遺構配置図	9	図19	72SD1出土土器類実測図5	33
図4	72SD1平面図	11	図20	72SD1出土土器類実測図6	34
図5	72SD1 Aトレンチ断面図	13	図21	72SD2出土土器類実測図1	36
図6	72SD1 Cトレンチ断面図	14	図22	72SD2出土土器類実測図2	37
図7	72SD2平面図	16	図23	遺構出土土器類実測図	38
図8	72SD2トレンチ断面図	17	図24	北区遺構外出土土器類実測図	39
図9	72SB1平面図	19	図25	北区出土瓦・鉄製品実測図	40
図10	72SB1柱穴個別図	20	図26	北区出土木製品実測図1	41
図11	72SA1・2平面図	21	図27	北区出土木製品実測図2	42
図12	72SA1柱穴個別図	22	図28	南区平面図	44
図13	72SA2柱穴個別図、72SK6、P47	23	図29	南区出土土器類実測図	44
図14	72SD3、72SK3、72SX1、P118	25	図30	火山ガラス比	48
図15	72SD1出土土器類実測図1	29	図31	火山ガラスの屈折率	48
図16	72SD1出土土器類実測図2	30	図32	軽石・火山ガラス	49

挿 表 目 次

表1	平泉遺跡群調査整備指導委員名簿	3	表14	建物軸方位	52
表2	発掘調査年次計画	3	表15	遺構出土かわらけ数量表	53
表3	平成22年度指導委員会協議事項	4	表16	出土遺物観察表(かわらけ)	55
表4	72SD1出土かわらけ重量表	27	表17	出土遺物観察表(国産陶器)	56
表5	72SD2出土かわらけ重量表	35	表18	出土遺物観察表(輸入陶磁器)	59
表6	遺構出土土器類重量表	38	表19	出土遺物観察表(瓦)	60
表7	放射性炭素年代測定結果	46	表20	出土遺物観察表(金属製品ほか)	60
表8	暦年較正結果	47	表21	出土遺物観察表(木製品)	60
表9	テフラ分析結果	48	表22	北区柱穴一覧表	61
表10	火山ガラス比分析結果	48	表23	北区土坑一覧表	64
表11	柳之御所遺跡調査での堀跡の対応	50	表24	72SD1出土かわらけ数量表	65
表12	72SD1出土かわらけロクロ比率	51	表25	72SD2出土かわらけ数量表	66
表13	72SD2出土かわらけロクロ比率	51			

I 序 論

1 遺跡の位置と調査経緯

柳之御所遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在する。遺跡の経度・緯度は北緯38度59分28秒、東経141度7分35秒（日本測地系）である。遺跡の背後（北東側）には高館の丘陵、東に北上川、西から南にかけて猫間が淵と呼称される低地によって区切られた河岸段丘上に立地する。遺跡内の標高は南側で25.3m、中心部で27m、北側で32mであり、北西側が高く、南東側に傾斜している。北上川に接しているため遺跡の一部は浸食されたと考えられるが、本来どの程度存在していたのかは不明である。この範囲は調査前には住宅地と田畑があった場所で、緊急調査後に公有地化が行われている。

遺跡は一関遊水地事業や国道4号バイパス事業に伴い、大規模な発掘調査が行われ、内容が明らかになるにつれその価値が高く評価されることとなった（岩手県埋蔵文化財センター1995）。それを受けて遺跡の保存運動が高まり、建設省（現在の国土交通省）や関係機関の尽力により遺跡の保存が決定し、治水と遺跡保護との両立が図られることとなった。

柳之御所遺跡は平成9年に史跡指定され、以降順次史跡範囲を広げながら現在に至っている。岩手県教育委員会では遺跡が国の史跡に指定されたことから、史跡公園として整備し保存活用を図るため、文化庁及び柳之御所遺跡調査研究指導委員会（現平泉遺跡群調査整備指導委員会）の指導助言を得て、平成10年度から主に未調査区域を対象とした内容確認の発掘調査を計画し、継続して実施している。調査は下記の調査計画に基づき、第I期整備対象区域である堀内部地区を中心に行ってきた。これらの調査により、堀内部地区の大部分が調査され、性格が明らかになりつつある。遺跡内の遺構変遷も多くの見解が示され研究が深化している。なお、柳之御所遺跡堀内部地区は、平成22年より史跡公園として公開を行っている（岩手県教育委員会2010b）。

柳之御所遺跡の周辺には、西には隣接して猫間が淵跡、無量光院跡が位置し、北には高館跡、南には伽羅御所跡が接している。無量光院跡はこれまでの発掘調査で、宇治平等院と酷似した内容が確認されている。伽羅御所跡はこれまで複数の地点で調査が行われているが、調査面積が少なく内容は明らかとなっていない。地名から『吾妻鏡』に記載される伽羅御所に比定されることもあるが、これまでは小規模の発掘調査にとどまっており明確に示すものは確認されていない。ただし、遺構内容は優れたものがあり貴重な遺物も確認されている。平泉町内ではこの他に志羅山遺跡や泉屋遺跡、倉町遺跡といった当時の平泉の街並みに関連する遺跡が調査されている。北上川を挟んだ東岸域や衣川を挟んで北側の奥州市接待館遺跡、奥州市白鳥館遺跡などの調査も行われており、当時の平泉やその周辺域を視野に入れた検討が行われてきている。

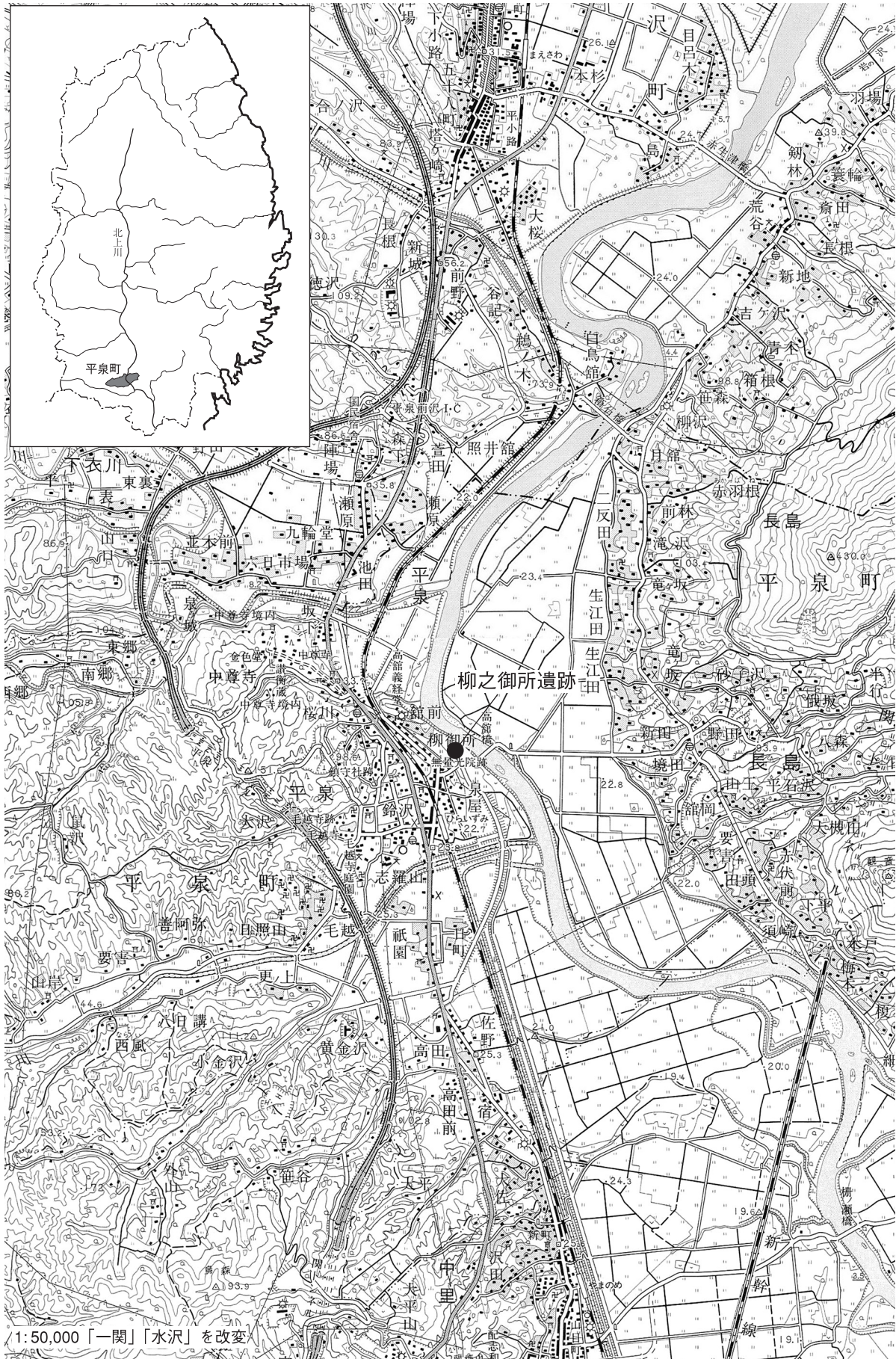


図1 柳之御所遺跡位置図

表1 平泉遺跡群調査整備指導委員名簿

氏 名	役 職 (当時)	専門部会
入間田宣夫	東北芸術工科大学教授	整備
遠藤セツ子	メビウスの会事務局	整備
○岡田 茂弘	独立行政法人国立歴史民俗博物館名誉教授	保存・整備
小野 正敏	独立行政法人人間文化研究機構理事	遺構
◎河原 純之	元千葉大学教授	
坂井 秀弥	奈良大学教授	遺構
齊藤 利男	弘前大学教授	遺構
佐藤 信	東京大学教授	保存・整備
清水 擴	東京工芸大学教授	遺構
清水 真一	独立行政法人文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター長	遺構
関宮 治良	前平泉町商工会事務局局長	整備
田中 哲雄	元東北芸術工科大学教授	保存・整備
田辺 征夫	独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所長	遺構
玉井 哲雄	独立行政法人国立歴史民俗博物館教授	遺構
西村 幸夫	東京大学教授	保存

※ ◎委員長 ◎副委員長 遺構：遺構検討部会、保存：保存管理計画検討部会、整備：整備検討部会

表2 発掘調査年次計画

	年 次 調査回数	調 査 内 容 等	調査面積	調査期間	予算(千円)	備 考
第1次三ヵ年次計画	平成10年度 第49次	・堀内部地区の中心建物群、特に最大建物である南北棟4間9間42SB1(28SB4)の東側地区の解明	500㎡	5月15日 ～10月31日	18,211	国庫補助
		・23次調査時の23SB2建物跡の延長確認。				
		・23SA3柱列跡、23SA1堀跡の延長確認。				
	平成11年度 第50次	・48SB1建物跡の延長確認と所属時期の検討。	1,800㎡	5月13日 ～10月31日	32,236	国庫補助
		・池跡及び中心建物群を囲む23SA1堀跡の追跡。				
		・28SB4東側の状況及び建物群の伸長。				
	平成12年度 第52次	・42SD1大溝とされていた遺構の時期及び伸展状況追跡。	2,500㎡	5月15日 ～11月17日	43,341	国庫補助
		・37次、42次の内容確認調査に確認されていた溝・堀類の時期及び伸展状況の把握。				
		・堀内部地区、中心建物群の西側及び北西側地域の解明。				
第2次三ヵ年次計画	平成13年度 第55次	・祭祀遺構周辺地域の解明。	3,100㎡	5月11日 ～11月13日	46,103	国庫補助
		・無量光院との対峙地域の解明。				
		・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。				
	平成14年度 第56次	・中心建物群の北側地区の解明。	4,000㎡	5月13日 ～11月29日	62,054	国庫補助 ※整備関係予算含む
		・中心建物群を囲むと推定される堀跡の検出。				
		・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。				
	平成15年度 第57次	・現存する微高地状の高まりの性格把握。	4,000㎡	4月14日 ～10月31日	67,195	国庫補助 ※整備関係予算含む
		・北上川縁地域の状況把握。				
		・第52次発掘調査の際に検出された大規模な堀(内堀)と張出施設を伴う溝の追跡。				
平成16年度 第59次	・北上川右岸縁での大型建物の展開の把握。	3,500㎡	5月10日 ～10月31日	69,317	国庫補助 ※整備関係予算含む	
	・遺跡を二分する外堀の追跡。					
	・旧池跡の規模と造成時期の把握。					
平成17年度 第64次	・旧池跡の規模と造成時期の把握。	2,500㎡	4月15日 ～9月30日	141,679	国庫補助 ※整備関係予算含む	
	・遺跡から東側への建物等の展開状況の確認。					
	・遺跡中核を囲う堀の追跡調査及び門跡及び道路遺構の確認。					
平成18年度 第65次	・既調査区の再検証	1,500㎡	5月8日 ～10月31日	64,481	国庫補助 ※整備関係予算含む	
	・道路遺構(21SC1)及び堀跡(23SA1)の延長確認					
	・遺跡を区画する二重堀の構造や構築時期の特定					
平成19年度 第68次	・遺跡南端外堀の有無の確認	1,200㎡	5月7日 ～10月15日	153,801	国庫補助 ※整備関係予算含む	
	・既調査で一部確認されている橋跡の追跡調査					
	・堀内部北部のトイレ状遺構の分布					
平成20年度 第69次	・堀内部北部のトイレ状遺構の分布	1,100㎡	5月7日 ～12月10日	126,884	国庫補助 ※整備関係予算含む	
	・堀内部北端部の構造確認					
	・堀内部北端部の構造確認					
平成21年度 第70次	・遺跡北端部の堀の延長確認	1,100㎡	5月8日 ～10月31日	150,150	国庫補助 ※整備関係予算含む	
	・堀内部北端部の様相確認					
	・堀内部と堀外部との導入施設の確認					
平成22年度 第72次	・堀内部北端部の様相確認	1,500㎡	5月7日 ～10月31日	84,222	国庫補助 ※整備関係予算含む	
	・堀跡の延長確認					
	・堀内部地区の道路の延長の確認。					
平成23年度 第73次	・堀内部と堀外部との導入施設の確認	1,100㎡	6月1日 ～10月31日			
	・堀跡の延長確認					
	・堀内部と堀外部の導入施設周辺域の確認					
平成24年度 (予定)		1,100㎡				

※ 第51次・53次・54次・58次・60～63次・66次・71次調査は平泉町教育委員会が実施。

2 調査計画及び平泉遺跡群調査整備指導委員会

岩手県教育委員会では柳之御所遺跡の調査を3カ年ずつ計画を立て進めている。平成22年度調査(72次)は第5次3カ年計画の1年目にあたる。第5次3カ年計画は堀跡を中心に発掘調査を行い、堀跡や堀内部地区への導入施設などの検討と整備に関わるデータ収集を主な目的とした。なお、平成23年度も堀内部地区北端部の調査を行っており、堀跡を中心として北端部の遺構の様相や導入施設の有無を確認することを主な目的としている。第5次3カ年計画では北端部周辺の堀跡を中心に調査を行い、その後堀外部地区周辺の調査へと進んでいく予定である。これまでの計画と今後の計画については表2に示した。調査整備にあたっては平成10年度から「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」を設置し、柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査及び調査研究に対して指導助言を得てきた。平成12年に「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに追加登録されたことから、会の名称を「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」に改め、さらに平成15年度は世界遺産本登録に向けた周辺遺跡の検討の必要性から「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と改称した(表1)。

平成22年度の委員会・専門部会は表3の通り開催した。

表3 平成22年度指導委員会協議事項

回	日 時	内 容
遺構・整備部会	22.6.4	史跡公園開園後の状況について
		今年度の調査整備の内容について
		橋跡の整備について
		平泉遺跡群の調査整備について(無量光院跡の整備)
第1回委員会	22.7.29~30	今年度の調査について
		今年度の整備について(植栽、看板等について)
		橋跡の復原について(21SX35,23SX12の遺構内容について)
		平泉遺跡群の調査整備について(無量光院跡の整備)
遺構・整備部会	22.10.12	今年度の調査について
		橋跡の復原について
		汚物廃棄穴の整備について
		平泉遺跡群の調査について
遺構・整備部会	22.12.22	今年度の整備工事について
		来年度以降の整備計画について
		橋跡の整備検討について
		看板等の整備について
		汚物廃棄穴の整備について
		無量光院跡の調査状況、整備計画について
第2回委員会	23.2.9~10	今年度の整備について
		今後の柳之御所遺跡の整備計画について
		橋跡の整備検討について
		汚物廃棄穴の整備について
		無量光院跡の調査状況、整備計画について
		平泉遺跡群の今年度の調査成果について

3 今年度の調査(図2)

(1) 調査体制

〈岩手県教育委員会事務局〉

生涯学習文化課総括課長	錦 泰司
文化財・世界遺産課長	中村 英俊
主任主査(柳之御所担当)	鎌田 勉 (H23.4.1から)
文化財専門員(柳之御所担当)	岩渕 計 (H23.3.31まで)
文化財専門員(柳之御所担当)	半澤 武彦 (H23.3.31まで)
文化財専門員(柳之御所担当)	戸根 貴之 (H23.4.1から)
文化財調査員(柳之御所担当)	櫻井 友梓

〈岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター〉

所 長	佐々木 勝 (H23.3.31まで)
所 長	渡邊 和男 (H23.4.1から)
文化財調査員	村田 淳

(2) 調査の目的

平成22年度調査(72次)は遺跡北端部の未調査範囲を主な対象とした。この範囲はこれまで未調査の範囲と、平泉遺跡調査会及び岩手県教育委員会による調査が一部で行われた範囲を含んでいるが、大部分は調査が行われておらず遺構の分布状況等には不明な点があった。過去の調査の成果では、平泉遺跡会の調査が昭和45年に行われ、10次調査に位置づけられる。部分的な確認だが3×3間以上の建物跡が確認されている。その後、岩手県教育委員会が37次調査(平成4年度)で確認調査を行っている。今回の範囲と重なるのはI地点とされた範囲で、大型建物を確認した。ただし、トレンチ調査であり、規模等は不明である。これらの調査では、今回の調査範囲の内、標高の高い部分を対象に行い、掘立柱建物跡が確認されているものの規模等には不明な点が多く、小規模な調査であったことから周囲の状況も不明確である。

また、今回の調査範囲は、59次調査(平成16年度)と70次調査(平成21年度)で岩手県教育委員会が調査した範囲と隣接する。北側に隣接する59次調査(平成16年度)の範囲は、北上川沿い調査区とされた範囲で、バイパス事業に伴う修景盛土工事に先立って行った地点である。このうち今回の調査範囲に近接するのはもっとも北側の範囲で、柱穴跡や溝跡が確認されている。遺跡は12世紀当時はさらに北側まで続いていたが北上川によって削られてしまったことが指摘されている。70次調査では東側に隣接する範囲を調査し、井戸跡やトイレ状遺構を検出している。72次調査の調査範囲との関連が想定されるが、70次調査の範囲では柱穴跡は規模の小さいものが多く、掘立柱建物跡を構成するものが確認できないなど地形の残存状況を含め様相には不明な点もあった。

また、今回の調査範囲は南北57～58のラインを境に標高が異なり、低い範囲はこれまで未調査の部分である。この部分は南側の41次調査の範囲で堀跡が確認されており、これが延長する可能性が想定されていたが2条の堀跡が平行して延びるのかなど課題も残されていた。また、2条の堀跡の時期についても、遺跡南端部では関連する遺構の関係から時期差を確認しているが、その他の範囲では平行して走っており切り合い等は確認されていない。今回の調査範囲でも遺物や遺構の状況を把握し、こ

れらについての情報を得ることも目的としている。

今回の調査では、これまで未調査の範囲が多く不明な点が残されていたことから、標高の高い範囲については掘立柱建物跡やそのほかの遺構の分布状況や内容を把握すること、標高が低い範囲については堀跡の延長部分の内容を把握することを目的として調査を行った。

なお、調査は遺構の分布や所属時期の確定、遺構の性格等を把握することを目的としているが、遺構の保存のために、精査の際の掘削は必要最小限にとどめている。また、調査区全体と一部の掘削を行った遺構についてはいずれも調査後は砂で保護層を確保した上で埋め戻しを行い、遺構の保護を図っている。

(3) 調査の方法

グリッド

柳之御所遺跡の調査に際しては、遺構の測量や遺物の取り上げなどの作業に際し、基準としてグリッドを設定している。このグリッドは岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1988年から始まる緊急調査に際し平泉町教育委員会と協議のうえ設定したものである（岩手県埋蔵文化財センター1995）。平面直角座標第X系（日本測地系）をもとにした5×5 mグリッドで、南北方向の基準線に対し真北は、西に0° 11′ 振れる。遺跡範囲の北西端辺りが原点（0, 0）となる。

なお、49次調査まではグリッドの呼称をX座標方向、Y座標方向の順にしていたが、50次調査以降、その順を逆転させY座標方向、X座標方向の順で呼称・記載している。混乱を最小限にとどめるため、本書においてもこの方式を採用し、たとえば66-70（Y-X）グリッドならばX軸方向が70、Y軸方向が66を示している。以下の記載についてはこのグリッドによって調査を行い、遺物の取り上げも、近現代の改変による耕作土の出土遺物等を一部除いて、基本的にこのグリッドによって行っている。

表土掘削・遺構検出

今回の調査では、前年度にまず調査区内にトレンチを数本設定し、遺構検出面までの深さを確認する作業を行っている。この調査で表土の厚さを確認したため、今年度の調査ではバックホーを使い、表土を除去した。また、表土が薄い範囲については人力で表土除去を行った。表土の除去後は遺構の検出を、鋤簾などの道具を使用して確認調査（検出作業）を行った。

遺構精査・記録

検出作業によって確認された遺構については、遺跡保護のため基本的には掘削を伴う精査は行っていない。しかし、一部の遺構については遺構の年代把握や遺物検討のために、半裁等によって土層観察を行い、遺構の断面を記録した。平面図の実測は5 mグリッドを分割した1 m×1 mのメッシュを使用して手作業で行った。今次の調査で検出された遺構はもちろんであるが、既知の遺構についても、検出したものについてはあらためて平面図の作成を行っている。写真については6×7判カメラ（モノクロ・リバーサルフィルム）を中心に、適宜35mm判カメラやデジタルカメラを使用して撮影を行った。調査区全景写真撮影に際しては高所作業車を使用して、調査員が撮影を行っている。

遺構名称

今次調査における遺構名は新期の遺構については頭に今回の調査次数である72を付して上記遺構略号を使用した（例.72SK〇〇）、それ以外の遺構については柱穴を除き旧番号（既調査で命名）で統一し、本書においても使用している。

整理作業

野外調査終了後の平成22年11月1日から平成23年3月31日まで行った。遺物は水洗後に注記→接合



図2 柳之御所遺跡調査範囲図

→実測→トレース→図版作成→写真撮影の順で作業を行った。遺構については点検、合成の後、必要に応じて第2原図を作成し、その後トレース→図版作成の順で作業を行った。

記載内容

この報告では、今次の調査で検出した遺構と既知の遺構でも精査の際に半裁した遺構について記載している。また、新たに精査した柱穴が含まれる建物跡や新たな知見が得られた遺構についても記載している。

普及活動

普及活動の一環として、野外調査の全容がほぼ明らかとなった9月11日に現地説明会を行った。雨天であったが、約100名の参加者を得た。そのほかに、遺跡を訪れる観光客や小中学校の見学などに対して、必要に応じて随時現場を公開した。

(櫻井)

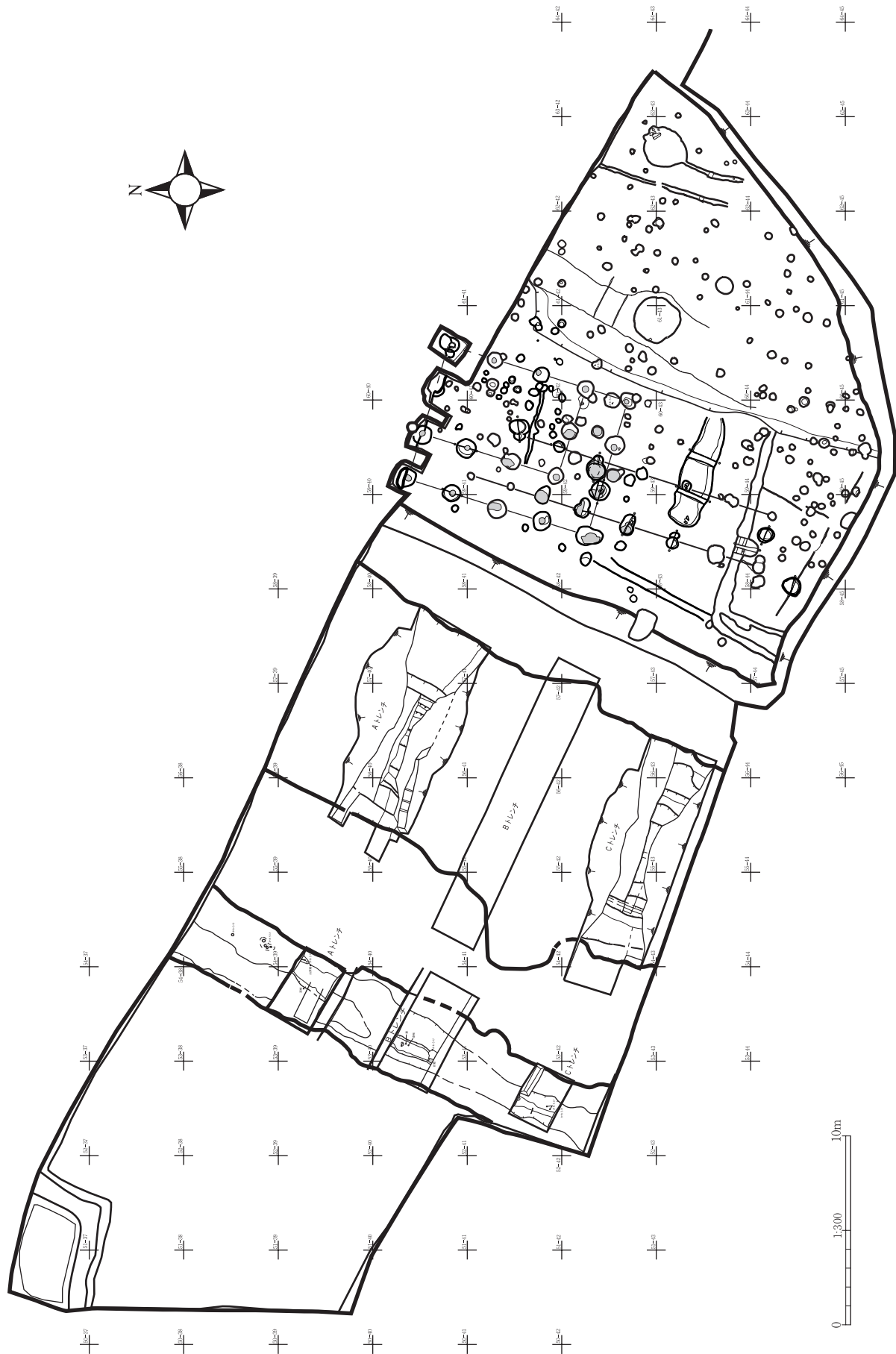


図3 北区遺構配置図

Ⅱ 調査内容

1 北区

(1) 調査の概要

北区は、堀内部地区の北端、50-36グリッドから62-46グリッドにかけて設定した調査区である。北西―南東方向に長い調査区で、面積は1,500㎡である。調査前の現況は畑地及び水田である。高低差のある2面によって構成されており、2面は約1.2mの比高差がある(図3)。過去の造成時に大幅に削平されている為旧地形はほとんど残存しておらず、表土直下が黄褐色の粘土または砂の地山層となる。後述するように、西側の低い面(北区下段とする)からは堀跡、東側の高い面(北区上段とする)からは掘立柱建物跡、柱列などを検出した。

本調査区内は、過去に平泉遺跡調査会が10次調査として、岩手県教育委員会が37次調査としてそれぞれトレンチ調査を実施している(岩手県教委1993)。両調査では大型の柱穴が検出されており、3×3間以上の建物跡の存在が予想されていたが、これについては今回の調査により72SB1を構成する柱穴であることが判明した。

また、周辺では59次調査で遺跡北西部の修景盛土造成に先立ち今回の調査区の北側の隣接地(報告書中では北上川調査区と呼称)、70次調査で東側の隣接地を調査している(岩手県教委2006・2011)。59次調査では土坑や柱穴、70次調査では井戸やトイレ状遺構などを検出している。

今回の調査における検出遺構は以下の通りで、次節では精査した遺構を中心に概要を記す。

堀	2条
掘立柱建物	1棟
柱列	2条
溝	4条
土坑	6基
性格不明遺構	1基
井戸	1基
柱穴	227個(掘立柱建物・柱列を構成するもの含む)

(2) 検出遺構

【堀跡】

72SD1(図4・5・6)

調査区西側55-39～56-43グリッドに位置する。遺跡範囲の南～西側で過去に調査された21SD1・41SD2・56SD38(=内側の堀)と同一のものと考えられるが、地点が離れているため今回は遺構名を別に付した。重複する遺構は無い。

今回の調査区では約23m分を検出した。北東―南西方向に直線的に走っており、中軸線の方位はN-27°-Eである。一部壁面の崩落等によって拡がっている部分もあるが、上面幅はおおむね11～12mである。なお、14.7mと最も拡がる54-41グリッド内の張り出しについては重複する別遺構の可能性もあったが、トレンチ調査により堀跡と一連の堆積であることを確認している。調査はトレンチを3カ所に設定し(A～C)、そのうちA・Cトレンチで底面まで掘り下げを行った。

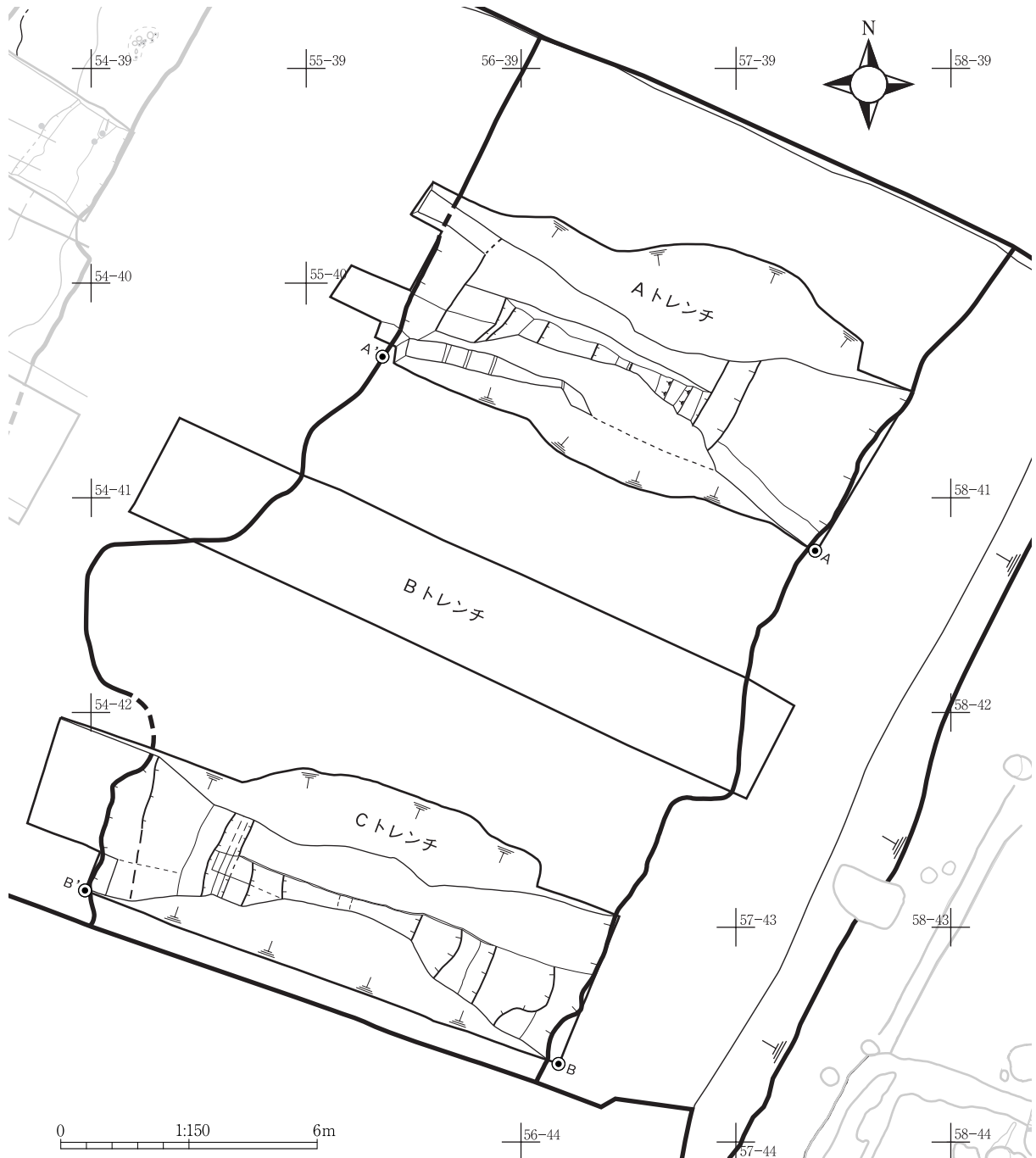


図4 72SD1平面図

断面形はV字形で、検出面からの深さはA・Cトレンチとも約3.8mである。検出面標高が同じであるため、底面標高も約23.5mとほぼ同じである。底面は非常に狭く、壁面は底面からハの字状に開きながら立ち上がる。しかし、上面まで一直線に立ち上がるわけではなく、中位付近でステップ状の平坦面を形成する。底面からの立ち上がりはCトレンチのほうが急であり、平坦面までの角度は約45°である。一方、Aトレンチの立ち上がりは約38°とCトレンチに比べて緩やかである。平坦面は壁面中位で検出されているが、両トレンチで形成される高さや規模は異なる。Aトレンチで検出された平坦面は、検出面から2.5～2.7mの深さに位置し、幅は0.45mである。Cトレンチで検出された平坦面は、検出面から1.5～1.7mの深さに位置し、幅は0.7mである。この平坦面の用途については、本堀

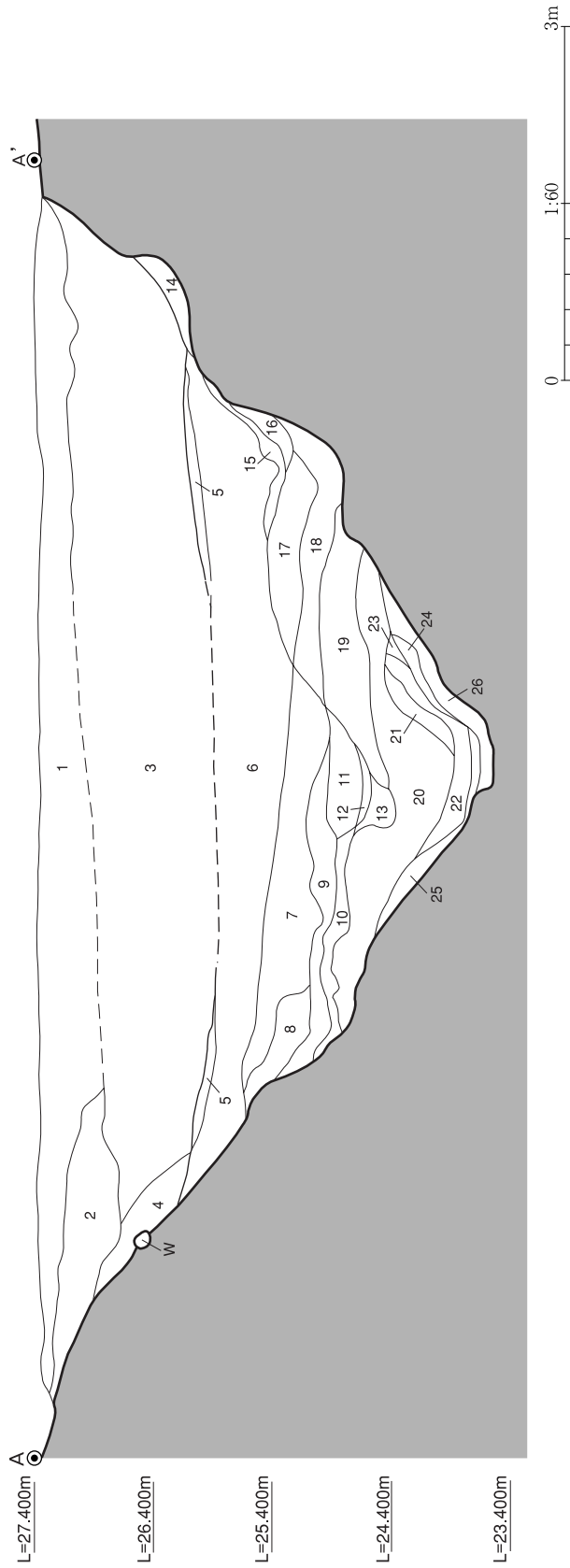
跡の規模が大きいことと壁面の立ち上がりが急角度であることから、掘削時の作業用として形成された可能性がある。

堆積土は両トレンチで細かな差異はあるが、大きくは上位が盛土層、中～下位が自然堆積層であり、両者は旧表土を境に分けることができる。盛土層は、地山ブロックを多量に含む粘土が主体で、粘性は強いが締りは弱く、降雨・流水等の影響で塊状に崩落する。Aトレンチでは1～4層、Cトレンチでは1～5層が相当し、層厚はAトレンチが1.5m、Cトレンチが1.2mである。本堀跡の出土遺物の大半はこの層から出土しており、12世紀代のかわらけと国産陶器が多量に出土しているが、その他に近代の陶磁器類も一定量含まれている。出土遺物の状況から、これらの盛土は近代以降に持ち込まれた土であり、遺跡内あるいは遺跡周辺の土を利用したものと考えられる。

盛土造成以前の旧表土（Aトレンチ5層、Cトレンチ6・7層）より下位が自然堆積層であり、Aトレンチでは6層以下、Cトレンチで8層以下が相当する。黒色～灰黄褐色の粘土や砂が主体であり、下位ほど粘土質で水成堆積の様相を示す。厚さの差はあるが、基本的には層状堆積であり上位の盛土層や後述する72SD2堆積土のような人為堆積の様相はみられない。埋没は自然に進行していったものと考えられ、Aトレンチ21～25層とCトレンチ32層、Aトレンチ9～11層とCトレンチ15～17層のように混和物や堆積の方向から対応が可能な層位がある。なお、Aトレンチ12・13層とCトレンチ18層のように堆積の途中でできた雨裂のような部分はあるが、両トレンチとも掘り返しの痕跡と考えられるような堆積状況は認められない。また、自然堆積層には上位の盛土層と異なり近代の遺物が含まれないことから、近代の盛土造成直前まで本堀跡は完全には埋没せずに窪んでいたものと考えられる。自然堆積層の堆積開始年代については、Cトレンチ32層中から採取した炭化物の放射性炭素年代測定結果の限りでは11世紀末～13世紀初頭（ $880 \pm 20 \text{yrBP}$ ）となる。最も古ければ12世紀初頭頃からの埋没とみることも可能だが、底面付近の層（Aトレンチ25層、Cトレンチ32層等）から出土したかわらけの形態から、実際の埋没は12世紀後半以降と考えられる。

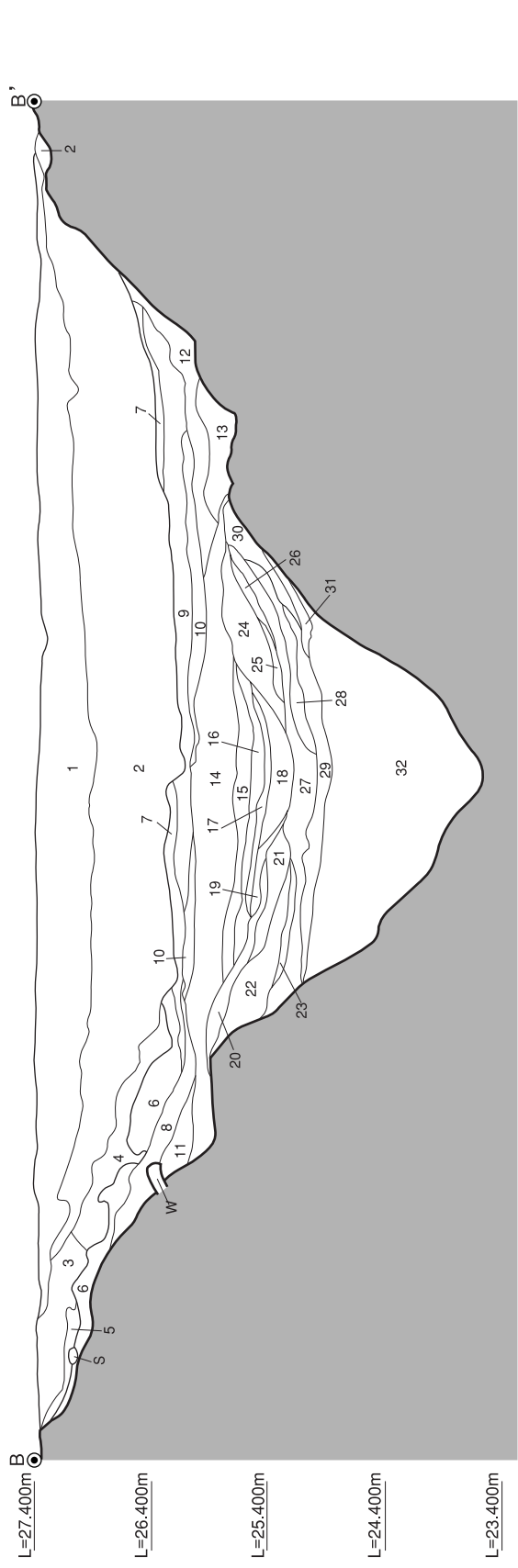
遺物はかわらけが5,090.4g、国産陶器が9,747.9g、輸入陶磁器が101.4g、その他木製品などが出土している。両トレンチとも上位の盛土層からの出土が大半を占める。今回は、旧表土直下（Aトレンチ6層以下、Cトレンチ8層以下）から出土したものを中心にかわらけ14点、国産陶器163点、輸入陶磁器15点、木製品7点を掲載した。

前述の通り本堀跡は過去の調査で検出された内側の堀（21SD1・41SD2）と一連のものとみられ、堀跡では最も北側を検出したことになる。内側の堀は総延長が500m以上と想定される大規模なものであるが、堀内部地区の北側を巡る部分についてはこれまでに41次調査でトレンチ調査が実施されたのみであった。41次調査41SD2トレンチの成果では、断面形がV字形になること、上位約1mは近代以降の人為堆積土であること等が確認されている。これまでの調査でも本堀跡は南側では断面形が逆台形であり、北側と南側で断面形が異なることは確認されていた。しかし、北側の調査は41次調査のみであったため、北側については検討材料に乏しかったが、今回の調査区における調査結果はおおむね41次調査と共通するものであり、北側の堀跡の状況を追認することができた。



- A トレンチ
- 1 25Y8/6 黄色粘土・10YR3/3 暗褐色粘土・7.5YR6/6 橙色砂の混合 締めやや疎でブロック状に崩れる 近代以降の盛土=Cトレンチ1層
 - 2 10YR4/1～5/1 褐灰色 上位に地山ブロック全体に炭化物微量含む 近代以降の盛土
 - 3 25Y8/6 黄色粘土・10YR3/3 暗褐色粘土・7.5YR6/6 橙色砂の混合 締めやや疎でブロック状に崩れる 近代以降の盛土=Cトレンチ3層
 - 4 10YR5/1 褐灰色粘土 地山ブロック(φ10mm以下)10%含む 木根多い
 - 5 10YR3/2 黒褐色 締めやや疎、粘性やや弱 基本は6層と同じだが、根の浸食がない分、締めと粘性は強い=Cトレンチ7層
 - 6 10YR5/1 褐灰色～6/2に多い黄褐色 上位がこまかい黄褐色で漸移的に色調変化 締め密、粘性強 炭化物(φ1～5mm)5%含む 酸化鉄を含み西側ほど多い
 - 7 10YR4/1 褐灰色 締め密、粘性強 地山ブロック(φ5～20mm)10%、炭化物(φ1～3mm)3%含む
 - 8 10YR5/1 褐灰色 地山ブロック40%、小礫(φ5mm以下)2%含む
 - 9 10YR4/1 褐灰色粘土 地山ブロック(φ10mm程度)3%含む
 - 10 10YR5/1 褐灰色 5Y7/6 黄色土20%、地山ブロック3%含む
 - 11 10YR2/1～3/1 黒褐色 締めやや疎、粘性有 粒子粗い
 - 12 10YR3/1 黒褐色 粘性有 グライ化した地山含む
 - 13 10YR2/1 黒褐色 締めやや弱、粘性強 砂含む
 - 14 10B6/1 青灰色粘土 締めやや疎 炭化物(φ1～3mm)、小礫(φ1～3mm)各1%含む
 - 15 10YR5/1 褐灰色粘土 粘性強 地山ブロック(黄色)含む 16層付近は特に多い
 - 16 10YR5/1 褐灰色 明青灰色粘土(地山ブロック、φ5～30mm)30%含む
 - 17 5B6/1 明青灰色粘土と砂の混合 締め密、粘性強 粘:砂=4:6 粘土はφ20～50mm
 - 18 5B6/1 明青灰色粘土 締め密、粘性非常に強 19層との境界に遺物含む
 - 19 10YR1/7/1 黒色～2/1 黒褐色 締め密、粘性強 炭化物(φ1～3mm)3%、赤色粒子(かわらけ?、φ2～5mm)2%以下 遺物少量含む
 - 20 10YR6/1 褐灰色粘土～6/1 青灰色粘土 粘性強 炭化物(φ1～3mm)3%、赤色粒子(炭?、φ1～3mm)2%含む
 - 21 10YR6/1 褐灰色粘土 黒色粒子(炭?)、φ1～3mm)2%含む
 - 22 10B6/1 青灰色砂 締め、粘性無 粗砂
 - 23 10B6/1 青灰色粗砂 締めやや有、粘性無
 - 24 10YR3/1 黒褐色粘土 混和物無し
 - 25 10YR4/1 褐灰色粘土 青灰色地山ブロック5%含む
 - 26 10YR4/1 褐灰色と5B6/1 青灰色地山ブロックとの混合(7:3) 粘性強 水成堆積層で24層の境に木質含む

図5 72SD1 Aトレンチ断面図



- C トレンチ**
- 1 25Y8/6 黄色粘土・10YR3/3 暗褐色粘土・7.5YR6/6 橙色砂の混合 近代以降の盛土=Aトレンチ1層
 - 2 5Y8/6 黄色粘土・10YR3/2 黒褐色粘土の混合 近代以降の盛土で質は1層とほぼ同じ 近代以降の盛土=Aトレンチ3層
 - 3 2.5Y8/6 黄色粘土・10YR3/3 暗褐色粘土・7.5YR6/6 橙色砂の混合 締りやや疎でブロック状に崩れる 近代以降の盛土=Aトレンチ3層
 - 4 10YR3/2 黒褐色と地山粘土ブロックの混合土 近代以降の盛土
 - 5 10YR4/1 褐灰色粘土をベースに2.5Y8/3 淡黄色粘土(地山ブロック)含む 近代以降の盛土
 - 6 10YR3/1 黒褐色 締り疎、粘性弱 旧表土
 - 7 10YR3/2 黒褐色 締りやや疎、粘性やや弱 =Aトレンチ5層
 - 8 10YR4/2 ~ 6/2 灰黄褐色 締り中、粘やや強 炭化物微量含む、壁面崩落土
 - 9 10YR4/2 灰黄褐色 締り密、粘性やや強 地山ブロック(φ20mm前後)少量含む
 - 10 10YR5/2 灰黄褐色粘土 締り密 地山ブロック(φ20mm程度)多く含むため、9層より色調明るい
 - 11 2.5Y6/2 灰黄色 ~ 4/2 暗灰黄色 締り中、粘やや強 壁面崩落土
 - 12 10YR5/2 灰黄褐色 締り密、粘やや強 炭化物(φ1~3mm)3%、地山ブロック微量含む
 - 13 10YR5/2 灰黄褐色 締り密、粘やや強 地山ブロック(φ5~30mm)40%含む
 - 14 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 粘性強 炭化物(φ2~5mm)、赤黄色粒子(かわらけ?)15%含む、中位遺物包含層
 - 15 10YR3/2 黒褐色粗砂 締りやや疎、粘性やや弱 地山ブロック(φ2~20mm)25%、炭化物(φ1~5mm)3%含む
 - 16 10YR2/1 黒色粘土 粘性強 炭化物(φ2~5mm)10%、赤色粒子(φ1~2mm)2%含む
 - 17 10YR4/2 灰黄褐色砂 締りやや疎、粘性中 炭化物(φ2~5mm)3%、地山ブロック(φ1~3mm)3%含む
 - 18 10YR2/1 黒色粘土 炭化物(φ5~10mm)多く含む
 - 19 10YR2/1 黒色粘土 18層に炭化物含まない
 - 20 2.5Y5/6 黄褐色粘土 粘性強 ブロック状で10YR3/2 黒褐色土含む、壁面崩落土か
 - 21 10YR5/3 黄褐色粘土 締り有 地山ブロック(φ5~10mm)5%、炭化物(φ1~3mm)3%含む
 - 22 10YR3/2 黒褐色 ~ 4/2 灰黄褐色粘土 21層に似るが相対的に締り強い
 - 23 10YR2/1 黒色粘土 炭化物(φ1~2mm)2%以下、礫極微量含む
 - 24 10YR3/2 黒褐色 ~ 4/2 灰黄褐色粘土 地山ブロック(φ50mm程度)20%、炭化物(φ1~3mm)3%、遺物包含層
 - 25 2.5Y5/6 黄褐色粘土 混和物無 壁面崩落土か
 - 26 10YR3/2 黒褐色 ~ 4/2 灰黄褐色粘土 地山ブロック(φ50mm程度)20%、炭化物(φ1~3mm)3%、遺物包含層
- 27** 10YR2/1 黒色粘土 非常に粒子細かい、地山ブロック(φ5~50mm)20%含む
- 28** 10YR5/3 において黄褐色粘土 締り有 地山ブロック(φ5~10mm)5%、炭化物(φ1~3mm)3%含む
- 29** 10YR2/1 黒色 ~ 4/1 褐灰色粘土 混和物ほとんど無し
- 30** 10YR3/1 黒褐色粘土 非常に粒子細かい、地山ブロック(φ5~50mm)20%含む
- 31** 10YR3/2 黒褐色 青灰粘土含む
- 32** 地山類似の青灰色粘土と黒色土の互層堆積 Aトレンチ 21 ~ 25層に対応

図6 72SD1 C トレンチ断面図

72SD2 (図7・8)

調査区西側54-38～52-42グリッドに位置する。過去に調査された21SD2・56SD39(＝外側の堀)と同一のものと考えられるが、地点が離れているため今回は遺構名を別に付した。72SD1と平行するが、重複関係には無い。

調査区内では約23m分検出している。北東－南西方向に走る堀で、中軸線の方位はN-27°-Eである。検出時の上幅は約3～4mであるが、上面の堆積土が薄く地山との境界が不明瞭であったため、調査はトレンチを3カ所に設定し(A～C)、底面まで掘り下げを行った。以下では各トレンチでの調査所見を述べていく。

Aトレンチは53-39グリッド内に設定した。規模は、上面幅3.2m、底面幅1.1m、深さ0.8mである。断面形は逆台形で、西側が大きく外方に開いている。検出面は砂質の地山であるが、十和田八戸テフラ(To-H)を含む黒色地山層まで掘り込まれており(第Ⅲ章参照)、底面は凹凸がある。堆積土は地山土(黄色・黒色)のブロックを多量に含んでいることや自然堆積と考えられるような層状堆積となっている部分が確認できないことから、人為堆積で埋め戻しによって形成された堆積と考えられる。今回は混和物や遺物の出土状況から分層しているが、境界が明瞭ではないことから異なる解釈も可能と考えられる。なお、黒色地山層は本トレンチ内でのみ確認されているもので、後述するB・Cトレンチでは基本的に黄褐色の粘土または砂の地山層を掘り込んでいる。

Bトレンチは53-40グリッド内に設定した。規模は、上面幅4.4m、底面幅0.5m、深さ0.48mである。Aトレンチ同様断面形は逆台形であるが、Aトレンチと異なり東側が外方に開く形状である。二段階に掘り込まれたような形状であるが、堆積土の状況から一度埋没したものを掘り返したのではなく、当初からこのような形状として掘削されたものと考えられる。粘土質の地山まで掘り込まれているが、底面に凹凸は見られない。堆積土は砂層である3層が流れ込みによる自然堆積の可能性はあるが、基本的には地山ブロックが斑状に混じる人為堆積土である。

Cトレンチは52-41グリッド内に設定した。検出規模は、上面幅2.7m、底面幅0.4～0.6m、深さは北壁付近が0.35m、南壁付近は0.4mである。A・Bトレンチに比べて浅いが、これは調査区内が南から北へ向かって下る地形であることから本トレンチより北側に位置するA・Bトレンチに比べて削平度が高かったためと考えられる。断面形は逆台形状で、Bトレンチと形状は類似している。掘り込みは砂質地山で止まっており、底面の凹凸はほとんど無い。堆積土は壁面崩落土と考えられる8層を除いて全て人為堆積土で、地山ブロックや酸化鉄をブロック状に含む。

出土遺物は、堆積土の上位を中心にかわらけの破片が23,572g出土している。特にトレンチ外の54-38グリッドで完形のかわらけがまとまっている。一方で、国産陶器や輸入陶磁器は少なく、3つのトレンチあわせても国産陶器は520.8g、輸入陶磁器は14gしか出土していない。この他には、壁土や木製品も出土している。木製品の遺存状況は良好で、Aトレンチ16層出土の漆器椀(298)、Bトレンチ3層出土の折敷(334)などがある。

以上が各トレンチの調査所見である。堆積土は全トレンチで底面付近から人為堆積土であることから、今回の調査範囲では全体にわたって埋め戻しが行われていたことが判明した。人為堆積に用いられた土については、遺跡内あるいは周辺の地山を利用したものと考えられるが、混和物の割合などは差があり全てのトレンチを完全に対応させることは困難である。また、どのトレンチでも断面形は二段階に掘られたような逆台形状であるが、浅い部分の開く方向がAトレンチでは西側、Cトレンチでは東側と近接していながら異なっている。このように、本堀跡は地点が近接している範囲でも形状・堆積状況が大きく異なる点の特徴と言える。なお、これら人為堆積土の堆積年代であるが、Aトレンチ底面付近から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は1050±30yrBP(10世紀末～11世紀初

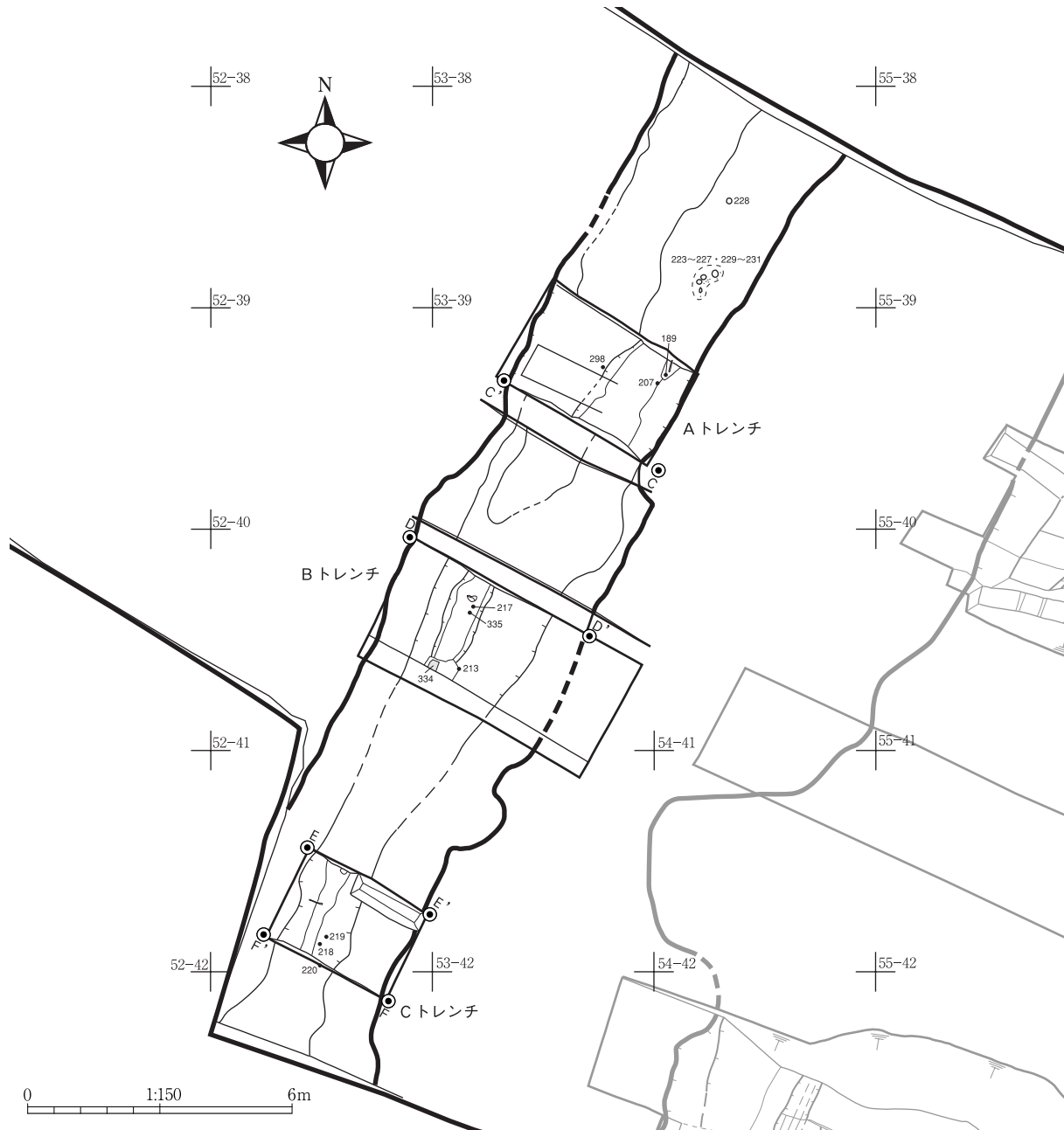
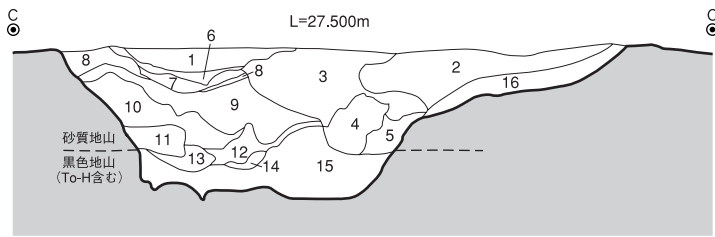


図7 72SD2平面図

頭)であり、これに従うと11世紀初頭頃の堆積土となるが、底面付近から出土したかわらけの形態的な特徴から実際の堆積はそれより遅く12世紀後半代と考えられる。また、人為堆積層の間に自然堆積層を挟まないことから短期間での堆積と考えられる。

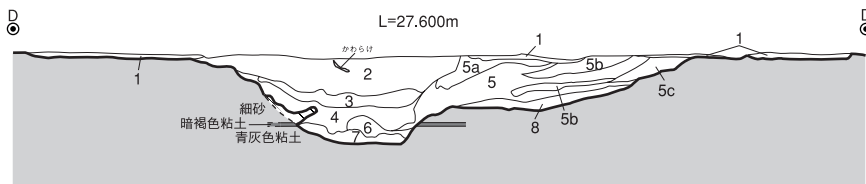
A トレンチ



A トレンチ

- 1 10YR5/1 褐灰色 粘性強 炭化物 (φ1mm程度) 2%、地山ブロック (φ10 mm程度) 10%含む 水田耕作土
- 2 2.5Y8/6 黄色粘土 粘性非常に強 褐灰色土少量含む 人為堆積土
- 3 10YR5/3 褐灰色と2.5Y8/3 淡黄色の混合土 締り密、粘性強 炭化物 (φ2~10 mm) 3%、黒色地山ブロック少量含む
- 4 2.5Y8/3 淡黄色~8/6 黄色 締り密、粘性非常に強 黒色地山ブロック微量、下に褐灰色土含む
- 5 2.5Y8/3 淡黄色~8/6 黄色 粘性強 黒色地山ブロック微量含む
- 6 10YR5/1 褐灰色 粘性強 かわらけ等遺物多量に含む
- 7 7.5YR7/6 橙色砂 締り、粘性共に無し
- 8 10YR6/1 褐灰色 粘性強 黒色地山ブロック少量、酸化鉄含む かわらけ出土層
- 9 2.5Y8/4 淡黄色と10YR5/1 褐灰色の混合土 締り密、粘性強
- 10 10YR7/1 灰白色~4/1 褐灰色 炭化物 (φ2~5mm) 2%、地山粘土ブロック少量、酸化鉄多く含む
- 11 2.5Y8/3 淡黄色 地山由来砂質だが粘性強い
- 12 2.5Y7/8 黄色と10YR5/1 褐灰色の混合土 締り密、粘性強 炭化物 (φ1mm) 2%含む
- 13 10YR3/1 黒褐色 粘性強 炭化物 (φ2mm程度) 5%、地山ブロック少量含む
- 14 10YR4/1 褐灰色 炭化物 (φ2~5mm) 2%、地山粘土ブロック少量、酸化鉄多く含む
- 15 2.5Y8/8 黄色と10YR5/1 褐灰色の混合土 締り密、粘性強 人為堆積土 東側に黄色、西側に褐灰色が多いが境界が不明瞭
- 16 10YR6/1 褐灰色 粘性強 黒色地山ブロック少量、酸化鉄含む かわらけ出土層

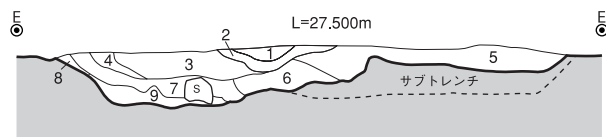
B トレンチ



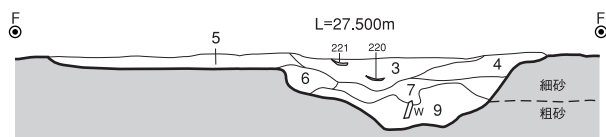
B トレンチ

- 1 10YR6/1 褐灰色 この層の分布範囲までを堀とするなら現状での埋土最上位
- 2 10YR5/1 褐灰色 粘性強 かわらけ等遺物多量に含む
- 3 7.5YR7/6 橙色砂 締り、粘性共に無し
- 4 10YR6/1 褐灰色 粘性強 黒色地山ブロック少量、酸化鉄含む かわらけ出土層
- 5 10YR5/1 褐灰色 締り密、粘性強 酸化鉄少量、粗砂 (φ2~5mm) 5%含む
- 5a 10YR4/1 褐灰色 5層より色調が暗い
- 5b 10YR5/1 褐灰色~5/2 灰黄褐色 締り密、粘性強 砂質 黒色粒子 (φ1~3mm) 15%、粗砂3%含む
- 5c 10YR6/1 褐灰色 a・b層より締り疎 地山由来の流土か
- 6 10YR4/1 褐灰色と5BG7/1 明青灰色粘土の混合土 (4:6) 7層に似るが明青灰色粘土多い
- 7 5BG7/1 明青灰色粘土 締り密、粘性非常に強 10YR4/1 褐灰色ブロック斑状に15%含む
- 8 10YR5/1 褐灰色粘土 土質は7層に類似

C トレンチ①



C トレンチ②



C トレンチ

- 1 7.5YR7/6 橙色砂 締り、粘性共に無し =Aトレンチ7層
- 2 10YR6/1 褐灰色 粘性強 黒色地山ブロック少量、酸化鉄含む かわらけ出土層 =Aトレンチ8層
- 3 10YR4/1 褐灰色粘土 粘性強 炭化物 (φ2~10 mm) 10%、酸化鉄5%、地山由来の粗砂微量、遺物多量含む
- 4 10YR8/8 灰白色粘土と10YR4/1 褐灰色粘土の混合 酸化鉄多く含む 酸化鉄がブロックで混じる 人為堆積
- 5 2.5Y7/3 浅黄色 粘性強 酸化鉄斑状に多く含む赤みがかかる。黒色粒子 (炭?, φ1~3mm) 3%含む
- 6 5BG7/1 明青灰色粘土 締り密、粘性強
- 7 10YR4/1 褐灰色粘土 地山ブロック含む
- 8 5BG7/1 明青灰色砂質土 締り、粘性共に無し 地山崩落土
- 9 5BG7/1 明青灰色粘土 締り、粘性非常に強 10YR4/1 褐灰色ブロック斑状に15%含む

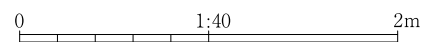


図8 72SD2 トレンチ断面図

【掘立柱建物】

72SB1 (図9・10)

59-40～60-42グリッドに位置する。10次調査で3×3間以上の建物跡と想定されていた建物跡である。調査区内では17個の柱穴を検出した。72SA1・2と重複関係にあるが、柱穴同士が直接的に切りあうものは無い為新旧関係は不明である。この他、P63・76・78とは直接的な重複関係にあり、P63にP16、P78にP13が切られ、P14がP76を切る形で掘削されている。

南北棟の掘立柱建物跡で、身舎が3×2間、西側と南側に1間の庇が付く4×3間の二面庇付建物である。主軸方位はN-17°-Eである。1尺を30.3cmとすると、柱間寸法は、身舎桁行・梁行・庇の出のいずれも8尺(2.42m)の等間である。庇を含めた規模は9.68×7.26m、床面積は70.27㎡である。

柱穴の規模は、掘り方の最大長が77～141cmと幅があるが、おおむね1m前後の円形のものである。柱痕跡はP2・4～7・9～11・14～16で確認されている。規模は平均で直径約30cm、ほとんどのものが中央に位置している。検出した柱穴のうち、3個で裁ち割り調査を行った(P4・6・9)。深さはP4が28cm、P6が38cm、P9が44cmである。上面が削平されていることを考えると本来はこれより深かったと考えられる。柱の裏込めには地山土を使用している。精査した柱穴はいずれも底面に柱のアタリが確認されている。なお、北東隅の柱穴の有無を確認するために59次調査の範囲内である59-41グリッド内に小規模なトレンチを設定して掘り下げを行った。この地点では59P198の脇に落ち込みが検出されたが、今回この落ち込みを再掘削したところ、柱穴状の形状をしていることが判明した。堆積土は59次調査で既に掘り上げられていたため、検証はできないが、平面的な位置関係や形状から72SB1を構成する柱穴であった可能性を考慮してP226として登録した。

遺物は、P8・14・15・17以外で出土している。かわらけの細片が主体で、その他にP6から須恵器・壁土、P9から白磁、P13から渥美窯産陶器、P16から鉄製品が出土している。このうち、P6出土の須恵器甕(234)、P9出土の白磁(235)、P13出土の渥美窯産陶器(236)を図示した。

本建物跡は現時点において堀内部地区の最北端に位置する建物跡である。庇を有し柱穴の規模は大きいですが、堀内部地区で検出された他の庇付建物に比べると床面積は大きくない。柱穴の掘り方内からかわらけが出土していることから12世紀代に構築されたと考えられる。なお、年代観を含む本建物跡周辺の様相については第IV章で触れることとする。

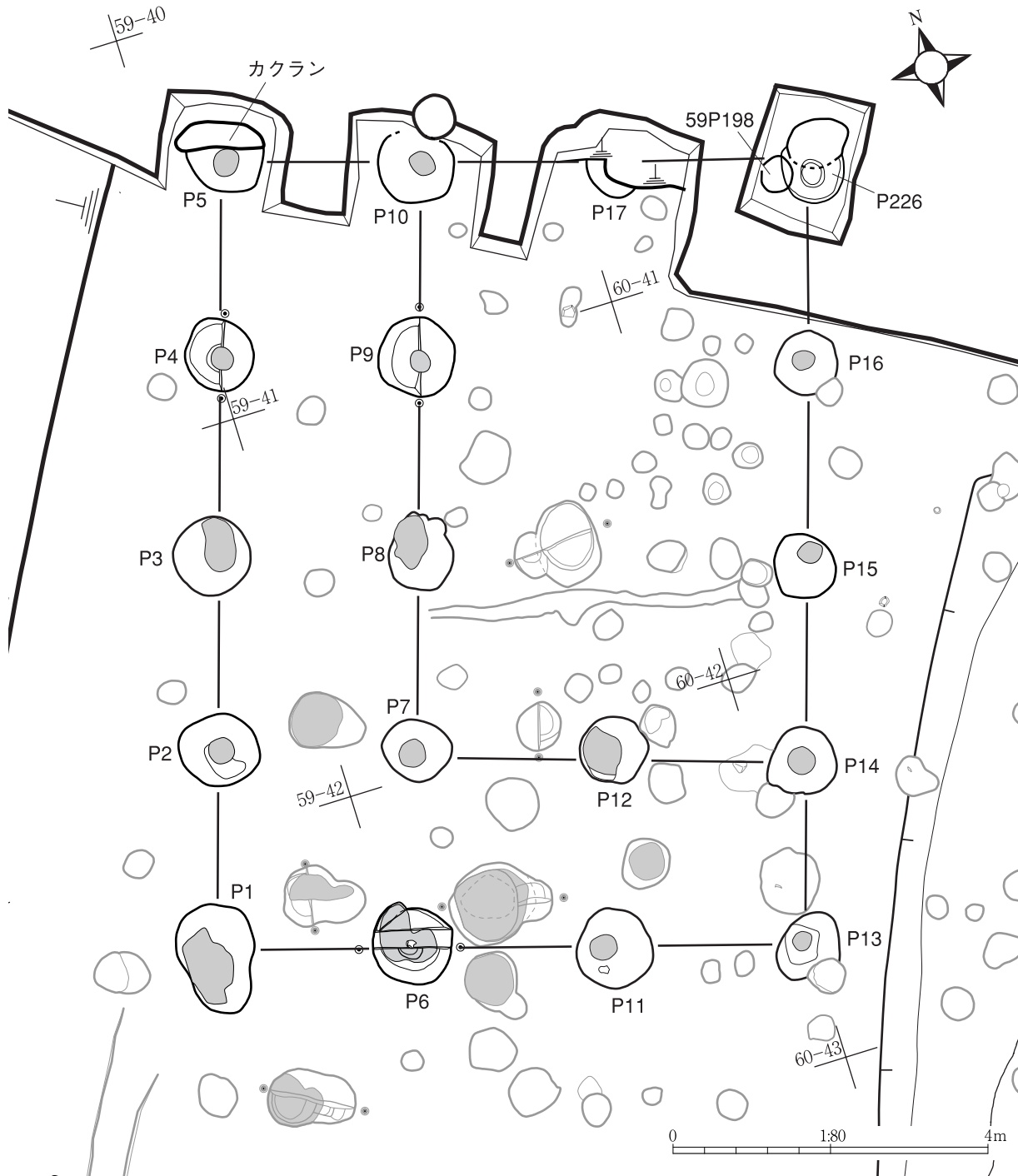
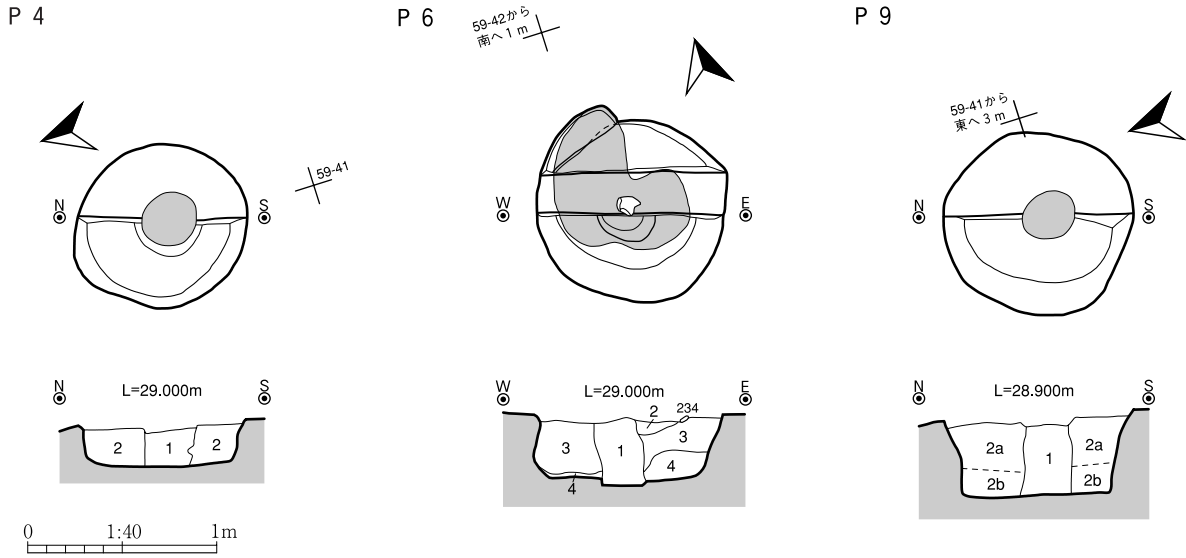


図9 72SB1平面図



P 4

- 1 10YR4/2 灰黄褐色 締り中 炭化物70%、かわらけ片10%含む 炭化物が多いため粘性・締り共弱く崩れやすい 柱痕跡
- 2 10YR7/8 黄橙色と10YR6/2 灰黄褐色の混合土 (8:2) 締り密、粘性非常に強 炭化物(φ1~2mm)2%以下 掘り方埋土

P 6

- 1 10YR5/3 ~ 5/1 にふい黄褐~褐灰色 締り密 炭化物(φ2~10mm)15%、地山ブロック5%含む 柱痕跡
- 2 10YR3/2 黒褐色、赤色粒子3%含む
- 3 10YR6/1 灰黄褐色 締り密、粘性強 炭化物(φ2~5mm)2%含む 掘り方埋土
- 4 10YR7/8 黄橙色 締り密、粘性非常に強 炭化物(φ1~5mm)2%含む 掘り方埋土

P 9

- 1 10YR3/3 暗褐色 締り中~密 地山ブロック(φ2~20mm)20%、炭化物・赤色粒子(φ1~3mm)各2%含む 下位ほど締りは弱い 柱痕跡
- 2 10YR7/6 黄橙色と10YR6/2 灰黄褐色の混合土 締り密、粘性非常に強 炭化物(φ2~5mm)3%含む 上位は灰黄褐色が強(2a)、下位は黄橙色が強い(2b)

図10 72SB1柱穴個別図

【柱 列】

柱穴が直線的に配置されるもので、2条検出した。

72SA1 (図11・12)

59-41~58-43グリッドに位置する、南北方向に走る柱列である。8個の柱穴で構成される(P19~21・22・24・25・34・35)。72SB1・72SD3と重複関係にあるが、直接的な重複関係にある柱穴が無いため新旧関係は不明である。ただし、平面的な位置関係から72SB1とは同時存在ではないと考えられる。

柱穴の配置は直線的であるが、間隔は一定ではない。柱間寸法は、北から7・6・7.3・8.4・8.4・8・8尺(2.1・1.8・2.2・2.55・2.55・2.42・2.42m)で、全長は15.95mである。主軸方位はN-17°-Eで、後述する72SA2と並行する。

裁ち割り調査を実施した柱穴は3個である(P20~22)。72SB1の柱穴と異なり柱痕跡が確認できるものは無い。P20・21のように上面に柱抜き取り痕のような黒色土の分布がみられるものもあるが、この黒色土の分布は断面観察から後世の掘り返し痕跡であろうと考えている。柱穴の平面形はP21のような楕円形やP22・23のように2個の柱穴が連結した形状で、上面規模は長軸38~115cmと幅がある。深さはP20が39cm、P21が35.3cm、P22が34cmである。なお、P22と23、P25と26が重複関係にあること、P20・21が2個の柱穴が連結したような楕円形をしており、これらを別遺構と考えれば本遺構は同一地点での作り替えを行っていると考えられる。

遺物はP21・24でかわらけ片が出土しているが、細片の為図示していない。

本遺構は柵列等の区画施設の可能性がある。出土遺物にかわらけ片が含まれていることから12世紀代に構築されたものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

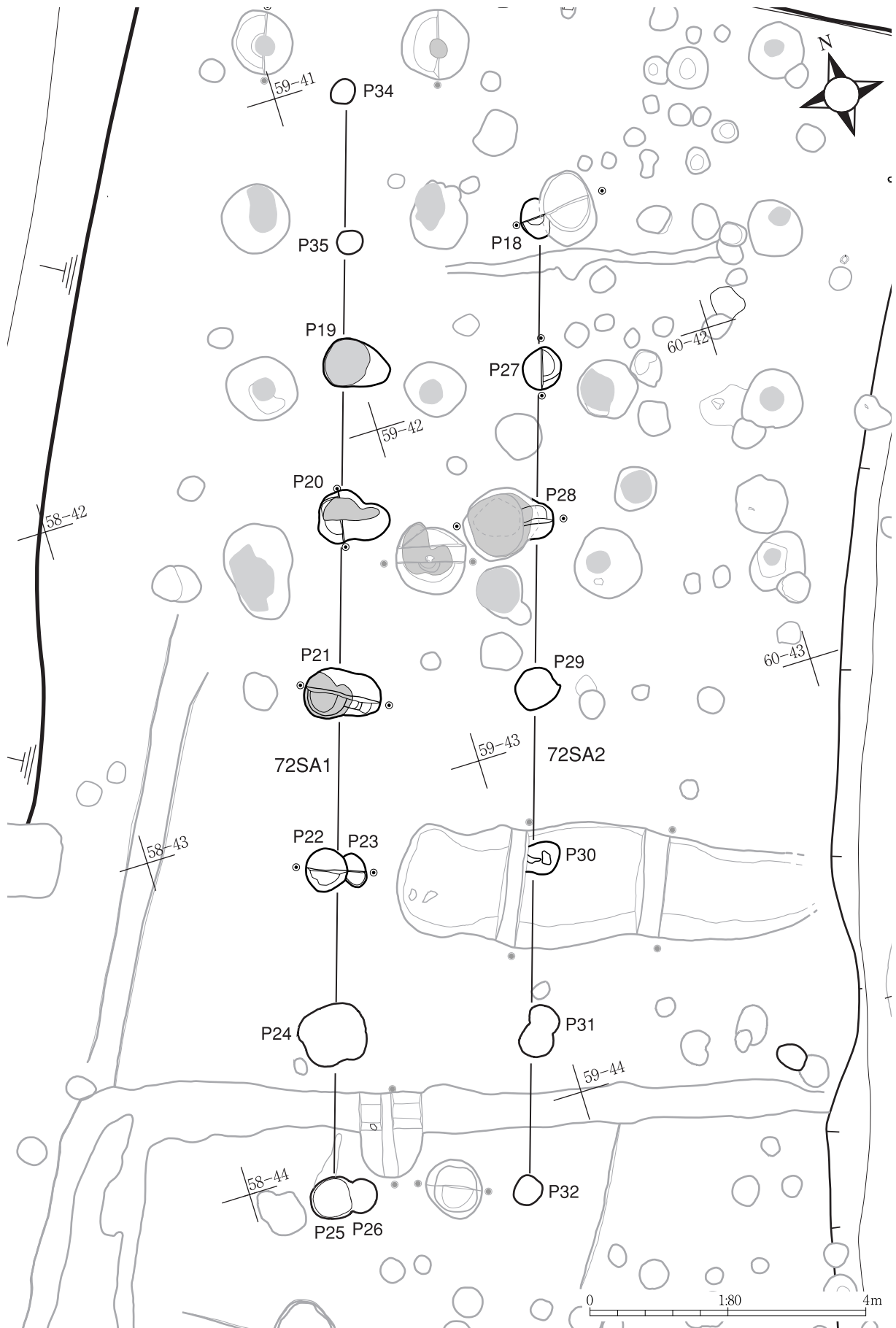
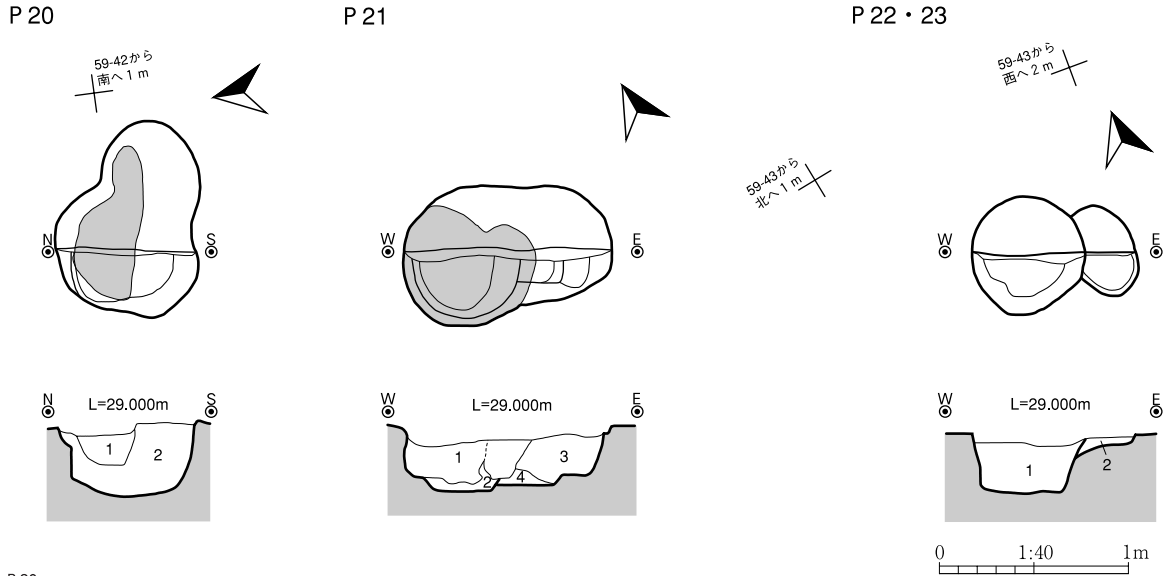


図11 72SA1・2平面図

1 北 区



- P 20**
- 1 10YR3/2 黒褐色 締り、粘性共に中 地山ブロック（φ2～5mm）30%含む
 - 2 10YR6/2 灰黄褐色と10YR7/8 黄橙色の混合土（7：3） 締り密、粘性非常に強 炭化物（φ2～10mm）5%、酸化鉄10%含む
- P 21**
- 1 10YR3/2 黒褐色 締り、粘性共に中 地山ブロック（φ2～50mm）30%含む 後世の攪乱?
 - 2 10YR7/8 黄橙色と10YR6/2 灰黄褐色の混合土 締り密、粘性強 炭化物（φ1～5mm）5%含む 地山由来の掘り方埋土?
 - 3 2層とはほぼ同じだが炭化物2%しか含まない
 - 4 10YR7/8 ～8/8 黄橙色 締り密、粘性非常に強 灰黄褐色土ほとんど含まず
- P 22・23**
- 1 10YR6/2 灰黄褐色と10YR7/8 黄橙色の混合土（7：3） 締り密、粘性非常に強 中～下位に炭化物（φ5mm程度）2%と赤色粒子（酸化鉄か、φ1～2mm）3%含む P22 堆積土
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色 締り密、粘性やや強 P23 堆積土

図12 72SA1柱穴個別図

72SA2（図11・13）

59-41～59-43グリッドに位置する、南北方向に走る柱列である。72SA1とは約2.8m離れて平行関係にある。7個の柱穴で構成されている（P18・27～32）。主軸方位はN-17°-Eである。72SB1、72SK6、72SX1、P47と重複関係にある。直接的な重複関係にある72SK6にP18が、72SX1にP30が、P47にP28が切られていることからこれらより古いと判断できる。なお、72SB1とは直接的に重複する柱穴が無いいため新旧関係は不明である。72SA1と同様、平面的な位置関係から72SB1とは同時存在ではないと考えられる。

柱穴の配置は直線的であり、平行する72SA1と比べて間隔は比較的一定である。柱間寸法は、北から7.3・7.3・8・8・8.6・7.3尺（2.2・2.2・2.42・2.42・2.6・2.2m）で、全長は14mである。

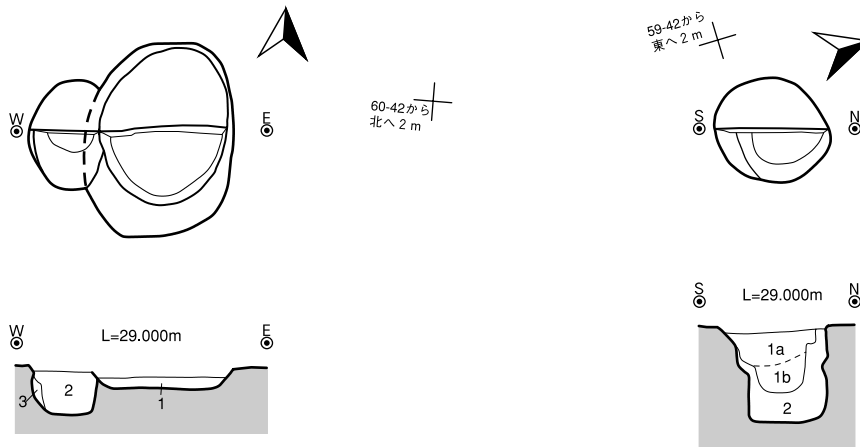
裁ち割り調査を実施した柱穴は3個である（P18・27・28）。柱穴の平面形は円形のものが多く、上面規模は平均54cmである。深さはP18が28cm、P27が53cm、P28が64cmである。いずれも柱痕跡は確認できなかった。

遺物はP30以外でかわらけ片が出土しているが、細片の為図示していない。

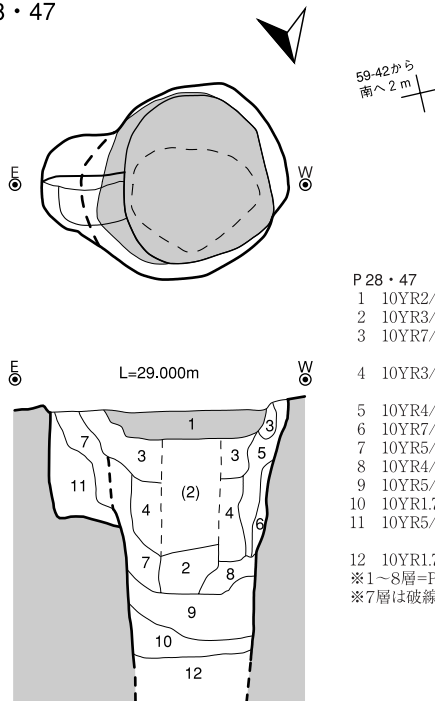
本遺構も72SA1と同様柵列等の区画施設と考えられる。出土遺物にかわらけ片が含まれていることから72SA1同様、12世紀代に構築されたと考えられるが、詳細な時期は不明である。

72SK6・P 18

P 27



P 28・47



72SK6・P 18

- 1 10YR3/2 黒褐色 締り密 地山ブロック (φ2~10 mm) 5%、炭化物 (φ2~5 mm)、赤色粒子 (かわらけ片?) 各2%含む 72SK6埋土
- 2 10YR5/2 灰黄褐色 締り密、粘性中 地山ブロック (φ2~15 mm) 5%、炭化物 (φ1~2mm) 2%含む P18埋土
- 3 10YR7/8 黄橙色と10YR6/2 灰黄褐色の混合土 締りやや密 壁面崩落土または掘り過ぎP18埋土

P 27

- 1 10YR6/1 褐灰色 締り密 炭化物 (φ2~5mm)、酸化鉄各10%含む
- 2 10YR7/8 黄橙色と10YR6/2 灰黄褐色の混合土 (8:2) 締り密、粘性強 炭化物 (φ1~2mm) 2%含む 地山由来の掘り方埋土

P 28・47

- 1 10YR2/2 黒褐色 締り有 地山ブロック (φ2~5mm) 5%、炭化物 (φ1~3mm) 3%含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色 締り疎、粘性弱 地山ブロック2%以下 柱痕跡
 - 3 10YR7/8 橙色地山ブロック 締り強 10YR3/3 暗褐色土との混合土 (6:4) 炭化物 (φ1~5mm) 15%、かわらけ片3%含む 掘り方埋土
 - 4 10YR3/3 暗褐色と10YR7/8 橙色地山ブロックとの混合土 (7:3) 炭化物 (φ1~5mm) 15%、かわらけ片3%含む 掘り方埋土
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色~4/2 灰黄褐色 締りやや疎 炭化物 (φ10mm程度) 3%含む
 - 6 10YR7/8 橙色~8/4 浅黄褐色 地山崩落土か
 - 7 10YR5/2 灰褐色 締り有、粘性やや強 炭化物 (φ5~20 mm) 15%、かわらけ片3%含む やや砂質の掘り方埋土
 - 8 10YR4/3 にぶい黄褐色 締りやや疎 炭化物 (φ1~3mm) 3%、地山ブロック (φ10mm弱) 少量含む 掘り方埋土
 - 9 10YR5/2 灰褐色 粘性強 7層に似るが炭化物の混入ほとんど無く、酸化鉄を含む
 - 10 10YR1.7/1 黒色炭層 小型の炭化材と粘土質黒色土で構成。少量の灰褐色土含む 人為堆積か
 - 11 10YR5/2 灰褐色 締り密、粘性強 10YR8/4 ~ 8/6 浅黄褐色地山ブロックとの混合土 炭化物 (φ2~5mm) 3%含む
 - 12 10YR1.7/1 黒色と5BG7/1 青灰粘土地山との混合土 互層堆積で、下位ほど黒色土主体となる 人為堆積か
- ※1~8層=P47a埋土、9・10・12層=P47b埋土、11層=P28埋土
 ※7層は破線を境にP28と47の埋土に分層可能か

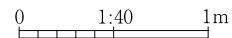


図13 72SA2柱穴個別図、72SK6、P47

【溝 跡】

4条を登録した。このうち、一部精査を実施した72SD3について記載する。

72SD3 (図14)

57-43~59-44グリッドに位置する。東西に直線的に走るが、西側はL字状に屈曲し、さらに二又に分かれており、南端は削平により消失している。また、東側は地形の傾斜と後世の削平によって消失している。この二又部分については2条の溝が重複している状況も考慮したが、上面検出の限りではそのような状況は確認できなかった。規模は、全長14m以上、上面幅0.2~0.85mである。断面形は逆台形で、深さは0.22mである。

堆積土はP 116と重複する部分に設定したトレンチ内で確認した。締りの強い黒色土の単層で、かわらけや国産陶器の小破片を含んでいる。このうち、手づくねかわらけ1点 (245) と渥美窯産陶器3点 (246~248) を掲載した。

年代については明確ではないが、かわらけが出土したP116を壊して掘削されていることから12世紀以降（近世か）と考えられる。区画溝の可能性があるが、全形が不明であるため判然としない。

【土 坑】

位置・規模等は表23の通りで、ここでは精査を実施した2基について記載する。

72SK3（図14）

58-44グリッドに位置する。重複関係にある遺構は無い。形状と規模は72SB1の柱穴と類似しているが、明確な柱痕跡が確認できないことから土坑として登録した。平面形はほぼ円形で、上面規模は0.96×0.94mである。断面形は箱形で、深さは0.88mである。堆積土は自然堆積で、8層に分層した。上～中位に黒色土が厚く堆積しており（1層）、下位は壁面崩落土と流土が交互に堆積している。また、底面には有機質の腐食層と考えられる締りの無い黒色土層が薄く堆積していた。遺物はほとんどが1層からの出土である。かわらけ316gと国産陶器76gが出土しており、このうち国産陶器4点（241～244）を掲載した。

本遺構は、過去の調査で検出されているトイレ状遺構と形態的には類似するが、堆積土が自然堆積であることや籾木・種子などの出土が無いことからトイレ状遺構ではないと考えられる。年代についてはかわらけが出土していることから12世紀に属すると考えられる。

72SK6（図13）

59-41グリッドに位置する。72SA2（P18）と重複関係にあり、これを壊す形で掘削されている。平面形は円形で、上面規模は1.09×0.78mである。断面形は蒲鉾形で、深さは0.15mである。堆積土は黒褐色土の単層で、混和物もほとんど無いことから自然堆積と考えられる。

72SA2を構成するP18を壊していることから72SA2より新しい遺構であり12世紀以降のものと考えられるが、出土遺物が皆無であるため詳細は不明である。また、非常に浅い土坑であることから性格についても不明である。

【柱 穴】

掘立柱建物や柱列を構成するものを含めて227個検出している。掘立柱建物や柱列を構成しない柱穴のうち、精査を行ったのは2個である。

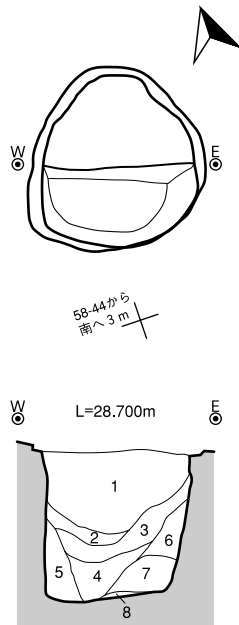
P47（図13）

59-42グリッドに位置する。72SA2（P28）と重複関係にあり、これを壊す形で掘削されている。72SB1とも重複関係にあるが、直接的に重なる柱穴が無いいため新旧関係は不明である。

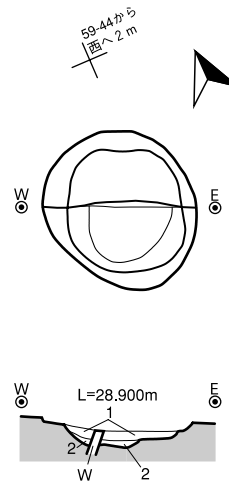
平面形は円形で、断面形は筒状である。上面規模は1.34×（1.02）mであるが、下位ほど規模は小さくなっていき、12層上面では0.67×0.55m程となる。なお、12層上面で深さは1.3mあるが、これ以下については壁面崩落の危険性があったことから掘削を中止している。

堆積土はP28とあわせて12層に分層した。このうち、11層がP28、それ以外が本遺構の堆積土である。さらにP47の堆積土は堆積状況から上位の柱穴状の堆積（P47aとする）と下位の土坑状の堆積（P47bとする）に二分できる。P47aの堆積は1～8層である。1層は柱切り取りの後の堆積土と考えられる。2層は柱痕跡で、締りは非常に弱く、降雨の影響で崩落する程である。3～5・7・8層は掘り方である。72SB1の柱穴掘り方と比較すると締り、粘性共に弱く崩れやすい。P47bの堆積は9・10・12層である。締りの無い黒色土主体で10層中には炭化物を多量に含む。また、地山ブロックも多く含んでおり、人為堆積の様相を呈する。

72SK3



P 118



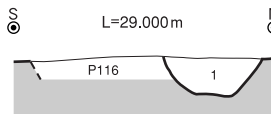
P 118

- 1 10YR3/2 黒褐色 締め密 赤色粒子(かわらけ片?, φ5mm) 2%、炭化物3%含む
- 2 10YR6/2 灰黄褐色と10YR7/8 黄橙色の混合土 地山由来の崩落土または掘り過ぎ

72SK3

- 1 10YR3/3 暗褐色～4/2 灰黄褐色 粘性有 かわらけ片・炭多量に含む
- 2 10YR3/3 暗褐色～4/2 灰黄褐色 粘性有 1層より炭少ない
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 締め密、粘性強 炭化物(φ1～3mm) 2%、かわらけ片2%含む。酸化鉄も含むためやや赤みがる
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 2層とは類似するが、わずかにφ10 mm以下の地山ブロックを含むため締めはやや弱い
- 5 10YR3/2 黒褐色 粘性強 炭化物(φ2～5mm) 3%、地山ブロック2%含む
- 6 2.5Y8/6 黄色 粘性強 壁面崩落土
- 7 10YR3/3 暗褐色と地山ブロック(φ10～20mm)との混合土(7:3)
- 8 10YR1.7/1 黒色 締め疎、粘性やや強 有機質の腐食層が

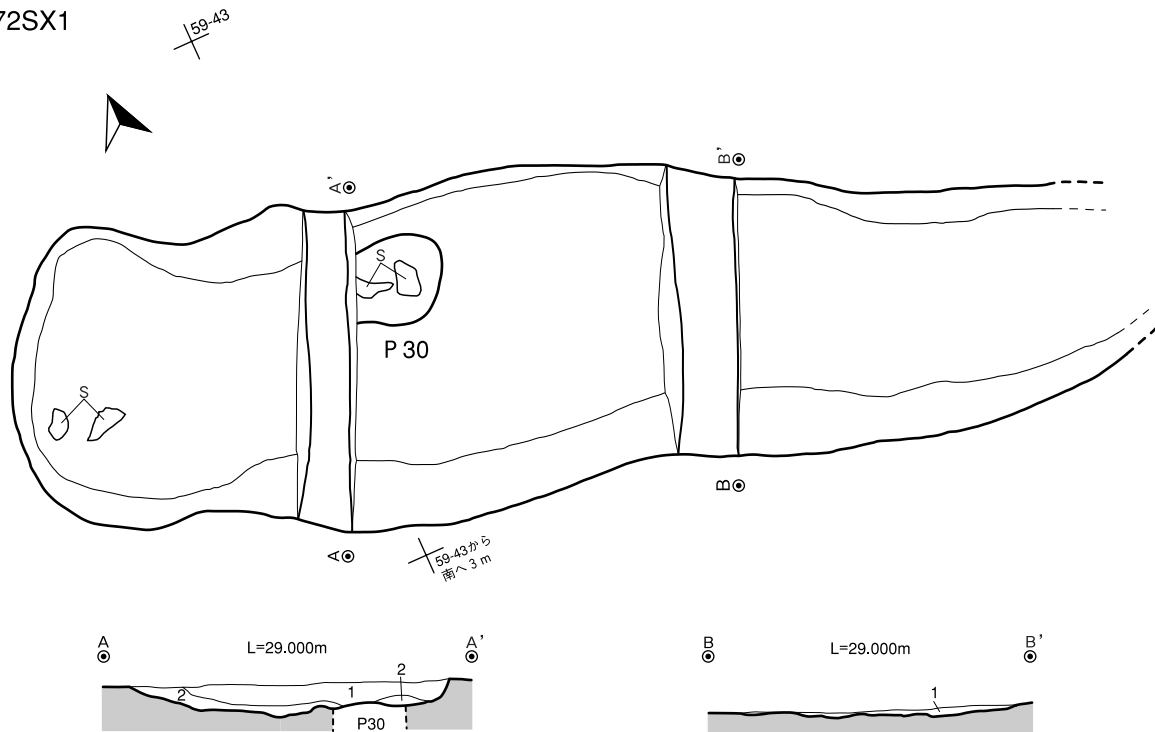
72SD3



72SD3

- 1 10Y2/1 黒色 締め密、粘性有 φ2～20mmのかわらけ片5%、炭化物15%含む
- P116 10YR7/8 黄橙色と10YR5/2 灰黄褐色の混合土(7:3) 締め密

72SX1



- 1 10YR6/1 褐灰色 締め密 炭化物多量、小礫微量含む
- 2 10YR6/1～5/1 褐灰色粘土 1層より粘土質で炭化物少ない
- P30 10YR5/1 褐灰色 SX1の1層に類似する

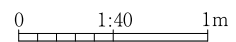


図14 72SD3、72SK3、72SX1、P118

1 北 区

遺物は、かわらけが409.3g、国産陶器が7.3g出土している。掘り方である3～5層からの出土が主である。かわらけはいずれも図示不能な細片であったため、渥美窯産陶器1点(237)のみ掲載した。この他、鉄鏝の茎部も1点出土している(RM17)。

本遺構は柱痕跡を残す柱穴であるが、規模が大きく深いこと、柱痕跡の底面以下にも人為堆積層が確認される等、72SB1や72SA1・2の柱穴とは様相が異なる。また、検出状況の類似した柱穴や土坑(72SK6・P118)も一部精査したが、本遺構と同様の様相を呈するものは確認されなかった。このような様相の柱穴は過去の調査でも確認されていないことからその性格については不明と言わざるを得ない。なお、10層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果は11世紀前半～12世紀中頃(970±20yrBP)であるが、本遺構に切られる形で掘削されているP28と共に72SA2を構成する柱穴からかわらけが出土していることから、実際の埋没は12世紀代と考えられる。

P118 (図14)

58-44グリッドに位置する。他遺構との重複関係は無く、単独で存在する。平円形は円形で、上面規模は0.87×0.78mである。断面形は皿形で、深さは0.16mである。非常に浅く柱痕跡も確認できない。なお、遺物はかわらけが25gと形状不明の鉄製品が1点出土しているが、いずれも小破片のため図示はしていない。

【性格不明遺構】

既述の遺構と形状が異なるものを性格不明遺構とし、1基登録した。

72SX1 (図14)

59-43グリッド付近に位置し、長楕円形の灰褐色プランとして検出した。72SA2(P30)と重複関係にあり、P30の上面を壊して掘削されている。大幅に削平されていることと地形の傾斜の為、東端は自然に消失する。平面形は長楕円形で、現存規模は東西5.5m、南北1.7mである。断面形は皿形で、深さは最も深い断面Aライン付近で0.19mである。堆積土は灰褐色土が主体であるが、堆積が薄いため人為堆積か自然堆積かは判断が出来なかった。遺物は、かわらけ113.3gと羽口1点(30.6g)が出土しており、羽口1点(RP4)を掲載した。

本遺構は、72SA2を構成するP30を壊して掘削されていることから72SA2より新しい遺構であると言えるが、出土遺物が乏しいため具体的な年代については不明である。

(村田)

(3) 出 土 遺 物

出土遺物は総重量で木製品を除いて、103,808.7gである。72次調査では北区上段で遺構の分布状況を確認すること、北区下段では2条の堀跡の平面的な位置関係を確認することを主な目的としたため、遺構の精査は基本的に行っていない。また、堀跡については、それぞれにトレンチを設定して精査を行ったが、部分的なものであり遺物量は多くない。72SD1からの出土遺物の多くは近代以降の盛土とみられる層から出土したものである。この他の遺構からの出土遺物も含め、遺物の多くは原位置をとどめたものではない。

遺物は総重量のうち、かわらけが84,320.6gと最も多く、約80%を占める。次いで陶磁器類が12,656.0gと多い。土壁も72.5g出土している。陶磁器類の内訳は国産陶器類が12,469.3g、輸入陶磁器が183.6gである。国産陶器類は渥美窯産が116点で7,777.0g、常滑窯産が71点で3,648.9g、須恵器系が11点で563.1g、須恵器が11点で480.3gである。

なお、かわらけはおおむね1/4以上残存し器形が復元可能なものを図示し、国産陶器類と輸入陶磁器、瓦は全点を登録し表に掲載、図示可能なものを示した。また、輸入陶磁器の分類にあたっては「大宰府分類」（太宰府市教育委員会2000）を参考にしている。

【土器・陶磁器類】

72SD1出土土器・陶磁器類

72SD1からはかわらけが5,090.4 g、国産陶器が9,749.9 g、輸入陶磁器が101.4 g、その他木製品などが出土している。かわらけは下層の自然堆積層から出土したものを中心に14点を図示した。遺物はその多くが上層の盛土層から出土している（表4）。トレンチごとに見るとAトレンチでは80%が近代以降の盛土層からの出土で、自然堆積層からの遺物は少ない。自然堆積層の中では中層が最も多く、次いで最下層、上層の順に出土量が多い。Cトレンチでも近代以降の盛土層からの出土が70%以上を占めて多いが、最下層の自然堆積層からの出土が比率ではやや多く含まれている。両トレンチでは、盛土層が多いことは共通するが、自然堆積層の遺物の包含状況には各層ごとの比率やその内容で、やや異なる点もみられる。

Aトレンチ出土資料では、1～3はロクロかわらけの小皿、4はロクロかわらけの大皿である。小皿は口径が7.5cm前後の1・2と、9cmを超える3とに分かれる。器形についても共通する特徴は少なく、1は底部から直線的に立ち上がるのに対して、2は緩やかに屈曲しながら立ち上がり口縁部が外反する。3は器高も高く、全体的に大きい器形である。4は口径13.2cm、底径8.2cm、器高3.3cmである。5・6は手づくねかわらけの小皿で、口径が7.1cmと10.3cmと差が顕著である。7・8は手づくねかわらけの大皿である。大皿はいずれも14cm以内と口径が小さいが、器形等に類似する様相は少ない。いずれも摩滅が著しく、自然堆積とみられる埋土の状況とも整合する。なお、これらのうち1・2・5は最下層に近い25層からの出土である。

表4 72SD1出土かわらけ重量表

		層位	重量(g)	比率(%)
Aトレンチ	盛土層		34,607.2	81.6
	自然堆積層		7,813.8	18.4
	内訳	6～11層(旧表土～直下)	2,319.8	5.5
		11～19層	4,131.6	9.7
		20層以下	1,348.2	3.2
		層位	重量(g)	比率(%)
Cトレンチ	盛土層		5,669.5	73.7
	自然堆積層		2,025.7	26.3
	内訳	6～7層(旧表土～直下)	67.1	0.8
		14～26層	667.0	8.7
		27層以下	1,291.1	16.8

9～85は国産陶器類で、9～21・50・51・54～63・75・76・78・79・83は上層の盛土層、22～34・52・53・64～67・80～82は旧表土、それ以外が下層の自然堆積土層からの出土である。産地ごとでは9～53は渥美窯産、54～76は常滑窯産、76～85は須恵器系陶器及び須恵器である。渥美窯産は甕類の体部片が多く、外面に押印等がみられるものでは平行条線の縦長格子文がランダムに施文されるものが多い。9は壺の体部片で、外面に文様の全体構成は不明だが刻画文が施される。25は壺の体部で刻画文がみられる。これも全体の文様構成は不明である。49は突帯文をもつ壺である。52は片口鉢の口縁部、53は高台部分が欠損しているが片口鉢の底部である。常滑窯産では甕類の体部片が多いが、75は片口鉢の体部片である。76は片口鉢の底部で、外面はケズリが行われる。内面は降灰しているが、見込み部分では摩滅が顕著であるほか、高台部でも端部で摩滅が著しい。いずれも使用時の痕跡とみられる。77～82は須恵器系陶器で甕類の体部片が多い。80は壺類の頸部である。83～85は須恵器としたが、外面は平行タタキである。いずれも断面の暗い赤褐色の胎土が特徴的である。

86～91は輸入陶磁器類で、86～88が上層の盛土層、89～91が自然堆積層からの出土である。87は白磁碗の口縁部で、口縁は外反する器形で内面の体部上部に横に沈線が巡る。91は中国産陶器壺類の体部片である。

Cトレンチ出土資料では、92・93はロクロかわらけの小皿、94はロクロかわらけの大皿である。92は周縁部を打ち欠き丸く整形しており、土製円板に加工された可能性がある。93は底部のみの破片である。94は残存が悪く摩滅が著しい。95は手づくねかわらけの小皿、96・97は手づくねかわらけの大皿である。96は口径が12cm前後と小さい。97は口径が16cm、器高3.5cmと口径が大きい器形である。これらのうち、92・93・97は最下層付近の32層から出土している。Cトレンチ出土資料はいずれも残存率が低く、摩滅が著しい。

98～172は国産陶器類で、98～104・116・118・120・134～137・146・147・161・163・172が上層の盛土層、それ以外が下層の自然堆積層からの出土である。自然堆積層では14層からの出土が多い。産地等をみると98～145は渥美窯産、146～169は常滑窯産、170～172は須恵器系陶器である。渥美窯産は甕類の体部片が多く、平行条線文が押印されるものが多い。107は片口鉢の口縁部である。114・119・137・140・145は格子文が施文される。常滑窯産では甕類の体部片が多く、平行条線の縦長格子文がランダムに施文されるものが多い。159は甕の口縁から頸部にかけての破片である。168・169は片口鉢の体部片である。

173～180は輸入陶磁器類で、173は上層の盛土層、174～180は自然堆積層からの出土である。自然堆積層からの出土遺物は、いずれも自然堆積層中では上位の埋土である14層から出土している。174と175は中国産陶器の壺類で、胎土や表面の状況が類似しており同一個体片とみられる。177～180は青白磁で、177は碗の体部下部分で内面は割花文が施される。178は器厚が薄く、壺類の体部片とみられるが器形は不明である。外面は文様が施されるが、二次被熱などの影響から判別できない。180は器形は不明だが口縁部が残存しており、小壺類とみられる。外面は縦に細かく鎬状に施文され、口縁部直下では同様の施文が弧状に入る。178と180はいずれも被熱を受けており、器厚等も類似する。179は水注等の壺類とみられ、耳部が残存する。

このほか、72SD1の平面形の確認を目的に上層の盛土層の一部の掘削にとどめたBトレンチ及び検出面から出土した資料のうち、国産陶器類及び輸入陶磁器を図示した。181～187は国産陶器、188は輸入陶器である。182は押印が重複しており判然としないが、三巴文と縦長格子文が施文される。188は中国産陶器の壺類の体部である。

72SD1では機能した時期に比較的近接するとみられる下層の自然堆積層においても、遺物の特徴にまともにはみられず、摩滅が著しい資料が多く遺物の状況からも堀廃絶時から長期間の幅をもって堆

Aトレンチ

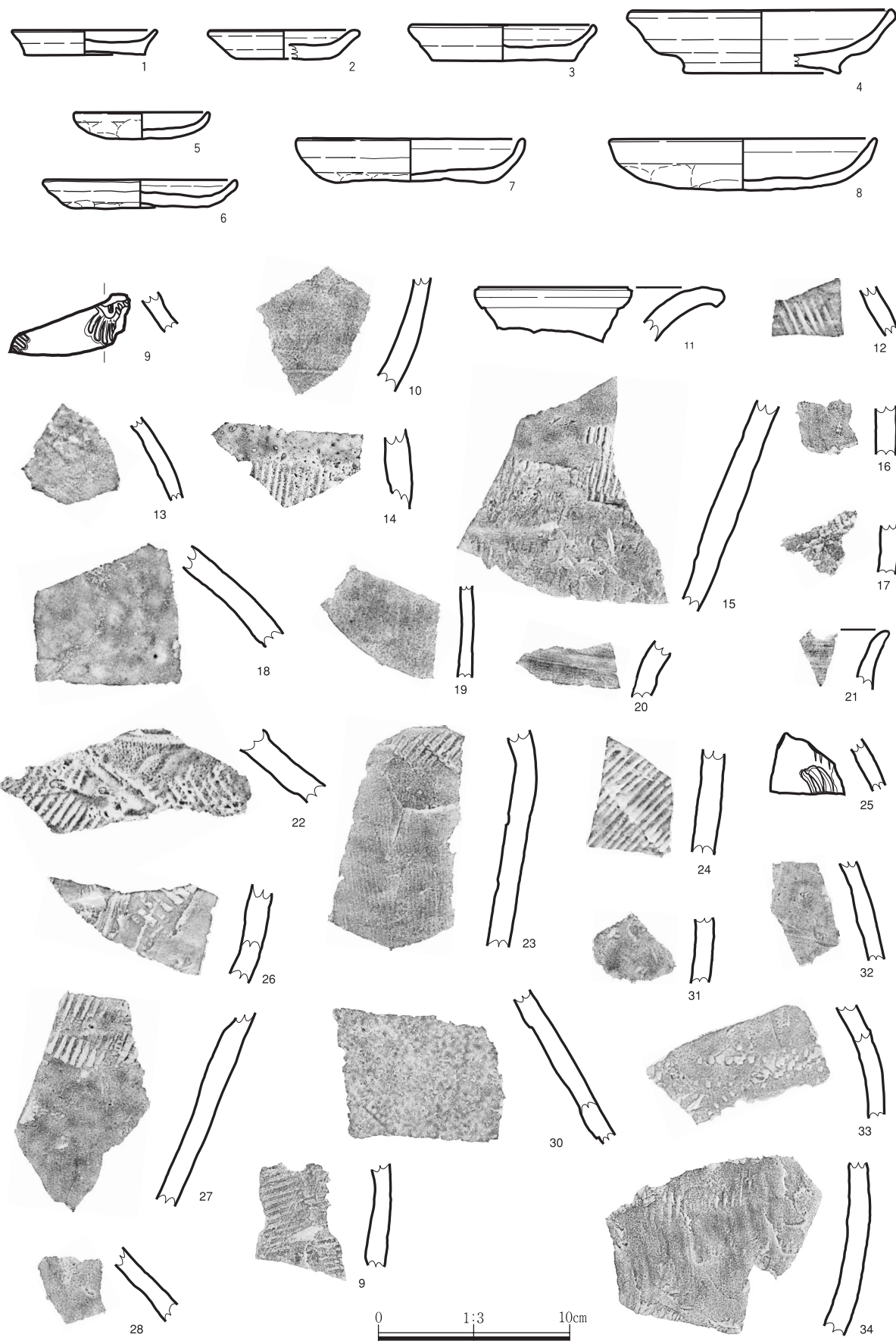


図15 72SD1出土土器類実測図1

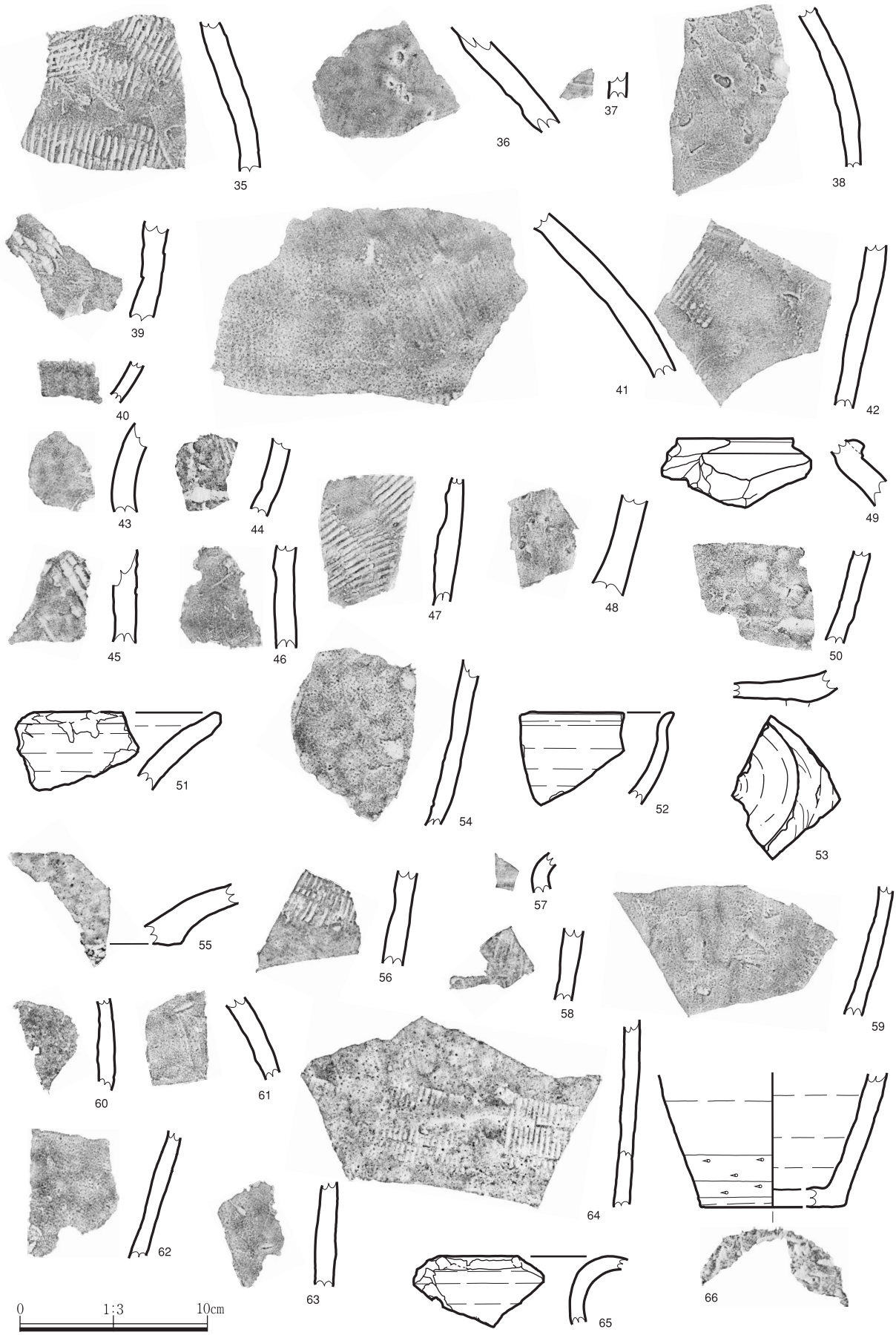
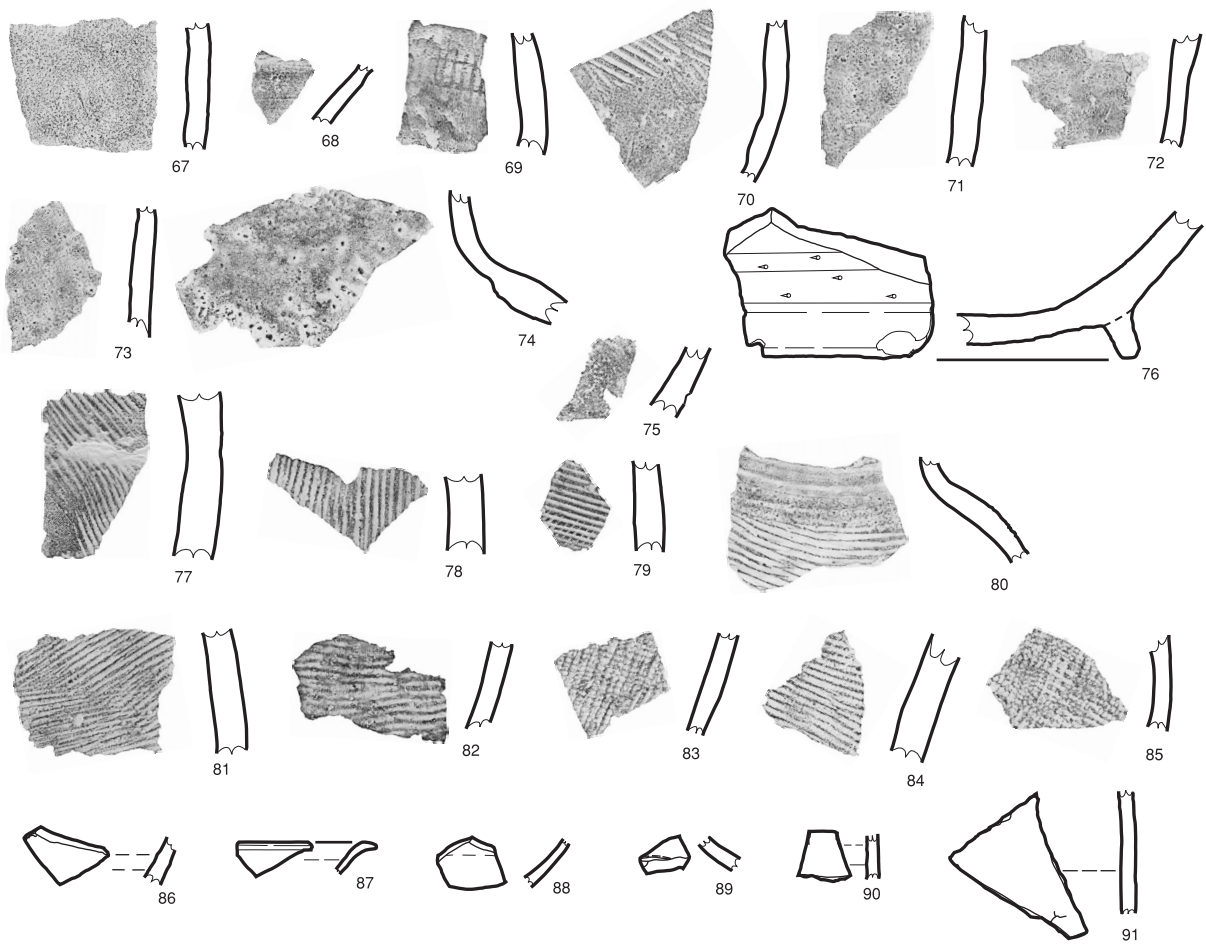


图16 72SD1出土土器類実測图 2



C トレンチ

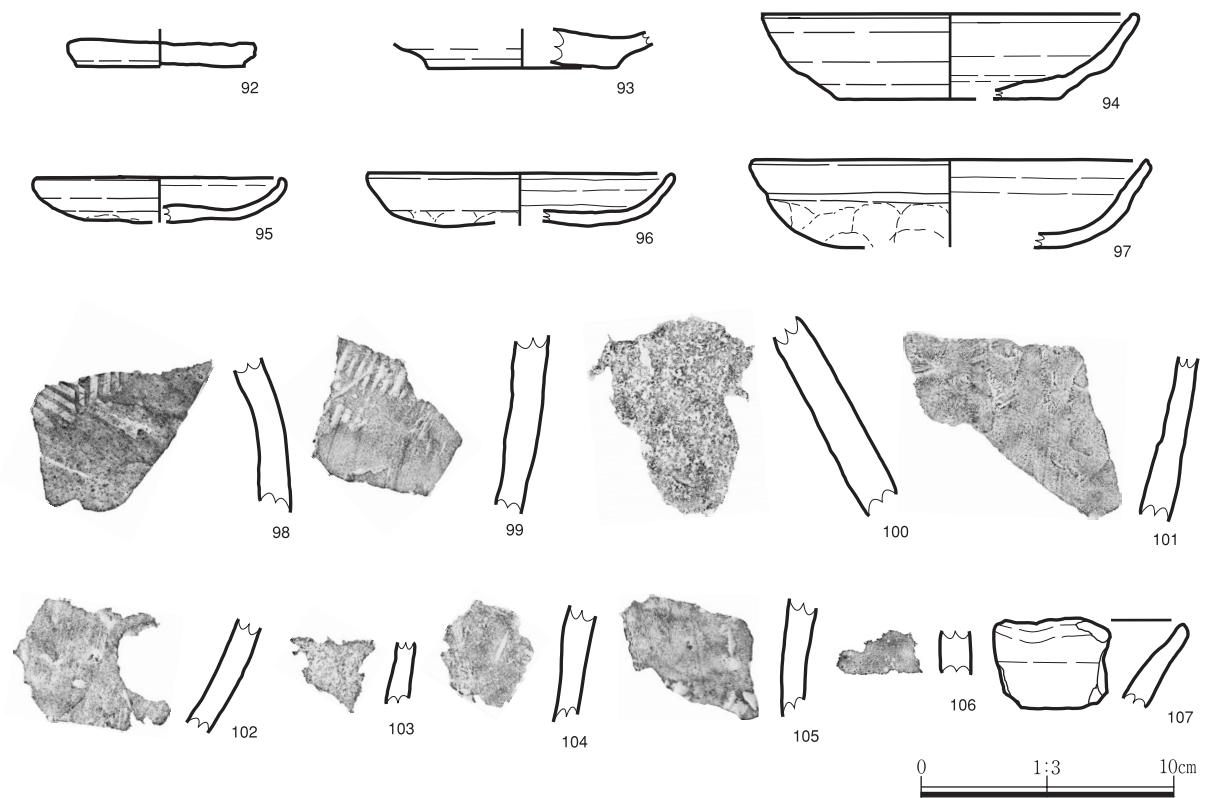


図17 72SD1出土土器類実測図 3

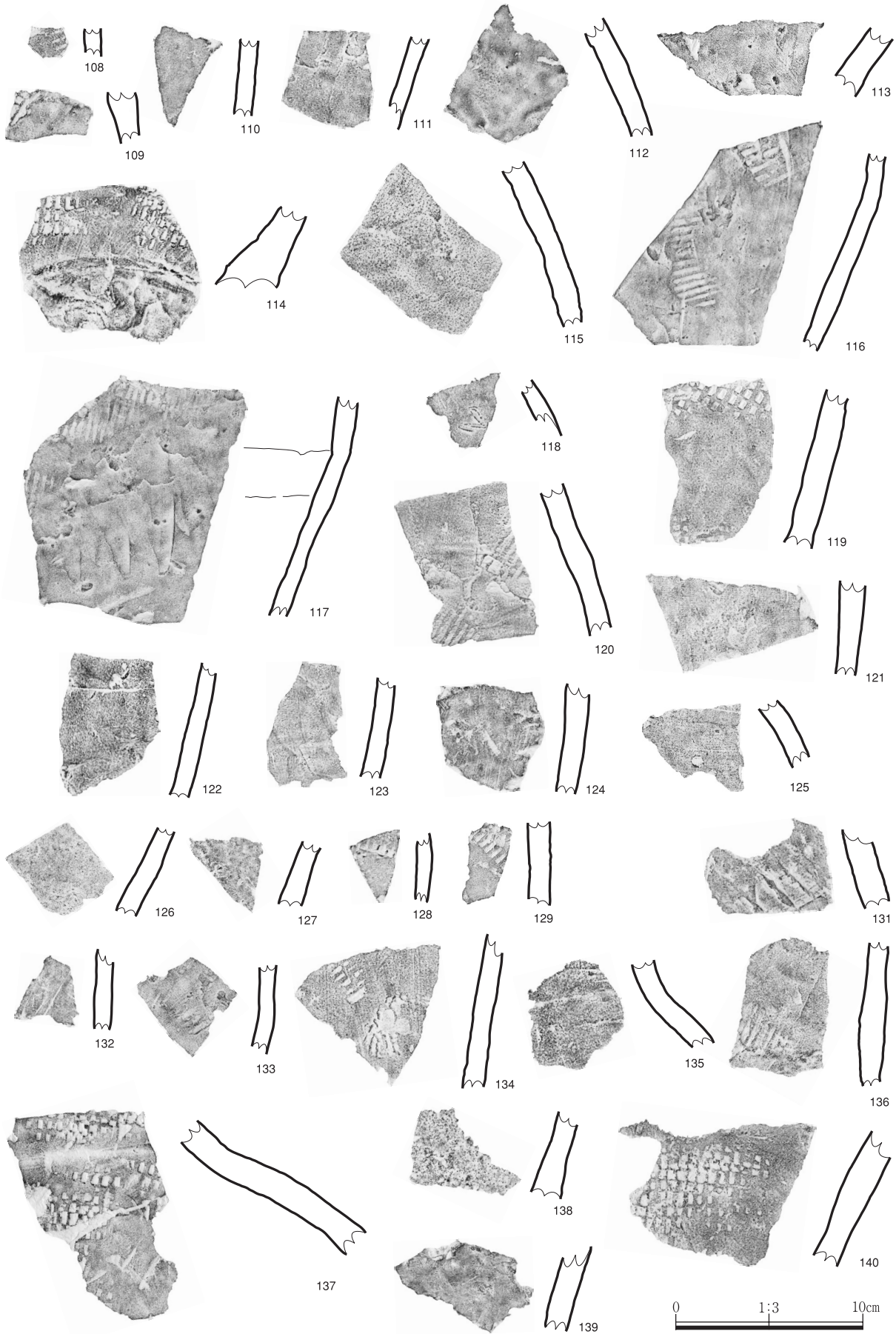


图18 72SD1出土土器類実測图 4

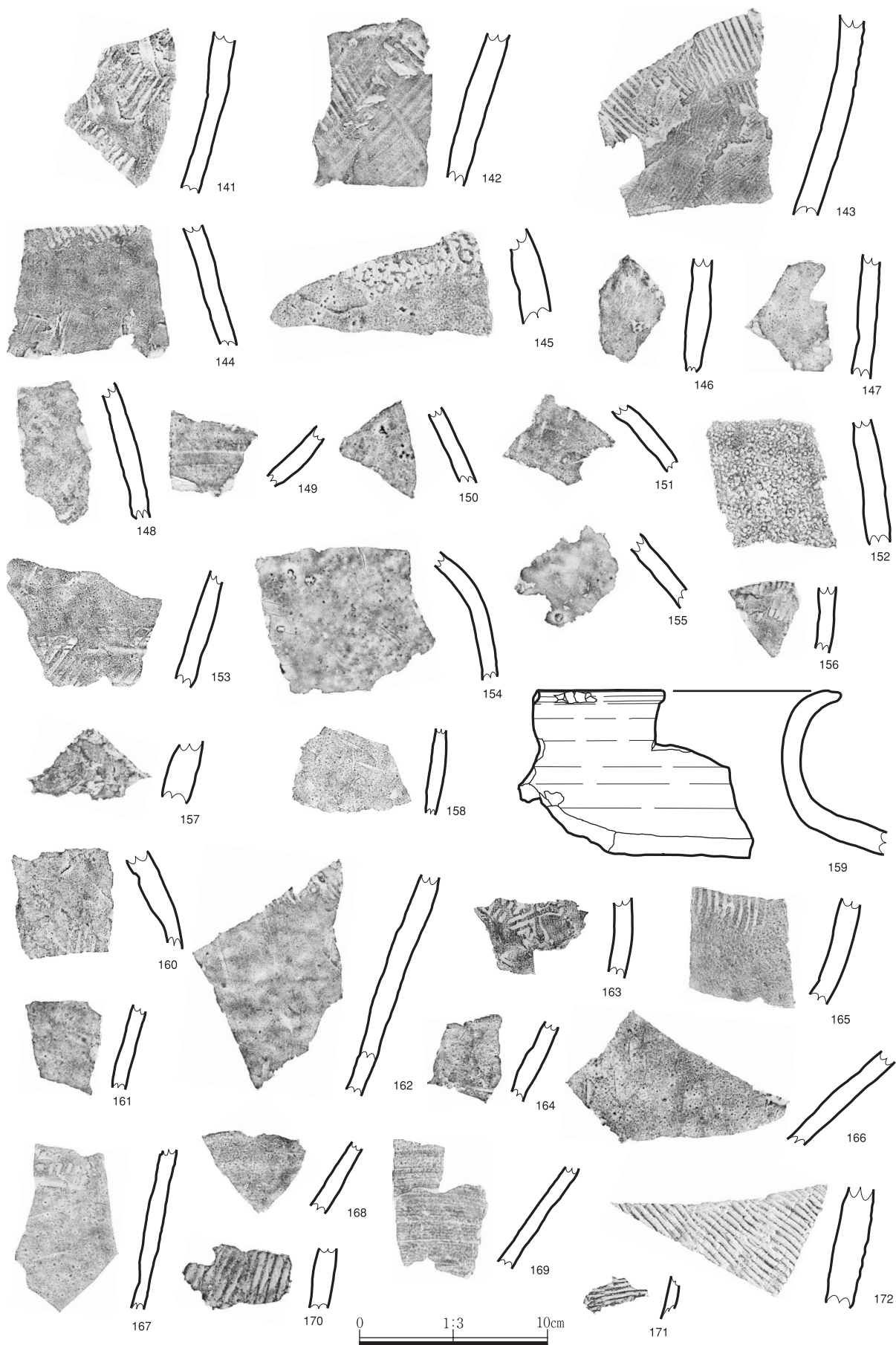


図19 72SD1出土土器類実測図 5

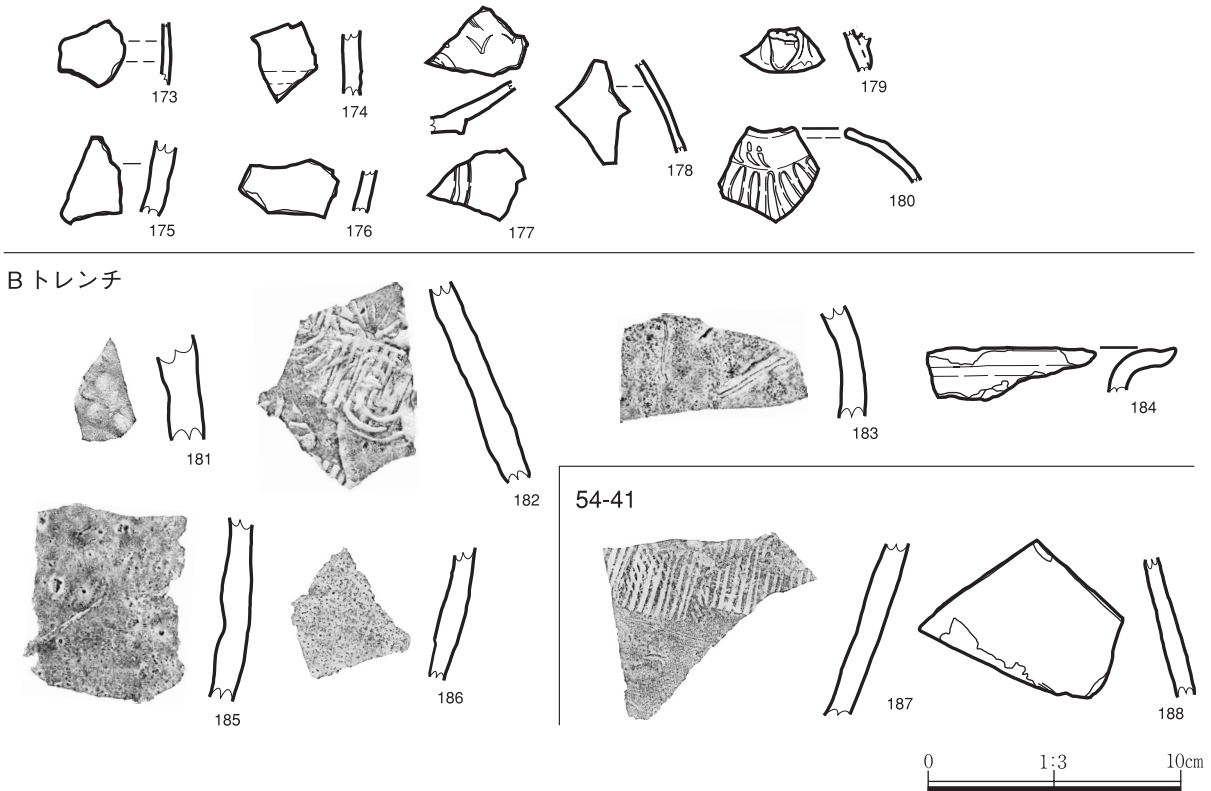


図20 72SD1出土土器類実測図6

積したことが想定できる。かわらけでは12世紀後半以降に多くみられる特徴をもつものが多く、12世紀後半代をさかのぼる資料はみられない。また、他の地点で確認されるような遺物が集中して確認できる層もみられず、堀の埋没の途中での大規模な改修など地業を想定できる痕跡は今回の調査範囲では確認できていない。

72SD2出土土器・陶磁器類

72SD2からはかわらけが23,572g、国産陶器が520.8g、輸入陶磁器が14.2g、その他木製品や壁土が出土している。かわらけは37点を図示した。なお、それぞれのトレンチから出土したかわらけは表5のとおりである。

Aトレンチ出土資料ではかわらけ18点、国産陶器類3点、輸入磁器1点を図示した。189～192はロクロかわらけの小皿、193～195はロクロかわらけの大皿である。口径はいずれも8cmを前後する値を示すが、底径が5cm以下で器高が2cmを超える192とその他の189～191でやや法量が異なり、全体の器形の違いが顕著である。また190は見込みが盛り上がることや、口縁部端部のつくりなど細部の器形の特徴には差異が目立つ。196～200は手づくねかわらけの小皿、202～206は手づくねかわらけの大皿である。196～198は器高が2cm弱のものだが、口径は大小にわかれる。199は器高が2cmを超え、口径は9cm前後である。203・204は口径が14cmを超えるやや大きい値を示すが、205は口径が13.0cmと小さい。201は内折れのかかわらけで口径等は不明である。206は14.7cmとやや大きい口径値を示す。内面全体に油煙痕が付着している。

出土層位をみると、いずれの層中からもロクロかわらけと手づくねかわらけの両者が確認でき、いずれかに偏る状況はみられない。このうち最下層付近から出土したものでは15層から出土した206が口径が大きい器形であることは注目できる。

表5 72SD2出土かわらけ重量表

Aトレンチ

層位	重量(g)	比率(%)
1層・検出面	5,680.5	35.1
2	502.8	3.1
6	341.7	2.1
8	3,312.2	20.5
9~12	3,536.0	21.9
15	2,707.2	16.7
16	99.9	0.6

Bトレンチ

層位	重量(g)	比率(%)
1	2,301.7	73.1
2	629.0	20.0
3	45.7	1.5
4	50.0	1.6
6~	120.8	3.8

Cトレンチ

層位	重量(g)	比率(%)
1	571.9	65.7
3	148.2	17.0
7	150.5	17.3

国産陶器では、207は渥美窯産の山茶碗で、底面直上から出土している。渥美4型式とみられ、12世紀中葉頃と考えられる。210は白磁碗で、断面には黒色の付着物が確認できる。直口縁で内外面ともに無文である。

Bトレンチ出土資料ではかわらけ6点、国産陶器1点を図示した。211・212はロクロかわらけの小皿、213~216はロクロかわらけの大皿である。211は最下層付近から出土した。底径が3.5cmと小さく口縁部が外反する器形で、器高は2.2cmとやや高い。ロクロ左回転である。213・214は器高が3.8cmと3.7cmとやや高いが、底径も比較的大きく器形全体では皿形を呈する。217は渥美窯産の壺の口縁部である。

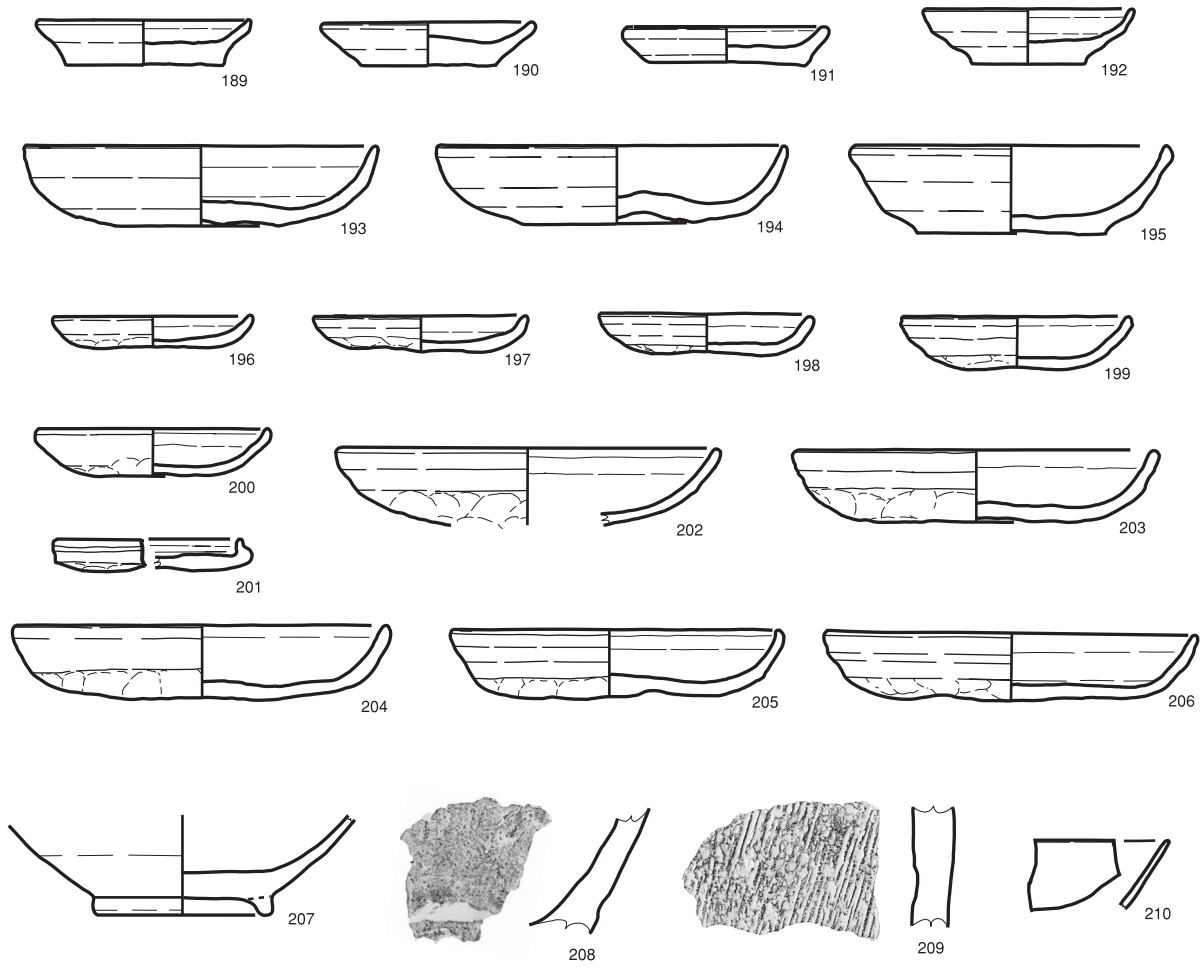
Cトレンチ出土資料ではかわらけ5点を図示した。218はロクロかわらけの小皿、219・220はロクロかわらけの大皿である。218は底径が3.5cm、器高が2.2cmで口縁が外反する器形である。ロクロ左回転である。220は器高が4.0cmとやや高く、底径が7.3cmと比較的小さい。221は手づくねかわらけの小皿、222は手づくねかわらけの大皿である。222は摩滅が著しいが、下層の7層からの出土で、口径が復元値で15.2cmと大きい。

トレンチ中以外では、Aトレンチ北側の54-58グリッドでは1層上面で完形のかかわらけがまとまって出土した(223~231)。いずれも手づくねかわらけの大皿で、口径は12.6~14.0cmで13.5cm前後のものが多く、器高は2.5~3.0cmである。226は内面に油煙痕とみられる付着物がある。これらは器形の特徴などにもまとまりがあり、一括性の高いものとみられるが、表土直下の検出面で確認しており、堀の堆積土の上面からの出土である。このほか、検出面で確認した国産陶器1点、輸入磁器1点を図示した。

72SD2出土資料は、埋土が人為堆積層で構成され、かわらけの出土量が多いが、国産陶器類、輸入陶磁器ともに少ない。陶磁器類の出土量の限定性は、この遺構の出土資料の特徴のひとつである。埋土の特徴からは、数度にわたって埋め戻した状況が想定でき、かわらけの特徴からもまとまりが少ない。いずれの層でもロクロかわらけと手づくねかわらけがともに含まれ、いずれかに偏る状況は確認できない。器形からは12世紀中葉以前の前半代に明確にさかのぼる特徴を示すものはみられず、12世紀後半の特徴をもつものが目立つ。また、最下層付近から出土した資料でもかわらけの特徴は同様であるが、手づくねかわらけの大皿では口径が大きいものが多い。また下層からは12世紀中葉を前後する時期とみられる、渥美窯産の山茶碗が出土している。これらの遺物の特徴からは、埋め戻しの当初の時期は12世紀後半代をややさかのぼる可能性もある。

1 北 区

A トレンチ



B トレンチ

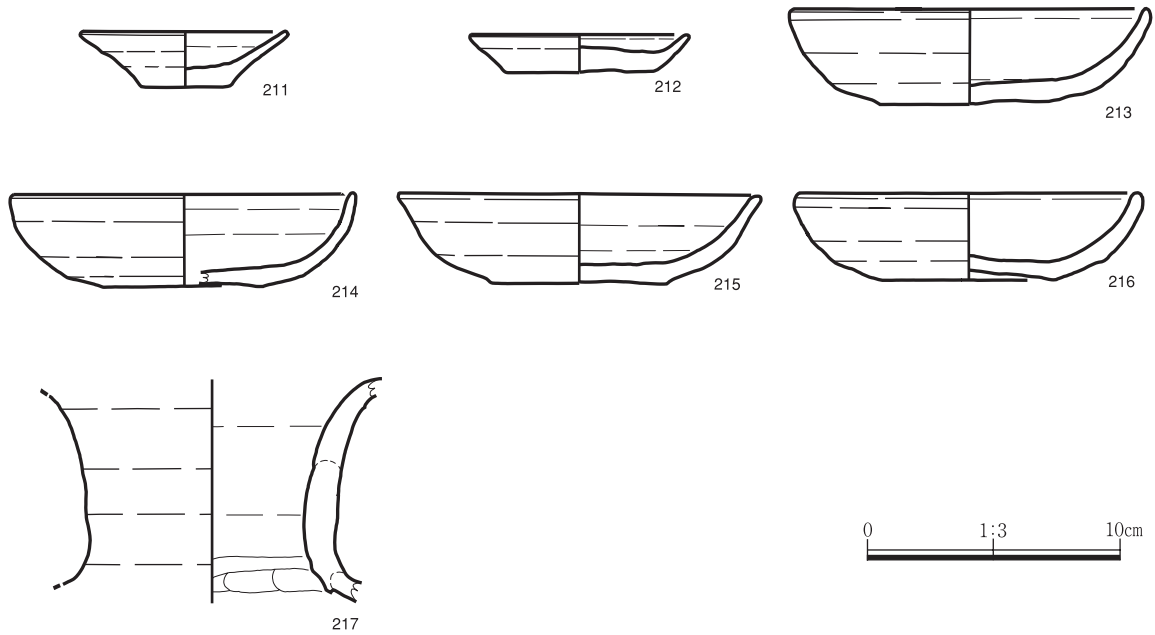
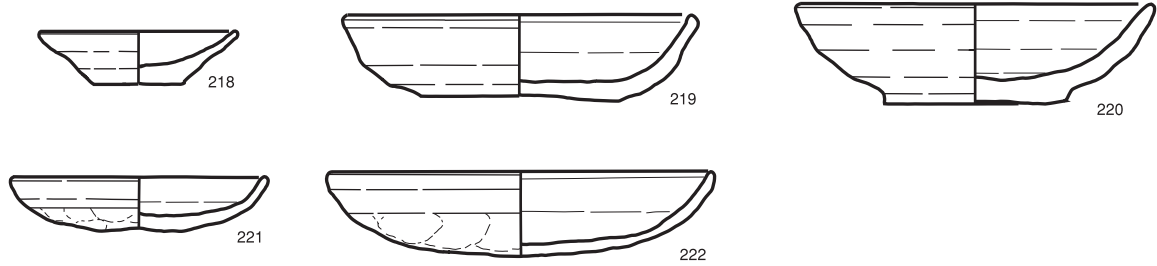
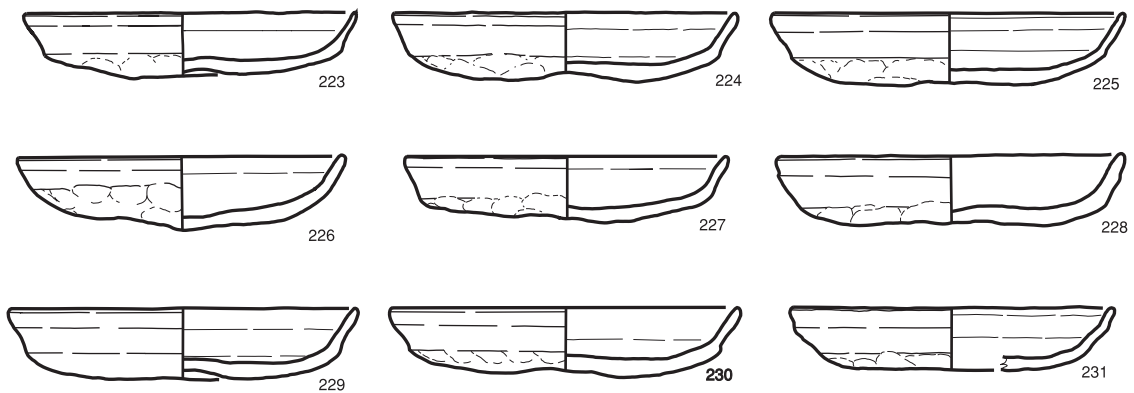


図21 72SD2出土土器類実測図 1

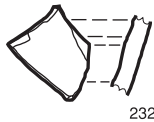
C トレンチ



54-38



54-39



53-40



図22 72SD2出土土器類実測図 2

その他の遺構出土土器・陶磁器類

かわらけ 1 点、国産陶器 13 点で 626.9 g、輸入陶磁器 1 点で 1.7 g を図示した。なお、遺構出土のかわらけは表 6 のとおりである。

遺構出土資料では、72SB1 を構成する柱穴からはかわらけが 499.3 g 出土し、国産陶器 2 点 (234・236)、輸入磁器 1 点 (235) を図示した。72SK3 からはかわらけ 311 g と国産陶器 76 g が出土しており、このうち国産陶器 4 点 (241～244) を図示した。いずれも甕類の体部破片で、器形の全体は不明である。241 は外面に格子文がみられる。72SD3 からはかわらけ 862.3 g と国産陶器 200.2 g が出土した。このうち、かわらけ 1 点 (245) と国産陶器 3 点 (246～248) を図示した。国産陶器は甕類の体部破片で、246 は渥美窯産で外面に縦長格子文がみられる。247 は常滑窯産で外面に縦長格子文がみられる。このほか、P47 から 237 が、柱穴から 238～240 が出土している。

遺構外の表土等からの出土資料では、国産陶器 28 点で 1,470.6 g、輸入陶磁器 7 点で 47.4 g がある。渥美窯産が 12 点、常滑窯産が 12 点、須恵器及び須恵器系が 4 点である。250・254・257～266 は渥美窯産である。いずれも破片で器形の全体がわかるものはないが、甕類の口縁部及び体部片である。249・252・255・267～275 は常滑窯産である。甕類の体部片が多く、破片で器形の全体は不明だが、252・275 は片口鉢の底部で外面にはケズリが行われる。273・274 は片口鉢の口縁部である。251・279～283・285 は輸入磁器で、白磁壺類が多い。このうち 284 と 285 は南区の表土から出土した。

1 北 区

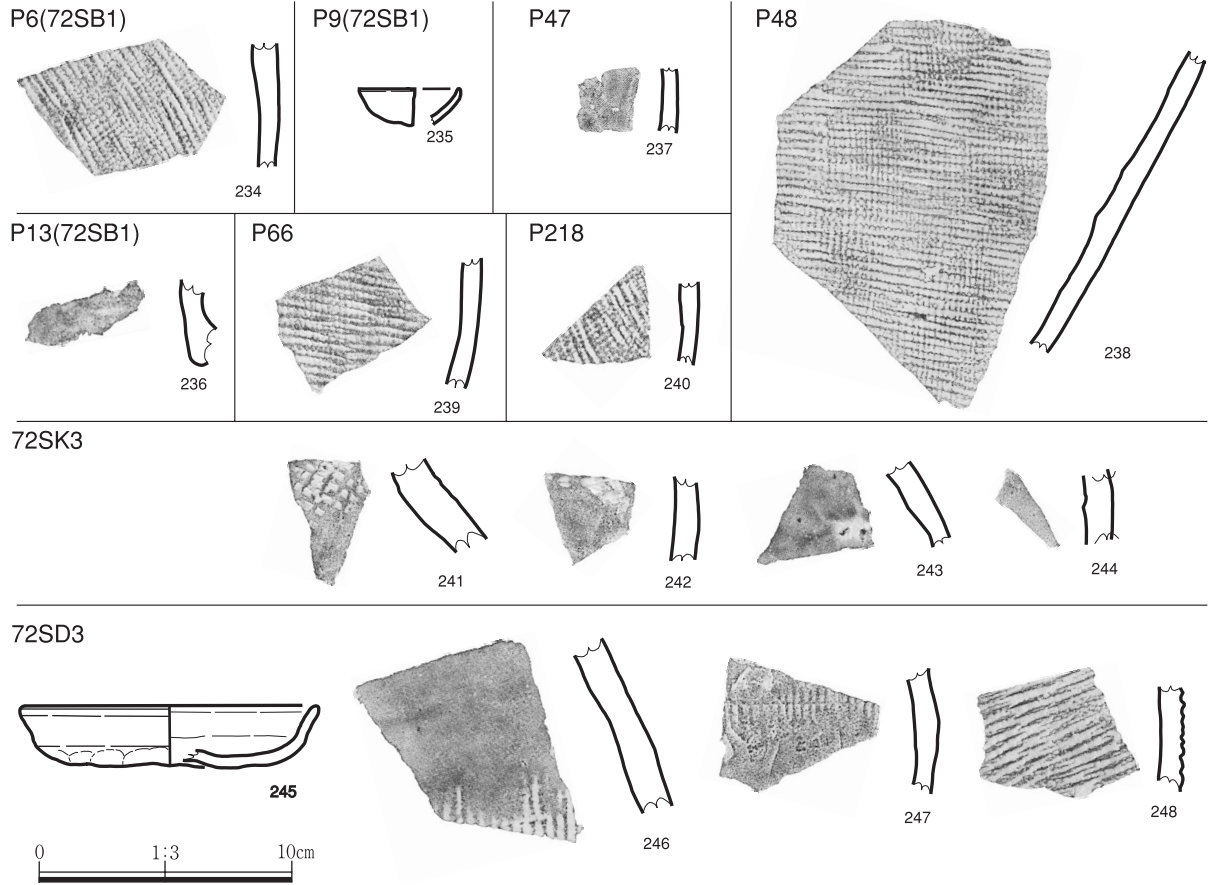


図23 遺構出土土器類実測図

表6 遺構出土土器類重量表

遺構名	かわらけ重量	国産陶器	輸入陶磁器	
72SD1	5,090.4	9,749.9	101.4	
72SD2	23,572.0	520.8	14.0	
72SB1	499.3	77.3(2)	1.7(1)	
	P1	22.1	—	—
	P2	19.2	—	—
	P3	110.0	—	—
	P4	23.9	—	—
	P5	8.1	—	—
	P6	114.7	50.8(1)	—
	P7	11.0	—	—
	P8	60.0	—	—
	P9	8.5	—	1.7(1)
	P10	61.7	—	—
	P11	25.8	—	—
	P12	8.3	—	—
	P13	19.2	26.5(1)	—
	P14	—	—	—
	P15	—	—	—
	P16	6.8	—	—
P17	—	—	—	
遺構名	かわらけ重量	国産陶器	輸入陶磁器	
72SA1	124.7	—	—	
	P19	—	—	
	P20	—	—	
	P21	24.2	—	—
	P22	—	—	—
	(P23)	—	—	—
	P24	100.5	—	—
	P25	—	—	—
	(P26)	—	—	—
	P34	—	—	—
72SA2	67.1	—	—	
	P18	13.4	—	—
	P27	9.5	—	—
	P28	24.1	—	—
	P29	6.5	—	—
	P30	—	—	—
	P31	4.3	—	—
P32	9.3	—	—	
72SK3	316.0	76.1(4)	—	
72SD3	862.3	200.2	—	
72SX1	113.3	—	—	
P47	409.3	7.3(1)	—	

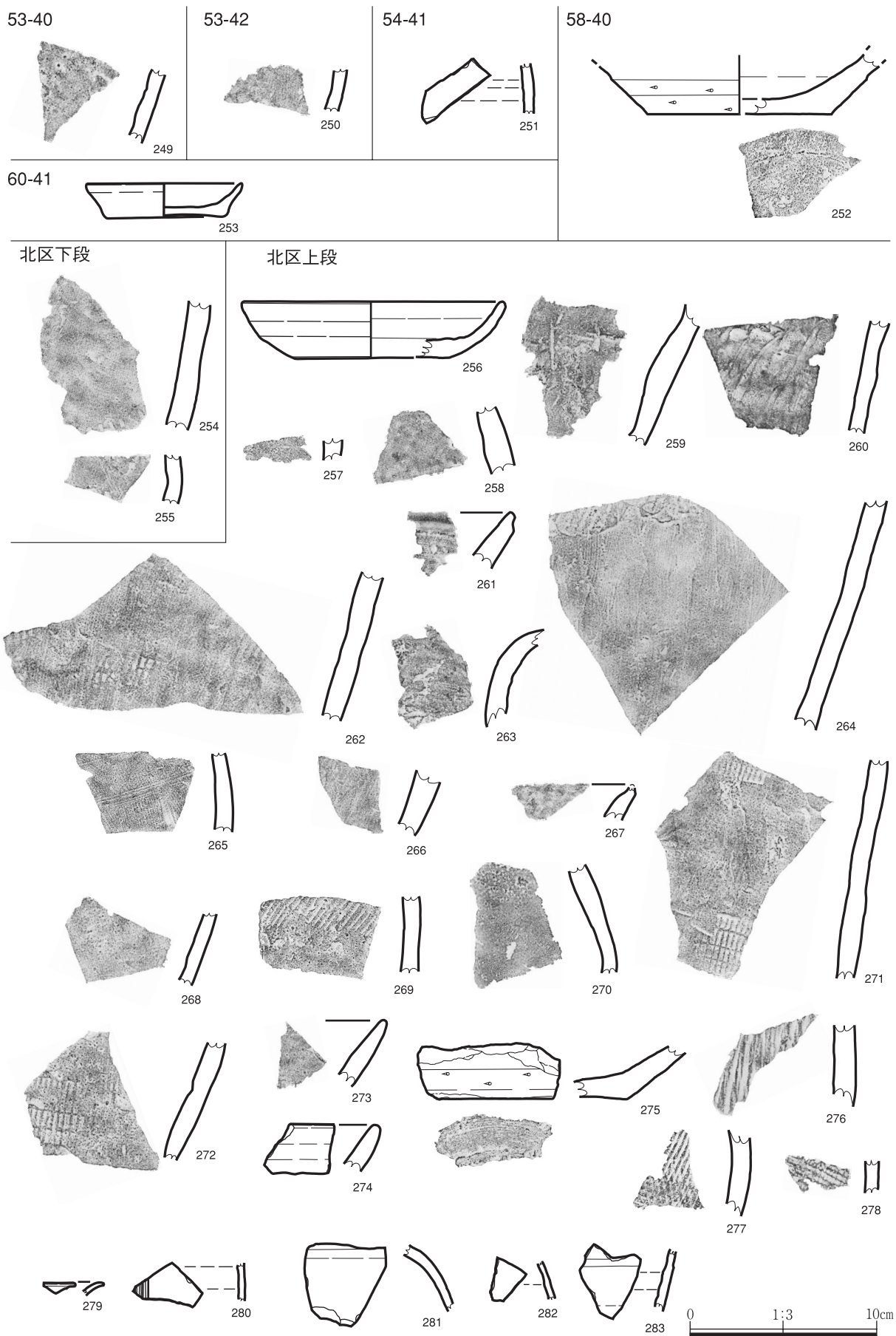


図24 北区遺構外出土土器類実測図

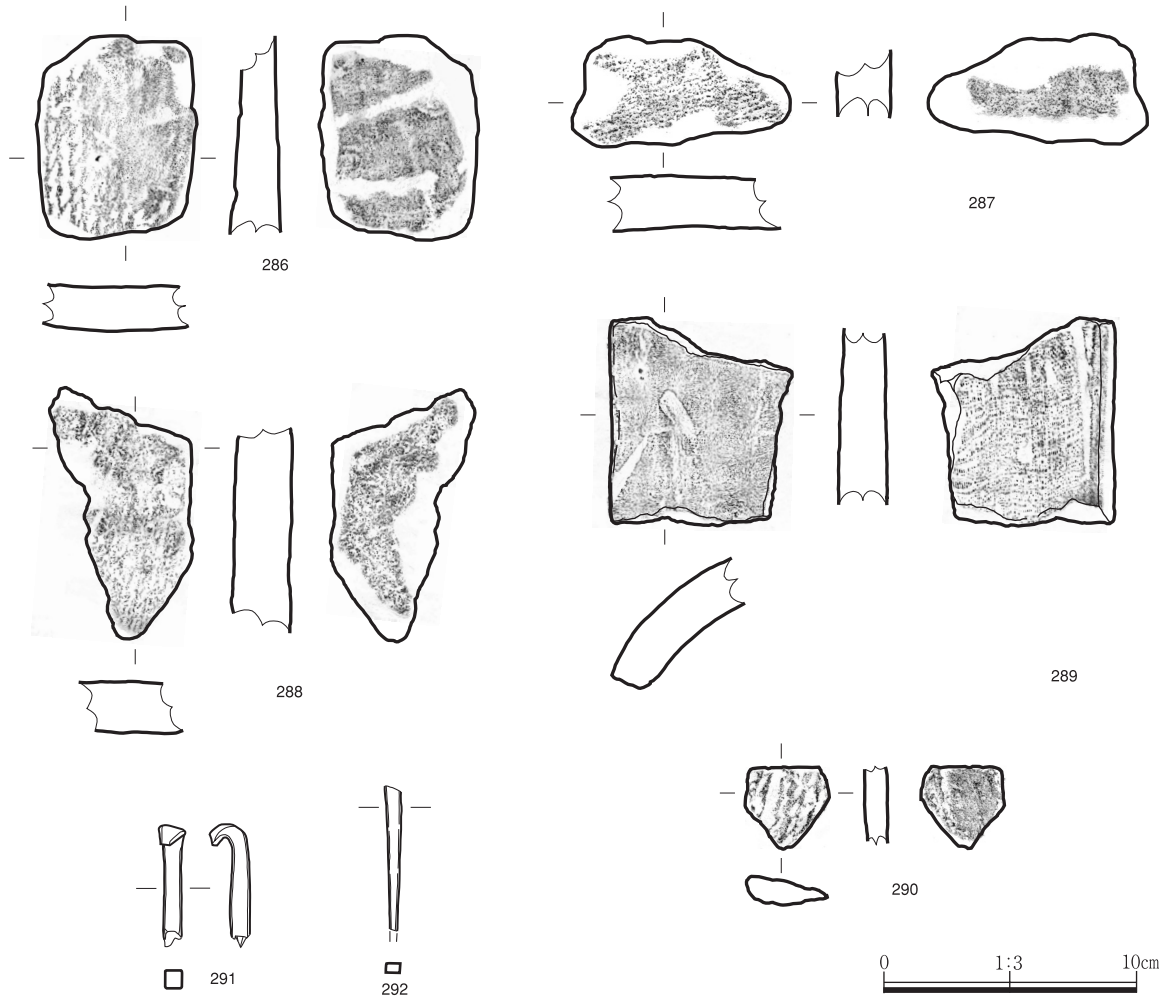


図25 北区出土瓦・鉄製品実測図

【瓦】

8点出土し、うち5点を図示した。いずれも小破片で器形の全形がわかるものはない。また、軒瓦も含まれていない。286～288は平瓦でいずれも摩滅が著しく残りの悪いものも多いが、凹面は布目痕、凸面は縄目タタキが残る。289は丸瓦で焼成が堅緻で、凹面は布目痕、凸面は痕跡がナデ消されている。端部は片面のみケズリ調整が行われる。290は瓦片で凹面は布目痕、凸面は縄タタキ目が残る。

(櫻井)

【木製品】

ほとんどが72SD2のAトレンチからの出土である。杭・折敷・籌木・下駄・部材・漆塗製品（椀・蓋？）・その他が出土している。69点登録し、46点を掲載した。

杭（293・296・301・308） 293・301は両端部を欠損しているが、下端部が若干削られて細くなっていることから杭と判断した。296は先端部付近の欠損品である。面取り加工の途中であったと考えられる。308は先端部のみ残存している。全体に被熱により炭化しており、ひび割れが著しい。

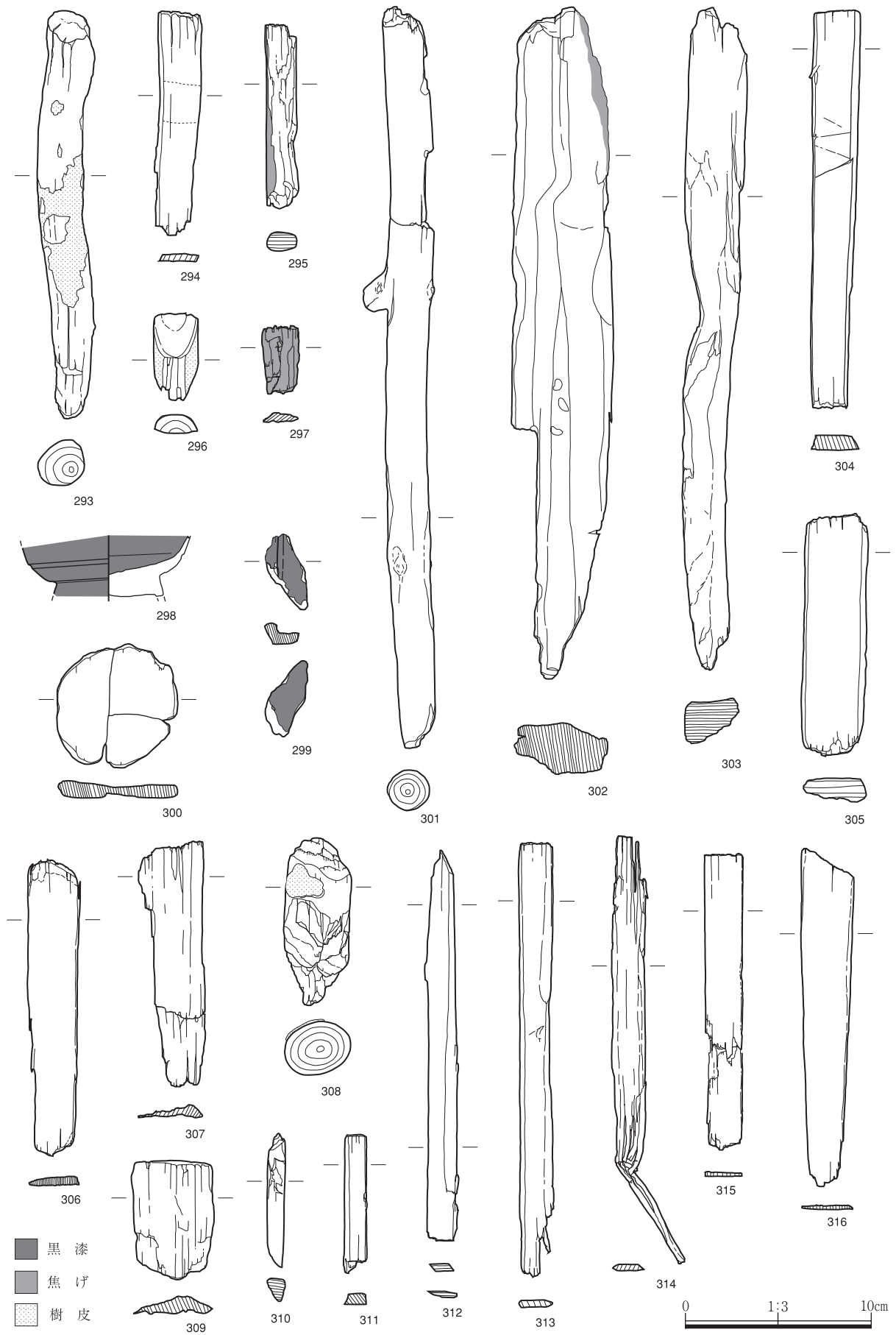


図26 北区出土木製品実測図1

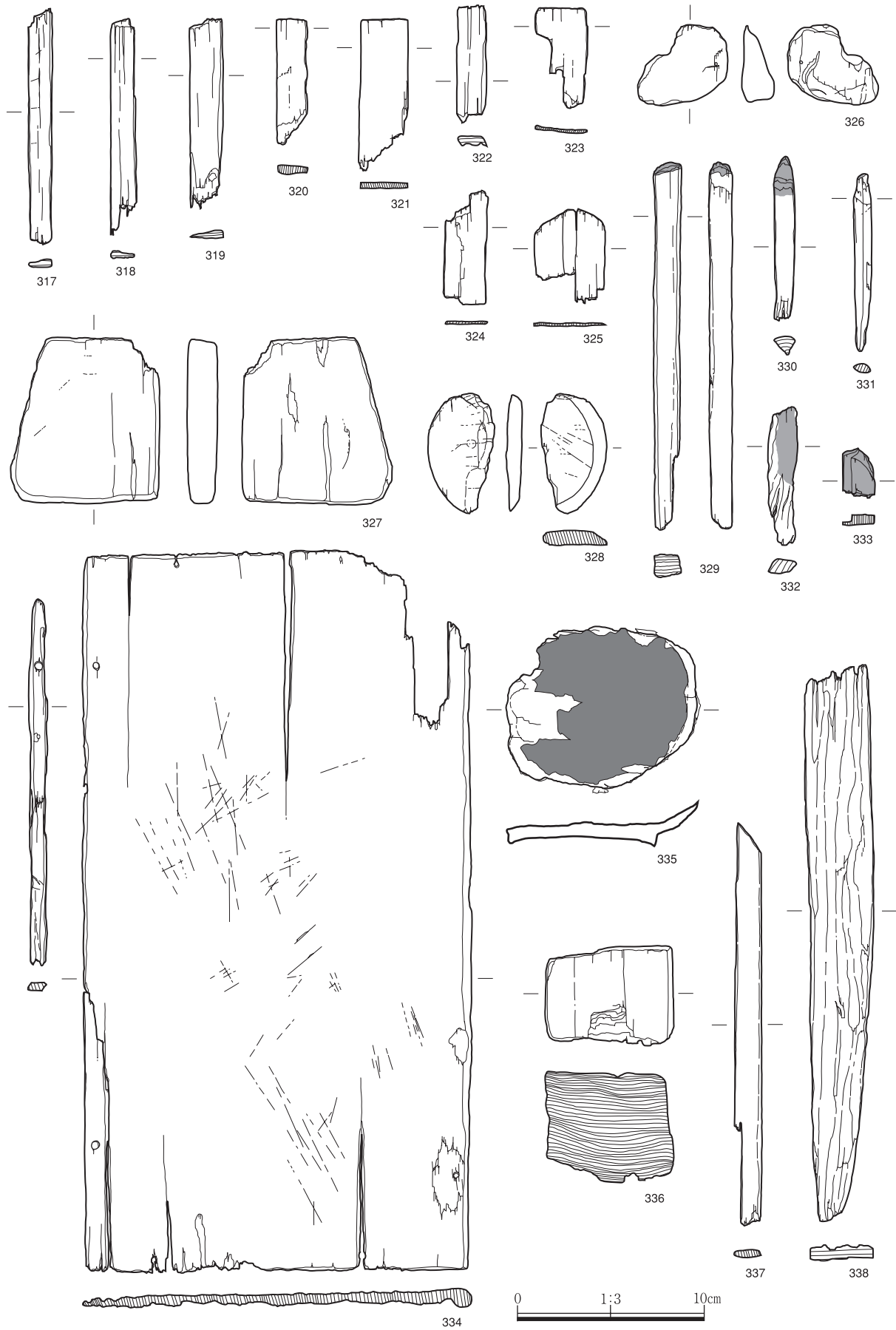


图27 北区出土木製品実測图 2

下駄 (327) 差歯式下駄の歯である。平面形は逆台形である。

折敷 (294・306・313・316・321・322・323・334) 薄い板状で残存幅が2.0cm以上のものを一括した。334はほぼ完形品である。接合はしていないが棧も同時に出土している。本体と棧を接合する為の柄孔も各辺で確認できる。器表面は腐朽しているが、微かに刃物痕が確認できる。その他は小破片で全形がわかるものは無い。

籌木 (311・312・314・315・317・318・319・320・324・325・337) 残存幅が2.0cm以下の薄い板状の製品を一括した。いずれも折敷からの転用品と考えられる。70次調査報告の際に行った分類に従うと、A類 (一方の端部に面取り加工を施す=312・337) とC類 (端部に面取り加工を施さない) が確認できる。

部材 (302・303・304・305・307・336・338) 今回は棒状・板状のもので折敷・籌木よりも大きいものを部材とした。302・303のような大型の角材から310・311のような小型のものまで様々である。

漆椀 (298・300・335) いずれも欠損が著しく全形がわかるものは無い。298は口縁部と高台部を欠損している。体部外面に沈線が1条施される。335は底部周辺の破片であるが、腐朽が著しく漆膜が剥離しそうである。300は底部付近の破片である。図示した破片に漆膜は無いが、接合しない同一個体と思われる破片に黒漆が付着していることから漆椀とした。

蓋? (299) 椀と異なり方形になるものと考えられる。両面に黒漆が施される。

その他 (295・297・309・310・322・326・328・329・330・331・333) 328は紡輪の可能性もあるが、中央部が欠損しており穿孔が確認できないことから今回は円盤状製品とした。その他は形状・用途は不明であるが、加工痕跡が認められるものである。部材や折敷等の破片の可能性はあるが、小片の為詳細は不明である。297・329・331・332・333・336は炭化した部材等である。先端や側面が炭化したもの、全面が炭化したものなど様々である。

【金属製品】

堀・柱穴等から出土している。いずれも小破片であり、全形がわかるものは無い。鏃・釘・その他不明の製品と鉄滓がある。20点登録しており、5点を掲載した。291・292は釘である。RM13は板状の鉄製品である。鉄滓は総量で641g出土している。RM2は約1/4残存の椀形滓、その他不掲載のものは流状滓であり、いずれも磁着はしない。

【土製品】

羽口・壁土が出土しているが、いずれも小破片であるため今回は一部の写真掲載のみとした。羽口は72SD1と72SX1から出土しており、2点を掲載した (RP3・4)。壁土は総量で72.5g出土している。堀や柱穴の堆積土から出土しているが、大型の破片は無くかわらけの細片と判別が困難なものが多い。
(村田)

2 南 区

堀内部地区の東側、現在の史跡公園内に設定した調査区である (図28)。68次調査で調査した低地

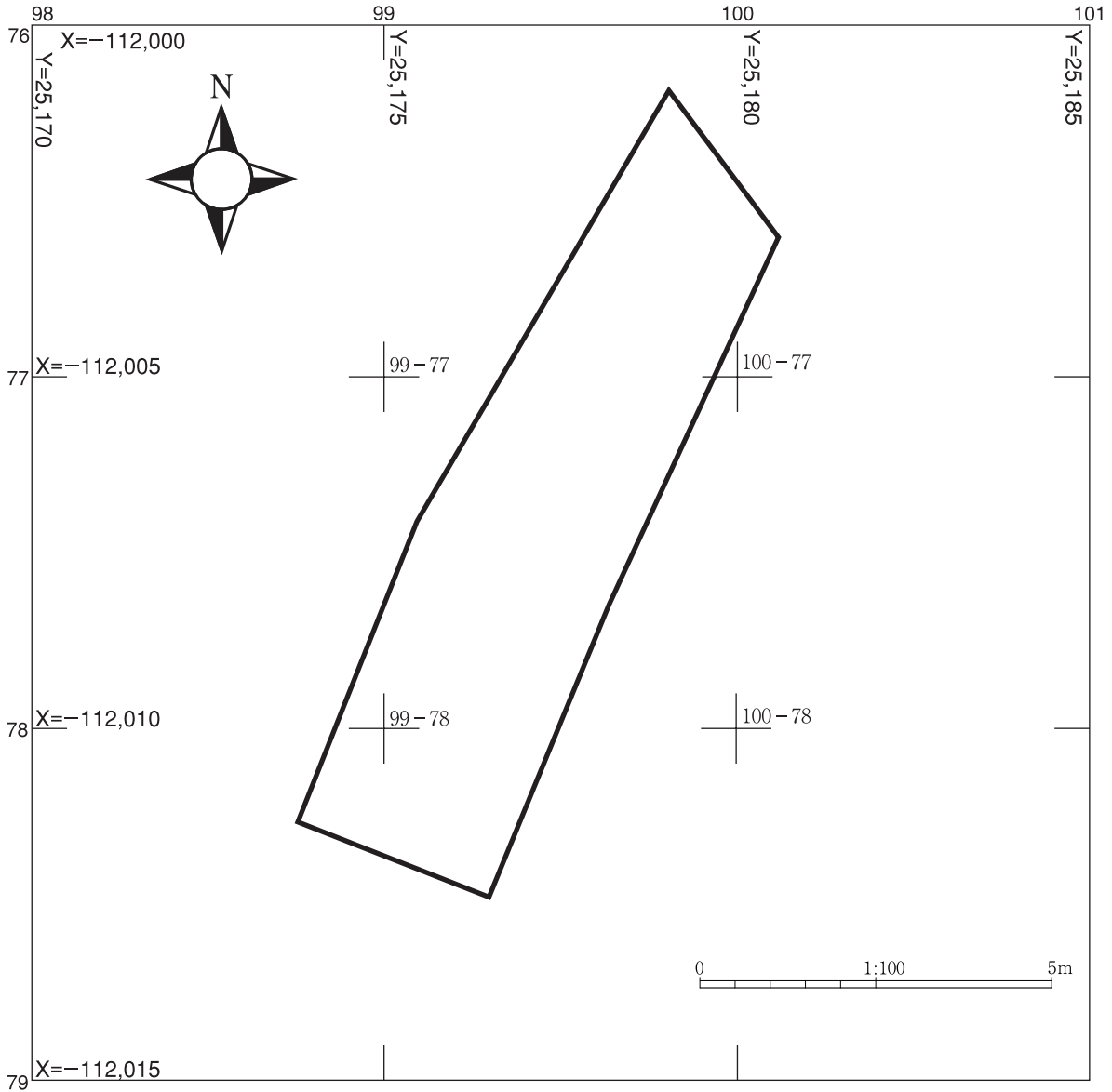


図28 南区平面図

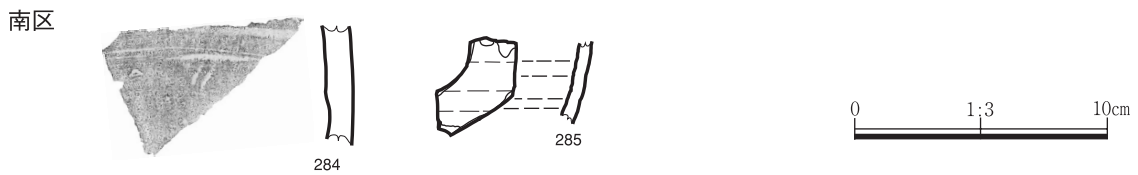


図29 南区出土土器類実測図

の東側、99-76グリッド付近に位置している。低地の状況を確認する為に設定した調査区であり、面積は約35㎡である。調査の結果、表土直下20～50cmの地点で黄褐色の地山面となることから、調査以前に削平されていることが確認された。この面からは遺構は検出されず、遺物も表土層から近世陶磁器を含む数点が出土したのみであった。西側に位置する68次調査区の低地部分では12世紀代の整地層や自然堆積層が確認されているが、今回の調査区についてはそのような状況を確認することは出来ず、明確な時期は不明ながら後世に削平されていたことが確認されたのみであった。

(村田)

Ⅲ 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平成22年度に行われた柳之御所遺跡第72次発掘調査では、2条の堀跡と1棟の掘立柱建物及び多数の柱穴などが検出されている。発掘調査所見によれば、2条の堀跡は規模や埋まり方などに違いが多く認められており、その新旧関係やこれまでの調査で確認されている堀跡との関係などが検討課題とされている。

今回の分析調査では、2条の堀跡からそれぞれ出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行うことにより、各遺構に係わる年代資料を作成する。また、多数検出された柱穴の中でも組み合う柱穴が確認できない単独の柱穴についても、その底面より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、柱穴に係わる年代資料とする。

さらに、外側の堀とされた遺構の底面直下の地山で確認された火山灰（テフラ）層の可能性があるとして指摘された堆積物を対象とし、その碎屑物の特性を明らかにして、テフラであるか否かを確認し、テフラである場合には、既知のテフラとの対比を行い、遺跡の立地する地形の形成年代に係わる基礎資料とする。

(1) 放射性炭素年代測定

1 試料

試料は、第72次発掘調査区で検出された堀跡埋土の下層から採取された微細な炭化物片2点と、柱穴埋土の下層から採取された微細な炭化物片1点の計3点である。

堀跡は、内側の堀跡とされる72SD1と外側の堀跡とされる72SD2とが検出されており、前者から採取された炭化物片には761、後者には797という試料番号が付されている。発掘調査所見によれば、調査区内で2つの堀跡間の切り合い関係は認められていない。また、72SD1の埋土は自然堆積層が多いとされ、72SD2の埋土は人為による堆積層が多いとされているが、底面直上の埋土は自然堆積と考えられている。

柱穴P47は調査区中央で検出された柱穴であり、発掘調査所見では建物跡や柱列のような配列が認められないことから単独の柱穴と考えられている。この試料には、798の試料番号が付されている。

2 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma ; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730±40年) を較正することである。暦年較正は、CALIB REV6.0.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

3 結果および考察

同位体効果による補正を行った測定結果を表7に示す。72SD1から出土した炭化物片761は880±20BPであり、72SD2から出土した炭化物片797はそれより若干古い1,050±30BPを示す。柱穴のP47から出土した炭化物片798は、上記2点の間に入る970±20BPであった。

各試料の較正暦年代を表8に示す。測定誤差を σ の年代で見ると、72SD1から出土した炭化物片761は11世紀後半から13世紀初め頃、72SD2から出土した炭化物片797は10世紀終わり頃から11世紀初め頃に相当する。またP47出土の炭化物片798は、11世紀前半から12世紀中頃までの年代となる。

72SD1の炭化物より得られた年代はほぼ12世紀に相当することから、内側の堀 (72SD1) は柳之御所に付随する遺構である可能性がある。一方、外側の堀とされた72SD2の炭化物より得られた年代は、内側の堀 (72SD1) の炭化物より100年ほど古く、先行して開削された可能性もある。ただし、現状では出土した炭化物の形成時期と堀跡の機能時期の関係については、遺構覆土の埋積過程の検討や出土遺物の考古学的分析結果を含め、検証されることが望まれる。

一方、柱穴P47の炭化物より得られた年代は11世紀～12世紀に相当し、内側の堀 (72SD1) で得ら

表7 放射性炭素年代測定結果

試料番号	種類	遺構名	地点名	層位など	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
761	炭化物	72SD1 (内側の堀跡)	Cトレンチ	29層直下	880±20	-28.01±0.55	930±20	IAAA-102513
797	炭化物	72SD2 (外側の堀跡)	Aトレンチ	最下層	1,050±30	-27.52±0.50	1,090±20	IAAA-102514
798	炭化物	P47 (柱穴)		底面付近	970±20	-24.74±0.58	960±20	IAAA-102515

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表8 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
		σ	2σ			
761	882 ± 24	σ	cal AD 1,058 – cal AD 1,072	cal BP 892 – 878	0.126	IAAA-102513
			cal AD 1,155 – cal AD 1,211	cal BP 795 – 739	0.847	
		2σ	cal AD 1,045 – cal AD 1,093	cal BP 905 – 857	0.249	
			cal AD 1,120 – cal AD 1,141	cal BP 830 – 809	0.076	
767	1,046 ± 25	σ	cal AD 987 – cal AD 1,018	cal BP 963 – 932	1.000	IAAA-102514
			cal AD 900 – cal AD 917	cal BP 1,050 – 1,033	0.063	
		2σ	cal AD 966 – cal AD 1,026	cal BP 984 – 924	0.937	
798	968 ± 24	σ	cal AD 1,023 – cal AD 1,046	cal BP 927 – 904	0.451	IAAA-102515
			cal AD 1,092 – cal AD 1,120	cal BP 858 – 830	0.438	
		2σ	cal AD 1,140 – cal AD 1,148	cal BP 810 – 802	0.111	
			cal AD 1,018 – cal AD 1,057	cal BP 932 – 893	0.394	
		cal AD 1,076 – cal AD 1,154	cal BP 874 – 796	0.606		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

れた年代幅に輻輳する部分が見られる。この炭化物が火熱を受けた結果形成されたものであれば、この溝跡と並存した時期があった可能性があるが、現状ではその由来が不明であるため、詳細は不明である。堀跡同様に、覆土の埋積過程や周辺遺物の出土状況を含めた慎重な評価が望まれる。

(2) テフラの分析

1 試料

試料は、外側の堀 (72SD2) 底面の下位に認められた、地山面を構成する堆積層より採取された堆積物1点である。本試料は黄褐色を呈するシルト質砂であり、発掘調査所見より火山灰層の可能性があるとされている。

2 分析方法

ここでは、テフラを構成する本質物質であるスコリア、火山ガラス、軽石の産状とその特徴を定性的に捉えるテフラの検出・同定分析と検出が予想される火山ガラスについて、その形態組成を定量的に示す火山ガラス比分析を行う。さらに、火山ガラスについては、テフラの同定精度を高めるために屈折率の測定を行う。各分析の処理過程を以下に示す。

1) テフラの検出・同定

試料約10gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを通し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。それらのうち、火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

2) 火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径

1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述したテフラの検出・同定と同様である。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

3) 屈折率測定

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

3 結 果

テフラの検出・同定分析結果を、表9に示す。中量の軽石と少量の火山ガラスが認められ、スコリアは認められなかった。軽石は最大径約1mmであるが、径0.5mm前後で非常に淘汰の良好な状態で、白色を呈す。

表9 テフラ分析結果

試料番号	遺構名	地点名	層位	スコリア	火山ガラス		軽石		
				量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
797	72SD2	Aトレンチ	底面下位	—	++	cl・pm	+++	W・sg (opx・ho)	1.0

凡例 一:含まれない。(+):きわめて微量。+:微量。++:少量。+++ :中量。++++:多量。
 B:黒色。G:灰色。Br:褐色。GB:灰黒色。GBr:灰褐色。R:赤色。W:白色。
 g:良好。sg:やや良好。sb:やや不良。b:不良。opx:斜方輝石斑晶包有。ho:角閃石斑晶包有。
 cl:無色透明。br:褐色。bw:バブル型。md:中間型。pm:軽石型。最大粒径はmm。

発泡はやや良好である。斜方輝石の斑晶を包有する軽石と角閃石の斑晶を包有する軽石とが認められた。火山ガラスは、無色透明の塊状軽石型のみである。

火山ガラス比分析結果を、表10、図30に示す。細砂分中の約40%は軽石型火山ガラスであり、他の形態の火山ガラスは認められない。

火山ガラスの屈折率測定結果を、図31に示す。レンジはn1.509-1.511であるが、n1.510に集中する傾向を示す。

表10 火山ガラス比分析結果

試料番号	遺構名	地点名	層位	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
797	72SD2	Aトレンチ	底面下位	0	0	95	155	250

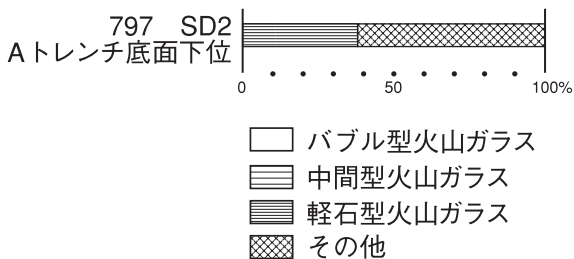
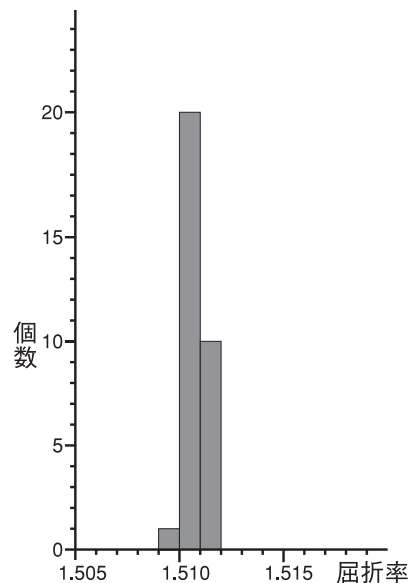


図30 火山ガラス比



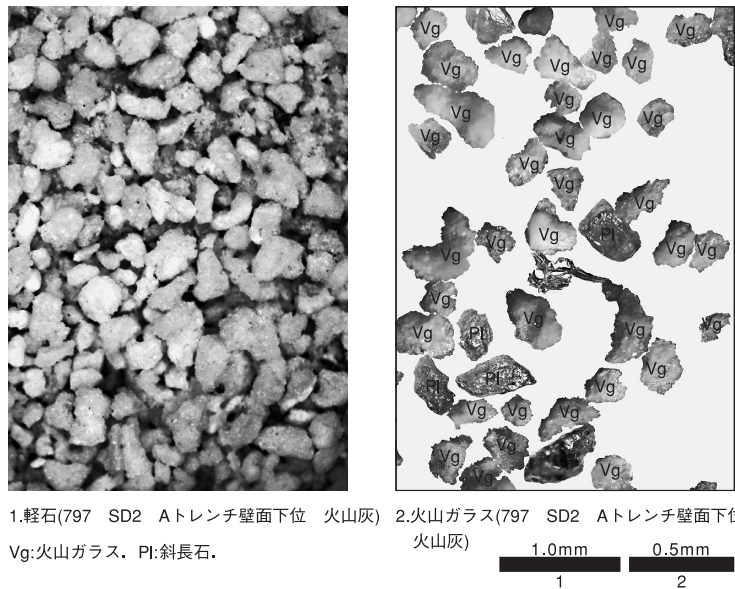
797 SD2 A トレンチ 底面下位
 図31 火山ガラスの屈折率

4 考 察

分析の結果、軽石が中量程度検出されたことから、本試料は軽石質テフラの降下堆積物である可能性が高い。処理前の状態では、シルト分を比較的多く含むことが観察されたことから、降下堆積後に土壌化作用による攪乱を若干受けて土壌中に残存している状態であると考えられる。本遺跡の地理的位置と周辺地形、およびこれまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、検出されたテフラは、比較的広域に分布が認められている十和田カルデラを給源とする後期更新世以降のテフラに対比される可能性が高い。さらに、今回検出された軽石には、角閃石の斑晶を包有する軽石も認められたことから、本試料は十和田八戸テフラ(To-H:Hayakawa,1985)に対比されると考えられる。To-Hは1.5万年前に噴出したとされ、その降下堆積物は東北北部に広範に認められ、さらに火砕流堆積物も十和田湖周辺域だけではなく、秋田県北部および岩手県北部まで分布が認められている(町田・新井,2003)。

なお、本試料で得られた軽石型火山ガラスの屈折率は、町田・新井(2003)などに掲載されているTo-Hの値(n1.505-1.509)に比べるとやや高い値といえるが、火山ガラスの水和(風化により火山ガラス中に水分が取り込まれる現象)による変化(中村ほか,2002)などによる変質が示唆される。

なお、地山を構成する堆積物中にTo-Hが狭在していることから、本遺跡が立地する低地は沖積低地ではなく、1.5万年前より以前に離水した低位の段丘であることが推定される。今後、柳之御所の地形的環境を考える上でも、基盤となっている堆積層の層序対比を複数地点で検討することにより、地形条件を考慮した当時の土地利用状況等を明らかにすることができるものと期待される。



1.軽石(797 SD2 Aトレンチ壁面下位 火山灰) 2.火山ガラス(797 SD2 Aトレンチ壁面下位 火山灰)
Vg:火山ガラス, Pl:斜長石。

図32 軽石・火山ガラス

引用文献

Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyachi, T.・Soda, T.・Yamagata, K., 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21, 223-250.

古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.

Hayakawa, Y., 1985, Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo, vol. 60, 507-592.

町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.

町田 洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.

町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ— 渡辺直経(編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 同朋舎, 865-928.

中村有吾・片山美紀・平川一臣, 2002, 水和の影響を除去した北海道の完新世テフラガラス屈折率. 第四紀研究, 41, 11-22.

IV 総 括

今年度の調査成果についてまとめ、今後の調査の課題を述べる。

1 堀跡の調査成果

72SD1、72SD2はこれまで柳之御所遺跡で確認されている2条の堀跡と連続すると考えられる遺構である。これまで堀跡の調査では各地点で平行する2条の堀跡が確認されている(表11)。これらは地点も離れており全てが一連の地業によるものかなどの課題は残されているが、堆積層の様相の共通性などから、これまで調査された多くの地点で同一の遺構が連続すると考えられ、柳之御所遺跡全体を堀が区画していることがわかる。そのうち今回の調査で確認した部分は最も北側に位置し、これより北の部分は既に北上川の旧河道によって削られてしまい残存しない。このため、今回の調査範囲ではやや緩やかに東へと弧を描いていることがわかるが、柳之御所遺跡堀内部が機能した時点でどのような平面形状だったかは確定できない。

表11 柳之御所遺跡調査での堀跡の対応

	内側の堀跡	外側の堀跡	備 考
今次の調査	72SD1	72SD2	
21次調査	21SD1	21SD2	21SX4を介して新旧(外→内)。
38次調査	38SD5	38SD3	埋土や遺物の様相の違いを指摘。
56次調査	56SD38	56SD39	
41次調査	41SD2	—	

今回確認した堀跡について、それぞれの特徴をまとめると、72SD1は幅が11～12m、深さが約4mで底面がV字形に掘り込まれている。堆積土は自然堆積によるもので、今回の調査範囲では作り替えの痕跡は確認できない。堆積の状況からは、急速な堆積によるものとはみられない。また上層は近代以降の盛土が厚く堆積して整地されており、堆積状況から近世段階まで完全には埋没していないと考えられる。

72SD2は、西から東へと下る旧地形のありかたから72SD1と比べて削平をより受けているため残存状況が悪いが、幅が3～4m、深さがもっとも深い部分でも0.8mで、断面形状は底面に凹凸はあるが基本的には、平坦な逆台形となっている。堆積土の特徴からほぼ全体が人為堆積による埋土で、堀廃絶時に埋められたと考えられる。明確な作り替えの痕跡は確認できない。

出土遺物の様相をみると、72SD1では遺物の多くが上層の近世以降の盛土からの出土で、下層の自然堆積層からの出土遺物は少ない。自然堆積層の出土遺物は短時間に一挙に堆積するような集中した出土状況は確認できない。器形が復元できるような資料が少ないことや、最下層に近い部分から出土したかわらけ類は摩滅も著しいことから自然堆積層は漸移的に堆積したとみられ、これは土層の観察とも整合する。ただし、各トレンチごとで埋没時の周辺状況が影響したためか、ロクロかわらけと手づくねかわらけの数を比較した場合には差が大きい(表12)。最下層上部としたものは、最下層の自然堆積層(Aトレンチ:25層、Cトレンチ:32層)の上部の層界の周囲から出土したもので、出土量が比較的まとまることから、自然堆積の中では一時期表土になったことも想定できる。遺物内容をみると、ロクロかわらけの重量比が25%で手づくねかわらけの破片数が178%の値を示す。トレン

ちのそれぞれで差が大きいため確定はできないが、ロクロかわらけを一定量含みながらも手づくねかわらけの量が増加する段階にあると考えられ、12世紀後半段階に想定できる。ただし、これらの層から出土したかわらけは摩滅の著しい小破片が多く器形が判明する資料が少ないため、埋没の時期は周囲の状況も含めた検討が必要である。次に、下層としたものは最下層の上層にあたり、自然堆積の第2段階と捉えられる層から出土した資料である。この層から出土したかわらけは、ロクロかわらけの重量比が11.3%で手づくねかわらけの破片数が312%の値を示し、手づくねかわらけが多くを占める。最下層と比較した場合も、より手づくねかわらけの量比が増加する。これらの差異が時期を示すとすればより後出の特徴とみなすことができる。今回の範囲ではトレンチごとの数量の違いもあり堆積の状況にも影響を受けたことが考えられる。ただし、いずれの層から出土した資料も、12世紀後半の中でもより後出の新时期の時期の特徴を示すものに限られる。

表12 72SD1出土かわらけロクロ比率

Aトレンチ				Cトレンチ				合計			
	重量比1 (※1)	重量比2 (※2)	かわらけ 種別比 (※3)		重量比1	重量比2	かわらけ 種別比		重量比1	重量比2	かわらけ 種別比
上層	21.2	22.2	154	上層	37.9	37.9	150	上層	22.4	23.4	154
6～11層	33.3	59.4	133	14層	11.5	19.9	129		—		
11～19層	20.7	22.3	154	22層	18.6	22	188		—		
下層 (19～20)	13.9	13.9	300	下層 (27～29)	5.9	15.1	434	下層	11.3	14.2	312
20～25層	33.1	37.7	135	29-32層	15.2	15.2	214	最下層 上部	25.5	28.1	178

※1 (ロクロ底部重量/かわらけ総重量) ×100で示した値で数値が大きいほどロクロ底部の比率が多い。

※2 (ロクロ底部片重量/かわらけ総重量) ×100で示した値で、完形の個体や底部から口縁部まで残存する資料の重量を含むものである。

※3 破片数の比率で、(手づくね/ロクロ) ×100で示した値で、100を超える場合に手づくねの比率が大きい。

72SD2はBトレンチ、Cトレンチでは削平が著しく、遺物の出土量が少ない。Aトレンチの内容をみると、下層から出土した手づくねかわらけの大皿は口径が約15cm程度と大きい値を示す。手づくねかわらけの大皿は平泉での出現の時期に口径が大きく、その後縮小していくことが知られている。今回出土したこれらの資料も口径からみた場合にはこれらと類似した特徴をもち、12世紀中葉に近い時期と考えられる。また、最下層から渥美窯産の山茶碗が出土している。口縁部が残存していないため確定できない点もあるが、高台の形状から12世紀中葉の中でも後半の時期と考えられる。ロクロかわらけの器形は皿形のものに限定され、12世紀後半とみられるが器高が高い資料も含まれるなど中葉に近い時期の様相と捉えられる。ロクロかわらけと手づくねかわらけの数量を比較すると(表13)、9層から最下層までの第1段階、6～8層までの第2段階の堆積層から出土したかわらけはロクロの量比が比較的多く、12世紀後半のなかでも中葉に近い時期のものと考えられ、器形的な特徴とも矛盾しない。

これらからそれぞれの堀跡について時期をみると、特定は難しい部分があるが、72SD2は12世紀後半をさかのぼる中葉の時期までに構築され、12世紀後半の時期から埋め戻しが行われたと考えられる。埋め戻しには数度の段階が想定できるが、途中で堀の底面となるような層は確認できず、その時間幅は判別できない。ただし、最上層以外の下層と上層ではロ

表13 72SD2出土かわらけロクロ比率

Aトレンチ			
	重量比1	重量比2	かわらけ 種別比
2層	2.0	9.4	620
6～8層	24.1	25.8	114
8・9層	30.3	36.3	67
9～13層	31.0	38.4	144
15～16層	26.8	32.7	105

クロかわらけの比率は大きくは変わらず、資料の器形的な特徴にも大きな差は看取できない。一方で、72SD1は自然堆積による埋土で、資料も少ないが下層からの出土資料でも口径が小さい手づくねかわらけが含まれるなど12世紀後半でその中でも新しい時期の特徴をもつものがみられ、かわらけの種別でもロクロよりも手づくねが増加する段階であることがわかる。これらから12世紀後半以降に埋没が開始したと考えられ、72SD2と並存する時期があった可能性はあるが、より後出の時期の資料が多い。この内容が他地点の様相にどの程度敷衍できるかは今後の調査成果をあわせて検討したい。また、72SD2は大きく削平を受けており、埋没した段階でどの部分まで埋められていたのかなども隣接地点を含めた検討が必要である。なお、いずれの遺構についても構築の時期を明確に示す資料は得られておらず、今回検討した資料は埋没する廃絶の時期を示すものと考えられる。

ここまでみたように72SD1と72SD2は、平行して確認され遺構同士の関係からは前後関係は判断できない。ただし、規模や断面形状には大きな違いがあるほか、堆積土の状況や出土遺物の様相にも異なる点が多く指摘できる。特に、堆積層の特徴が人為堆積と自然堆積にわかれる点は大きな相違点と捉えられる。またそれぞれから出土したかわらけでも、器形的な特徴や手づくねとロクロの数量比には明瞭に違いがみられる。これらの点がそれぞれの機能した時期といかに結びつくかは他地点の調査も含めて検討すべきものだが、今回の調査範囲では2条の堀跡が長期間にわたって同時期に存在すると考える積極的な根拠は少ない。

2 掘立柱建物跡の周辺の様相

北区上段では掘立柱建物跡1棟、柱列2条のほか柱穴を検出した。これらのうち建物跡などの組み合わせる遺構は軸方向がいずれも17°となっている(表14)。直接の遺構の切り合いがなく前後関係は不明だが、平面で重複しており同時に存在する遺構ではない。72SA1と72SA2は平行しており建物跡を構成する可能性もあるが、柱間の数や間隔がそれぞれで異なることから別遺構と考えている。南北がそれぞれ途切れるため性格は判然としないが、区画施設等の可能性もある。

今回の調査範囲と最も近接して建物跡が確認されている56次調査の範囲とは20mほど離れており、その間には建物跡が存在した可能性が高いがその部分は標高が現状で1mを超える高低差があり、70次調査の結果からも大きく削平を受けたことがわかる。そのため遺構の多くは失われており、現状では不明である。なお、建物跡を検出した北区上段では南北60のラインを境に東側は標高が30cm程度低くなっており、遺構の状況からもこの範囲が削平を受けたことがわかる。この範囲で明確に建物跡と

表14 建物軸方位

建 物	軸方位
72SB1	N-17°-E
72SA1	N-17°-E
72SA2	N-17°-E
56SB1	N-7°-E
56SB2	N-18°-E
56SB4	N-3°-E

なる柱穴が少ないのはこのことによる。また、70次調査の範囲とこの部分はほぼ同一の標高である。70次調査区では井戸跡等は確認されたが、建物跡は確認できておらず、同様の影響によるものと考えられる。したがって72SB1のみが独立して存在したように残され、この周囲での建物跡の状況を判断する材料は極めて少ない。

72SB1と周辺から出土したかわらけを種別に表にまとめた(表15)。72SA1と72SA2からは、精査した遺構が少ないこともあり、出土遺物が少なく総量でもかわらけ1個体に満たないため時期判断の材料とはできない。72SB1から出土したかわらけは、柱穴からの出土でもあり、小破片のみで器形がわかるものはない。破片でかわらけの種別をみると、ロクロかわらけの量比が重量比で

26%、破片数でも手づくねかわらけ破片数が100%前後と両者が同量ずつに近い値を示し、ロクロかわらけが比較的多く含まれる。また、72SB1より新しい遺構として、建物跡を構成しないが断面から柱穴と判断できるP47がある。ここからは比較的多くのかわらけが出土しているが、器形がわかるものはない。破片数などをみると、ロクロかわらけの重量比が12%、手づくねかわらけの破片数が200%とロクロかわらけを大きく上回る量比となり、手づくねかわらけが多く含まれる。遺構の前後関係と手づくねかわらけの数量の増加との相関がみられ、P47はより新しい時期の遺構であることがこの点からも理解できる。いずれの遺構でも器形のわかる資料がないが、72SB1はロクロかわらけが比較的多く含まれるが手づくねも同程度確認できる段階にあてることができ（註1）、12世紀中葉に近い後半段階と考えられる。P47は手づくねかわらけが多くを占める段階で12世紀後半代でその中でも新しい時期の遺構と考えられる。なお70次調査の範囲で井戸跡が2基確認されているうちより新しい時期に想定できる70SE3と、72SB1はやや後出の特徴をもつものの類似した値を示し、比較的近接した時期に機能したことも想定できる。ただし、この間の範囲が削平のため建物跡が確認できていないため確定はできない。

このように建物は12世紀後半代のなかでやや古い時期の72SB1と新しい時期のP47の変遷が捉えられるが、それぞれの性格や72SA1、SA2の位置づけなど明確にできていない部分も多い。特に、周辺

表15 遺構出土かわらけ数量表

72SB1	総量	ロクロ									手づくね									不明
		大			小			不明			大			小			不明			
		口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
破片数	124	0	1	0	3	5	1	3	10	0	1	0	0	8	1	0	11	6	0	74
重量	477.2		14.5	0	41.2	25.8		69.2	0											
重量比1			26.2																	
重量比2			31.6																	
かわらけ種別比			117																	

72SA1	総量	ロクロ									手づくね									不明
		大			小			不明			大			小			不明			
		口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
破片数	19	0	1	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0	11
重量	124.7		25	0	31.4	0		8	0											
重量比1			51.6																	
重量比2			51.6																	
かわらけ種別比			100																	

72SA2	総量	ロクロ									手づくね									不明
		大			小			不明			大			小			不明			
		口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
破片数	18	0	0	0	0	2	0	3	0	0	0	0	0	1	1	0	3	1	0	7
重量	67.1		0	0	18.7	0		0	0											
重量比1			27.9																	
重量比2			27.9																	
かわらけ種別比			120																	

P47	総量	ロクロ									手づくね									不明
		大			小			不明			大			小			不明			
		口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
破片数	129	1	0	0	3	1	0	6	5	0	1	2	0	10	0	0	2	17	0	81
重量	409.3		0	0	12.0	0		37.9	0											
重量比1			12.1																	
重量比2			12.2																	
かわらけ種別比			200																	

72SK3	総量	ロクロ									手づくね									不明
		大			小			不明			大			小			不明			
		口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
破片数	68	1	1	0	1	1	0	5	6	0	0	0	0	4	0	0	2	12	0	35
重量	316.0		26.0	0	25.2	0		59.1	0											
重量比1			34.9																	
重量比2			34.9																	
かわらけ種別比			120																	

部分が削平を受けて遺構の状況が確認できない点はこの範囲の性格を判断する上で大きな障壁である。また、かわらけから年代を上述のように捉えた場合、他地点の建物軸方向との関連には課題も残される。56次調査では72SB1と類似した軸方向の56SB2がある一方で、56SB1や56SB4といった異なる軸方向を示す建物跡が確認されている。この調査では、柱穴跡の切り合いから56SB2から56SB1の変遷が捉えられている。今回の調査範囲とこれらとが関連をもって変遷したのか、堀内部の北端部分の様相が中心的な区域とどのような関連性をもって機能したかなどが課題として挙げられる。この範囲は堀外部とのつながりや堀内部での変遷を捉える上でも重要な内容を含み、今後隣接地点の調査とともに既調査分の遺物内容もあわせて、堀内部のなかの端部にあたるこれら範囲の様相を検討していきたい。

(櫻井)

註

- 1) 柳之御所遺跡の史跡整備にあたって示した変遷では3群と4群とした段階の境界部分にあたる(柳之御所遺跡調査事務所 2008)。ただし、特に4群については建物の軸方向も含めて課題もあり、ここでは細分しない。

引用文献

- 岩手県教育委員会 1993 『平泉遺跡群範囲確認調査』岩手県文化財調査報告書第94集
岩手県教育委員会 2003 『柳之御所遺跡-第56次発掘調査概報-』岩手県文化財調査報告書第117集
岩手県教育委員会 2008 『柳之御所遺跡-第65次発掘調査概報-』岩手県文化財調査報告書第125集
岩手県教育委員会 2010a 『柳之御所遺跡-第69次発掘調査概報-』岩手県文化財調査報告書第130集
岩手県教育委員会 2010b 『柳之御所遺跡-第I期保存整備事業報告書』岩手県文化財調査報告書第131集
岩手県教育委員会 2011 『柳之御所遺跡-第70次発掘調査概報-』岩手県文化財調査報告書第133集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市の文化財第49集
中野晴久 1995 「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』
平泉町教育委員会 1983 『柳之御所跡発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第1集
平泉町教育委員会 1993 『平泉遺跡群範囲確認調査報告書-柳之御所跡第38次・39次・40次発掘調査-』岩手県平泉町文化財調査報告書第33集
MIHO MUSEUMほか 2010 『古陶の譜 中世のやきもの』
八重樫忠郎 2001 「中世前期の時間軸としての遺物」『平泉文化研究年報』第1号 pp.37-46
八重樫忠郎 2010 「消費地からの渥美編年」『渥美半島の考古学』小野田勝一先生追悼論文集 pp.289-299
柳之御所遺跡調査事務所 2008 「柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷(中間報告 その4)」『平泉文化研究年報』第8号 pp.65-75

表16 出土遺物観察表(かわらけ)

掲載番号	器種名	出土地点	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	残存率(%)	色調	備考	登録番号
1	ロクロ 小	72SD1 Aトレンチ	25層	(7.5)	1.3	(6.4)	23.9	45	7.5YR8/3浅黄橙		72Rok4
2	ロクロ 小	72SD1 Aトレンチ	25層	(7.7)	1.6	(5.6)	28.1	40	2.5Y8/3淡黄	全体に摩滅が著しい	72Rok5
3	ロクロ 小	72SD1 Aトレンチ	壁面崩落土	(9.4)	1.9	(7.6)	37.5	45	2.5Y8/2灰白		72Rok8
4	ロクロ 大	72SD1 Aトレンチ	壁面崩落土	(13.2)	(3.3)	(8.2)	47.4	25	2.5YR7/2明赤灰		72Rok7
5	手づくね 小	72SD1 Aトレンチ	25層	(7.1)	1.5		24.0	40	2.5Y8/1灰白		72Rok6
6	手づくね 小	72SD1 Aトレンチ	18層下位	10.3	1.5		41.3	40	2.5Y8/3淡黄	スノコ痕有(薄い)	72Rok2
7	手づくね 大	72SD1 Aトレンチ	19層	11.8	2.3		37.7	25	2.5Y7/2灰黄	全体に摩滅が著しい	72Rok3
8	手づくね 大	72SD1 Aトレンチ		13.9	2.7		71.1	40	2.5Y8/2灰白		72Rok1
92	ロクロ 小	72SD1 Cトレンチ	29-32層		(1.1)	6.6	36.5	30	5Y8/3淡黄	土製円板?	72Rok13
93	ロクロ 小	72SD1 Cトレンチ	29-32層			(7.4)	25.5	10	5Y8/2灰白	底部のみ海綿骨針含む	72Rok14
94	ロクロ 大	72SD1 Cトレンチ	27~29層	(14.6)	3.4	(9.0)	42.2	40	10YR8/1灰白	海綿骨針を含む	72Rok9
95	手づくね 小	72SD1 Cトレンチ	27~29層	(9.8)	1.8		31.3	40	5Y8/3淡黄	摩滅が激しい	72Rok11
96	手づくね 大	72SD1 Cトレンチ	27~29層	(12.2)	(2.1)		20.5	20	2.5Y8/2灰白		72Rok10
97	手づくね 大	72SD1 Cトレンチ	29-32層	(16.0)	(3.5)		45.9	15	2.5Y8/2灰白		72Rok12
189	ロクロ 小	72SD2 Aトレンチ	No.1	8.4	1.8	6.3	72.9	80	5Y8/3淡黄	海綿骨針を含む	72Rok25
190	ロクロ 小	72SD2 Aトレンチ	10層	8.4	1.75	5.4	70.2	70	5Y7/2灰白	海綿骨針を含む	72Rok30
191	ロクロ 小	72SD2 Aトレンチ	15層	8.0	1.6	6.3	73.0	95	5Y8/1灰白	胎土に海綿骨針を含む、ロクロ右回転	72Rok40
192	ロクロ 小	72SD2 Aトレンチ	10層	(8.4)	2.2	(4.5)	35.2	50	2.5Y8/2灰白	海綿骨針を含む	72Rok28
193	ロクロ 大	72SD2 Aトレンチ	1層	(14.0)	(3.3)	(7.0)	108.9	60	2.5Y8/3淡黄	スノコ痕有	72Rok27
194	ロクロ 大	72SD2 Aトレンチ	1層	13.8	3.1	7.4	174.5	95	10YR8/2灰白	摩滅激しいが、回転糸切り痕有	72Rok36
195	ロクロ 大	72SD2 Aトレンチ	10層	(12.5)	3.5	(7.5)	119.0	50	10YR7/2にふい黄橙		72Rok39
196	手づくね 小	72SD2 Aトレンチ	1層	(7.9)	1.25		24.8	55	2.5Y8/3淡黄	摩耗して横ナデと指押えの境わりにくい	72Rok32
197	手づくね 小	72SD2 Aトレンチ	9~12層	8.3	1.5		48.2	80	5Y8/3淡黄		72Rok37
198	手づくね 小	72SD2 Aトレンチ	10層	8.9	1.6		46.2	65	2.5Y8/2灰白		72Rok38
199	手づくね 小	72SD2 Aトレンチ	10層	(9.0)	2.1		39.1	55	2.5Y8/3淡黄		72Rok35
200	手づくね 小	72SD2 Aトレンチ	15層	(9.2)	(1.9)		42.3	60	2.5Y8/2灰白	スノコ痕有	72Rok24
201	内折れ	72SD2 Aトレンチ	9・10層	(8.8)	(1.3)		10.4	15	5YR4/1灰		72Rok34
202	手づくね 大	72SD2 Aトレンチ	1層	(15.0)	(3.1)		74.8	30	2.5Y8/2灰白		72Rok26
203	手づくね 大	72SD2 Aトレンチ	10層	(14.6)	2.9		74.0	35	2.5Y8/3淡黄		72Rok29
204	手づくね 大	72SD2 Aトレンチ	1層	(14.8)	3.0		123.1	60	2.5Y8/4淡黄	全体的にかなりひずんでいる	72Rok31
205	手づくね 大	72SD2 Aトレンチ	10層	13.0	2.8		195.4	100	2.5Y8/1灰白	海綿骨針を含む、スノコ痕が一部にみられるが薄い	72Rok33
206	手づくね 大	72SD2 Aトレンチ	15層	14.7	2.7		171.5	99	5Y8/2灰白	内面に油煙痕跡	72Rok41
211	ロクロ 小	72SD2 Bトレンチ	6・7層	8.4	2.2	3.6	28.1	50	7.5YR8/4浅黄橙	海綿骨針を含む	72Rok47
212	ロクロ 小	72SD2 Bトレンチ	2層	8.4	1.5	6.0	60.7	80	2.5Y8/2灰白	全体的に摩滅が著しい、海綿骨針を少量含む	72Rok46
213	ロクロ 大	72SD2 Bトレンチ	2層	14.1	3.8	7.0	226.0	80	2.5Y8/4淡黄	海綿骨針を含む、左側は摩滅激しい	72Rok42
214	ロクロ 大	72SD2 Bトレンチ	2層	13.6	3.7		122.6	80	2.5Y8/2灰白		72Rok43
215	ロクロ 大	72SD2 Bトレンチ	2層	(14.5)	3.6	6.7	118.4	55	2.5Y8/3淡黄	全体的に摩滅が激しい	72Rok44
216	ロクロ 大	72SD2 Bトレンチ	2層	(13.5)	(7.0)	3.5	86.8	40	7.5YR8/3浅黄橙		72Rok45
218	ロクロ 小	72SD2 Cトレンチ	3層	(7.6)	(3.5)	2.1	27.6	60	7.5YR8/2灰白		72Rok49
219	ロクロ 大	72SD2 Cトレンチ	3層	13.6	3.5	8.0	184.5	95	2.5Y8/2灰白		72Rok48
220	ロクロ 大	72SD2 Cトレンチ	3層	(14.0)	4.0	(7.3)	123.6	55	10YR8/6黄橙	海綿骨針を含む	72Rok51
221	手づくね 小	72SD2 Cトレンチ	3層	9.9	2.1		65.8	60	2.5Y8/2灰白		72Rok50
222	手づくね 大	72SD2 Cトレンチ	7層	(15.2)	(3.4)		81.9	45	10YR8/1灰白	全体的に摩滅が激しい、海綿骨針を含む	72Rok52
223	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	13.2	2.6		140.9	95	5Y8/2灰白	摩滅が激しい、スノコ痕有(薄い)	72Rok15
224	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	(13.7)	2.8		141.1	75	2.5Y8/3淡黄	摩滅激しい	72Rok16
225	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	14.0	2.9		149.8	98	2.5Y8/2灰白		72Rok17
226	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	13.0	3.0		160.3	98	5Y6/1灰	スノコ痕有、内外面黒色化、内面に一部砂粒	72Rok18
227	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	12.7	2.6		148.1	97	2.5Y8/4淡黄		72Rok19
228	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	13.5	2.9		198.1	85	5Y8/3淡黄	スノコ痕有	72Rok20
229	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	(13.8)	2.85		111.9	65	2.5Y7/2灰黄		72Rok21
230	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	13.8	2.8		138.0	75	2.5Y8/3淡黄	スノコ痕有	72Rok22
231	手づくね 大	72SD2 (54-38)	1層	12.6	2.5		43.0	35	2.5Y8/1灰白		72Rok23
245	手づくね 大	72SD3	1層	(12.0)	(2.4)		49.2	40	10YR8/4浅黄橙	全体的に粗い胎土、胎土に2mmの礫を多く含む	72Rok53
253	ロクロ 小	60-41	表土	8.2	2.0	6.6	55.9	100	5YR8/4淡橙		72Rok55
256	ロクロ 大	北側調査区	表土	14.0	3.1	9.3	61.9	35	10YR8/3浅黄橙		72Rok56
	手づくね 大	高台北西部	表土							漆付着、写真掲載	72Rok54

表17 出土遺物観察表 (国産陶器)

掲載番号	産地・種別	器種	部位	出土地点	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
9	渥美	刻画文壺	胴部	72SD1 Aトレンチ	1～3層	18.7	外:2.5Y7/2灰黄色 内:2.5Y8/1灰白色	外面に降灰釉	72ROt72
10	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1・3層	48.2	外:N4/灰色 内:10YR4/1褐灰色	内面に降灰釉	72ROt74
11	渥美	甕	口縁	72SD1 Aトレンチ	1・3層	62.7	外:10YR4/1褐灰色 内:2.5Y3/1黒褐色	内面に降灰釉	72ROt75
12	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	2～4層	16.7	外:2.5Y5/2暗灰黄色 内:5P6/1紫灰色	押印(平行条線文)	72ROt78
13	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	30.5	外:2.5Y6/2灰黄色 内:2.5Y7/1灰白色	外面に降灰釉	72ROt80
14	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	55.7	外:10YR4/3にぶい黄褐色 内:2.5Y8/1灰白色	外面に降灰釉	72ROt81
15	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	196.8	外:5PB7/1明青灰色 内:5PB7/1明青灰色	押印(平行条線文)	72ROt82
16	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	15.7	外:7.5YR6/1褐灰色 内:7.5YR6/1褐灰色		72ROt86
17	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1・3層	16.7	外:2.5Y5/1黄灰色 内:10YR7/1灰白色	外面に降灰釉	72ROt88
18	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	118.2	外:7.5Y7/1灰白色 内:N6/灰色		72ROt92
19	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	28.8	外:5Y6/3オリーブ黄色 内:5RP7/1明紫灰色	外面に降灰釉	72ROt96
20	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	24.8	外:N4/灰色 内:N5/灰色		72ROt98
21	渥美	甕	口縁	72SD1 Aトレンチ	3層	5.5	外:2.5Y6/1黄灰色 内:2.5Y6/2灰黄色	内面に降灰釉	72ROt89
22	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	130.1	外:N6/灰色 内:5R7/1明赤灰色		72ROt99
23	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	149.9	外:5Y5/1灰色 内:5P4/1暗紫灰色		72ROt100
24	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	47.7	外:2.5Y6/3にぶい黄色 内:2.5Y6/2灰黄色		72ROt101
25	渥美	刻画文壺	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	13.1	外:5Y7/1灰白色 内:2.5Y6/1黄灰色	外面に降灰釉	72ROt103
26	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	64.4	外:N5/灰色 内:10YR6/2灰黄褐色		72ROt102
27	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	126.8	外:5P6/1紫灰色 内:5PB6/1青灰色		72ROt104
28	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	19.1	外:2.5Y5/2暗灰黄色 内:5P6/1紫灰色		72ROt112
29	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	115.5	外:5Y8/1灰白色 内:7.5YR6/4にぶい橙色	外面に降灰釉	72ROt108
30	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	45.6	外:10YR6/1褐灰色 内:10YR7/1灰白色		72ROt116
31	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	20.2	外:7.5Y5/2灰オリーブ色 内:7.5Y5/1灰色		72ROt109
32	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	27.1	外:5Y4/1灰色 内:2.5Y4/1黄灰色		72ROt110
33	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	76.2	外:2.5GY2/1黒色 内:5Y4/1灰色	押印(格子文)	72ROt114
34	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	154.5	外:5PB7/1明青灰色 内:5Y6/1灰色		72ROt113
35	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	127.6	外:5Y7/1灰白色 内:5R6/1赤灰色	押印(縦長格子文)	72ROt120
36	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	101.1	外:2.5Y3/3暗オリーブ褐色 内:5PB7/1明青灰色	押印(縦長格子文)、外面に降灰釉、内面器面剥落	72ROt121
37	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	3.0	外:2.5Y8/1灰白色 内:2.5Y8/1灰白色		72ROt122
38	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	89.8	外:7.5Y7/1灰白色 内:5PB7/1明青灰色	外面ケズリ、外面に降灰釉	72ROt124
39	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	45.4	外:N8/灰白色 内:N7/灰白色	押印(不明)、内外面に降灰釉	72ROt127
40	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	19層	9.5	外:5P7/1明紫灰色 内:5GY8/1灰白色		72ROt131
41	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	18層下位	386.2	外:5Y7/1灰白色 内:N7/灰白色	押印(平行条線文?)、外面に降灰釉	72ROt130
42	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	20-25層	136.3	外:5PB7/1明青灰色 内:5RP7/1明紫灰色	押印(平行条線文)、内面に降灰釉	72ROt132
43	渥美	甕	頸部	72SD1 Aトレンチ	20-25層	32.9	外:10Y8/1灰白色 内:N5/灰色		72ROt133
44	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	20-25層	18.6	外:2.5YR6/2灰赤色 内:7.5YR7/2明褐灰色	押印(格子文)	72ROt135
45	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	20-25層	33.4	外:2.5Y5/1黄灰色 内:10R6/1赤灰色		72ROt134
46	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	18層	40.7	外:5PB4/1暗青灰色 内:5P5/1紫灰色	摩耗	72ROt136
47	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	18層	68.5	外:2.5Y7/2灰黄色 内:N8/灰白色	押印(平行条線文)、内面器面剥落	72ROt138
48	渥美	甕	口縁	72SD1 Aトレンチ	20-25層	46.8	外:5P5/1紫灰色 内:10Y8/1灰白色	内面に降灰釉	72ROt143
49	渥美	突帯文壺	頸部	72SD1 Aトレンチ	19層	42.5	外:N4/灰色 内:N5/灰色	外面に降灰釉	72ROt139
50	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1層	54.3	外:5Y6/2オリーブ色 内:5P7/1明紫灰色	外面に降灰釉	72ROt145
51	渥美	甕	口縁	72SD1 Aトレンチ	1層	53.2	外:7.5Y4/1灰色 内:5Y8/1灰白色	摩耗	72ROt146
52	渥美	片口鉢	口縁	72SD1 Aトレンチ	6層	29.1	外:7.5YR6/1褐灰色 内:5Y7/1灰白色		72ROt106
53	渥美	片口鉢	底部	72SD1 Aトレンチ	6層	43.9	外:2.5Y7/1灰白色 内:10YR7/1灰白色	内面摩耗	72ROt107
54	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1・3層	82.8	外:10YR8/1灰白色 内:5YR7/3にぶい橙色		72ROt147
55	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1～3層	37.6	外:10Y5/2オリーブ灰色 内:2.5Y7/2灰黄色	内面に降灰釉	72ROt71
56	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1・3層	36.5	外:10YR3/4暗褐色 内:10YR6/4にぶい黄橙色	押印(格子文)	72ROt76
57	常滑	甕	頸部	72SD1 Aトレンチ	2～4層	3.5	外:7.5YR5/3にぶい褐色 内:10YR6/3にぶい黄褐色		72ROt77
58	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	16.6	外:7.5YR5/3にぶい褐色 内:7.5YR6/3にぶい褐色	内面に降灰釉	72ROt79
59	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	102.6	外:7.5YR5/3にぶい褐色 内:7.5YR8/1灰白色		72ROt83
60	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	18.8	外:5Y6/3オリーブ黄色 内:10YR6/4にぶい黄褐色	外面に降灰釉	72ROt85
61	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	30.7	外:10YR5/1褐灰色 内:10YR5/1褐灰色		72ROt90
62	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	130.2	外:7.5YR2/2黒褐色 内:7.5YR4/3褐色	押印(縦長格子文)	72ROt95
63	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	46.9	外:10YR4/1褐灰色 内:10YR5/2灰黄褐色		72ROt93
64	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	30.0	外:7.5YR3/3暗褐色 内:7.5YR6/4にぶい橙色		72ROt115
65	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	40.2	外:2.5Y3/1黒褐色 内:5Y4/1灰色	内面に降灰釉	72ROt111
66	常滑	甕	底部	72SD1 Aトレンチ	6・25層	150.0	外:5YR3/4暗赤褐色 内:5YR4/4にぶい褐色	外面ケズリ	72ROt105
67	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	45.8	外:5P7/1明紫灰色 内:10YR5/2灰黄褐色	外面に降灰釉だが剥落	72ROt117
68	常滑	片口鉢	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	5.3	外:2.5Y5/1黄灰色 内:5Y7/1灰白色		72ROt118
69	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	29.5	外:7.5YR4/1褐灰色 内:10YR5/1褐灰色		72ROt123

掲載番号	産地・種別	器種	部位	出土地点	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
70	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	38.2	外：7.5Y7/1灰白色 内：10YR5/6黄褐色	押印(平行条線文)、外面に降灰釉	72ROt126
71	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	38.6	外：7.5YR4/6褐色 内：10YR6/4にぶい黄褐色		72ROt128
72	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	18層下位	30.2	外：5Y3/1オリーブ黒色 内：5Y5/2灰オリーブ色	内面に降灰釉	72ROt129
73	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	25層	33.8	外：5YR2/4極暗赤褐色 内：5YR5/4にぶい赤褐色		72ROt144
74	常滑	甕	頸部	72SD1 Aトレンチ	19層	105.7	外：7.5Y4/2灰オリーブ色 内：2.5Y4/1黄灰色	外面に降灰釉	72ROt148
75	常滑	片口鉢	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	14.0	外：2.5Y8/1灰白色 内：2.5Y8/1灰白色	外面ケズリ	72ROt84
76	常滑	片口鉢	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	184.1	外：N7/灰白色 内：5Y6/1灰色	外面ケズリ、内面・高台端部摩耗	72ROt87
77	須恵器系	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	18層下位	69.7	外：N5/灰色 内：N5/灰色		72ROt190
78	須恵器系	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1層	33.3	外：N5/灰色 内：5PB6/1青灰色		72ROt191
79	須恵器系	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	3層	14.8	外：N5/灰色 内：5PB7/1明青灰色		72ROt192
80	須恵器系	壺	頸部	72SD1 Aトレンチ	6層	52.4	外：5PB6/1青灰色 内：5PB6/1青灰色		72ROt193
81	須恵器系	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	70.1	外：5Y6/1灰色 内：5Y5/1灰色	内面剥落	72ROt194
82	須恵器系	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6層	32.5	外：N4/灰色 内：N6/灰色		72ROt195
83	須恵器	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	1層	20.2	外：10BG4/1暗青灰色 内：10G4/1暗緑灰色		72ROt199
84	須恵器	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	40.3	外：5B4/1暗青灰色 内：5BG4/1暗青灰色		72ROt200
85	須恵器	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	6～11層	24.6	外：N4/灰色 内：10GY4/1暗緑灰色		72ROt201
98	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1・2層	47.8	外：2.5Y7/2灰黄色 内：2.5Y7/1灰白色	押印(縦長格子文)	72ROt1
99	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1層	51.2	外：2.5Y7/1灰白色 内：7.5YR5/1褐灰色	押印(縦長格子文)、内面に降灰釉	72ROt2
100	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	3層	71.4	外：2.5Y7/2灰黄色 内：10YR6/1褐灰色	外面摩耗	72ROt8
101	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	75.6	外：7.5YR7/1明褐灰色 内：10YR7/1灰白色		72ROt12
102	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	47.1	外：7.5YR7/2明褐灰色 内：7.5YR5/3にぶい褐色	内面に降灰釉	72ROt13
103	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	11.8	外：5Y8/2灰白色 内：10YR7/4にぶい黄褐色	内面に降灰釉	72ROt15
104	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	29.1	外：10YR6/1褐灰色 内：7.5YR7/1明褐灰色		72ROt16
105	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	40.6	外：10YR6/4にぶい黄褐色 内：10YR4/4褐色		72ROt17
106	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	14.1	外：5Y3/2オリーブ黒色 内：N6/灰色	外面に降灰釉	72ROt18
107	渥美	片口鉢	口縁	72SD1 Cトレンチ	14層	22.9	外：N7/灰白色 内：5PB6/1青灰色		72ROt19
108	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	4.6	外：2.5Y6/1黄灰色 内：2.5Y5/1黄灰色		72ROt20
109	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	24.2	外：2.5Y5/1黄灰色 内：7.5YR5/2灰褐色	押印(不明)	72ROt21
110	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	20.8	外：7.5YR6/1褐灰色 内：7.5YR5/3にぶい褐色		72ROt23
111	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	36.1	外：5RP7/1明紫灰色 内：5P7/1明紫灰色		72ROt27
112	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	81.7	外：5Y4/1灰色 内：5Y5/1灰色	外面に降灰釉	72ROt28
113	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	66.1	外：10YR8/3浅黄褐色 内：2.5YR4/4にぶい赤褐色	生焼け	72ROt30
114	渥美	甕	底部付近	72SD1 Cトレンチ	14層	165.1	外：2.5Y8/1灰白色 内：2.5Y7/1灰白色	押印(格子文)、生焼け、二次被熱	72ROt33
115	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	106.4	外：10YR6/3にぶい黄褐色 内：5PB7/1明青灰色	外面に降灰釉	72ROt34
116	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	6層	166.7	外：5P7/1明紫灰色 内：5P7/1明紫灰色	押印(平行条線文)	72ROt36
117	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	231.4	外：5R7/1明赤灰色 内：5RP7/1明紫灰色	押印(平行条線文)	72ROt35
118	渥美	刻画文壺	胴部	72SD1 Cトレンチ	6層	18.4	外：10YR6/1褐灰色 内：2.5Y6/1黄灰色	草花文	72ROt38
119	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	112.2	外：2.5GY2/1黒色 内：5Y5/1灰色	押印(格子文)、内面に降灰釉	72ROt40
120	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	6層	119.3	外：5P7/1明紫灰色 内：10YR6/1褐灰色	押印(縦長格子文)	72ROt39
121	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	74.2	外：7.5YR6/1褐灰色 内：7.5YR7/2明褐灰色		72ROt41
122	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	67.7	外：5Y7/1灰白色 内：2.5Y6/1黄灰色	内面に降灰釉	72ROt45
123	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	45.4	外：7.5YR7/1明褐灰色 内：5R7/1明褐灰色	押印(不明)	72ROt42
124	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	62.1	外：5RP7/1明褐灰色 内：5RP6/1紫灰色		72ROt43
125	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	43.3	外：5RP7/1明褐灰色 内：5RP7/1明褐灰色	摩耗	72ROt44
126	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	36.6	外：N5/灰色 内：5Y4/3暗オリーブ色	二次被熱、内面に降灰釉	72ROt47
127	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	20.7	外：2.5Y8/2灰白色 内：2.5Y7/1灰白色	生焼け	72ROt48
128	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	9.6	外：2.5Y7/2灰黄色 内：10YR6/4にぶい黄褐色	外面に降灰釉	72ROt49
129	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	21.3	外：7.5YR6/2灰褐色 内：5RP7/1明紫灰色	押印(格子文)	72ROt50
130	渥美	甕	頸部	72SD1 Cトレンチ	14層	20.9	外：5YR4/4にぶい赤褐色 内：5YR5/4にぶい赤褐色	外面灰釉刷毛塗り	72ROt51
131	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	79.9	外：5Y4/1灰色 内：5P6/1紫灰色	押印(格子文?)	72ROt52
132	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	20.1	外：5YR5/1褐灰色 内：10YR7/1灰白色		72ROt54
133	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	28.2	外：5RP7/1明紫灰色 内：5Y6/1灰色		72ROt55
134	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1層	80.5	外：10YR6/1褐灰色 内：2.5Y6/1黄灰色	押印(縦長格子文?)	72ROt58
135	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1層	68.3	外：2.5Y5/1黄灰色 内：N5/灰色	外面に降灰釉	72ROt59
136	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1層	80.1	外：5P7/1明紫灰色 内：5P6/1紫灰色	押印(平行条線文)	72ROt60
137	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1・27～29層	193.3	外：10YR4/1褐灰色 内：2.5Y7/1灰白色	押印(格子文)	72ROt61
138	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	2層				
138	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	27～29層	45.7	外：7.5YR6/1褐灰色 内：7.5Y5/2灰オリーブ色	内面に降灰釉	72ROt65
139	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	27～29層	64.9	外：7.5Y6/1灰色 内：7.5Y6/1灰色	内面に降灰釉	72ROt66
140	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	27～29層	179.5	外：5P5/1紫灰色 内：7.5Y8/1灰白色	押印(格子文)、内面に降灰釉	72ROt70
141	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	27～29層	74.7	外：5Y4/1灰色 内：N6/灰色	押印(平行条線文)	72ROt68

掲載番号	産地・種別	器種	部位	出土地点	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
142	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	27~29層	133.6	外:2.5Y6/2灰黄色 内:5Y6/1灰色	押印(平行条線文)	72ROt69
143	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	29-32層	174.6	外:2.5Y5/1黄灰色 内:5P6/1紫灰色	押印(平行条線文)	72ROt141
144	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	29-32層	105.9	外:5Y7/1灰白色 内:2.5Y6/1黄灰色	押印(縦長格子文?)、外面に降灰釉	72ROt140
145	渥美	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	29-32層	113.9	外:10Y5/2オリーブ灰色 内:5Y5/1灰色	押印(格子文)、内外面に降灰釉	72ROt142
146	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1・2層	21.4	外:7.5YR4/3褐色 内:5YR5/4にぶい赤褐色	内面摩耗	72ROt4
147	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	31.3	外:5YR4/2灰褐色 内:10YR7/3にぶい黄褐色		72ROt6
148	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	46.0	外:7.5YR7/1明褐色 内:7.5YR6/4にぶい橙色	胎土赤褐色	72ROt22
149	常滑	片口鉢	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	25.1	外:5P7/1明紫灰色 内:5Y7/1灰白色	外面ケズリ、内面に降灰釉	72ROt24
150	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	22.5	外:2.5Y5/1黄灰色 内:2.5Y5/1黄灰色	外面に降灰釉	72ROt25
151	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	28.8	外:2.5Y4/2暗黄灰色 内:10YR6/3にぶい黄褐色		72ROt26
152	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	94.8	外:10Y5/2オリーブ灰色 内:2.5Y5/1黄灰色	外面に降灰釉	72ROt29
153	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	74.5	外:10YR8/1灰白色 内:2.5Y7/1灰白色	押印(格子文?)	72ROt31
154	常滑	壺	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	95.0	外:7.5Y4/2灰オリーブ色 内:2.5Y4/1黄灰色	外面に降灰釉	72ROt32
155	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	39.7	外:7.5Y5/2灰オリーブ色 内:2.5Y6/3にぶい黄色	押印(不明)、外面に降灰釉	72ROt53
156	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	1層	15.9	外:2.5Y3/3暗オリーブ褐色 内:2.5Y4/2暗黄灰色	押印(不明)	72ROt56
157	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	50.6	外:2.5YR7/4淡赤褐色 内:5YR8/1灰白色	生焼け	72ROt37
158	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	33.8	外:10YR5/1褐灰色 内:2.5Y6/1黄灰色	内面に降灰釉	72ROt46
159	常滑	甕	口縁	72SD1 Cトレンチ 72SD1 Aトレンチ	27~29層 3層	254.1	外:10YR5/1褐灰色 内:2.5GY5/1オリーブ灰色	内外面に降灰釉	72ROt63
160	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	27~29層	55.8	外:10YR7/1灰白色 内:7.5YR7/2明褐色	焼成不良か	72ROt64
161	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	25.4	外:2.5Y6/1黄灰色 内:2.5Y6/2灰黄色		72ROt67
162	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	120.4	外:2.5Y6/3にぶい黄色 内:10YR6/3にぶい黄褐色	押印(不明)	72ROt91
163	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	35.3	外:5Y2/1黒色 内:N4/灰色	押印(格子文)	72ROt188
164	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	22層	23.7	外:7.5YR4/2灰褐色 内:5Y7/1灰白色	内面に降灰釉	72ROt94
165	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	62.2	外:2.5Y6/1黄灰色 内:10YR7/1灰白色	押印(平行条線文)、生焼け	72ROt198
166	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	22層	95.5	外:5PB3/1暗青灰色 内:10YR5/1褐灰色		72ROt97
167	常滑	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	29~31層	55.0	外:7.5YR5/3にぶい褐色 内:10YR6/4にぶい黄褐色	押印(格子文)、ROg15から変更	72ROt209
168	常滑	片口鉢	胴部	72SD1 Cトレンチ	2層	26.4	外:10YR6/1褐灰色 内:5Y8/1灰白色	内面に降灰釉	72ROt14
169	常滑	片口鉢	胴部	72SD1 Cトレンチ	1・27~29層	43.2	外:5YR4/3にぶい赤褐色 内:5YR7/1明褐色	外面に降灰釉	72ROt62
170	須恵器系	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	33.7	外:7.5Y5/1灰色 内:5PB7/1明青灰色		72ROt189
171	須恵器	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	6.7	外:10GY5/1緑灰色 内:5B5/1青灰色		72ROt197
172	須恵器系	甕	胴部	72SD1 Cトレンチ	3層	91.4	外:7.5YR6/1褐灰色 内:10YR6/1褐灰色		72ROt7
181	渥美	甕	胴部	72SD1 Bトレンチ	1層	13.7	外:10YR6/1褐灰色 内:10YR6/1褐灰色		72ROt3
182	渥美	甕	胴部	72SD1 Bトレンチ	1層	65.9	外:7.5YR3/4暗褐色 内:7.5YR7/1明褐色	押印(三巴文・縦長格子文)	72ROt5
183	渥美	壺	胴部	72SD1 Bトレンチ	1層	33.8	外:5Y6/3オリーブ黄色 内:5RP7/1明紫灰色	外面に降灰釉、木の根が付着	72ROt9
184	常滑	広口壺	口縁	72SD1 Bトレンチ	1層	20.4	外:10YR2/2黒褐色 内:10YR3/2黒褐色	内外面に降灰釉	72ROt10
185	常滑	甕	胴部	72SD1 Bトレンチ	1層	93.3	外:10YR4/1褐灰色 内:10YR5/1褐灰色	押印(平行条線文)、外面に降灰釉	72ROt11
186	常滑	甕	胴部	72SD1 Bトレンチ	1層	25.5	外:2.5YR3/2暗赤褐色 内:5YR4/4にぶい赤褐色		72ROt57
187	常滑	甕	胴部	72SD1(54-41)	黒色土上面	64.4	外:7.5YR5/3にぶい褐灰色 内:10YR8/2灰白色	押印(平行条線文)	72ROt73
207	渥美	山茶碗	底部	72SD2 Aトレンチ	底面直上	170.5	外:2.5Y8/1灰白色 内:2.5Y8/2灰白色	渥美4型式	72ROt151
208	常滑	甕	底部	72SD2 Aトレンチ	1層	54.8	外:7.5YR5/2灰褐色 内:5YR7/2明褐色	二次被熱	72ROt149
209	須恵器系	甕	胴部	72SD2 Aトレンチ	1層	94.8	外:5GY2/1オリーブ黒色 内:N6/灰色	外面剥落	72ROt196
217	渥美	壺	頸部	72SD2 Bトレンチ	壺No.1	189.8	外:2.5Y8/1灰白色 内:2.5Y8/1灰白色	内外面に降灰釉	72ROt150
233	常滑	甕	頸部	72SD2(53-40)	Bトレンチ1層	7.6	外:5Y4/2灰オリーブ色 内:10R4/2灰赤色	外面に降灰釉	72ROt153
234	須恵器	甕	胴部	72P6	3層	50.8	外:N4/灰色 内:10GY4/1暗緑灰色		72ROt203
236	渥美	甕	頸部	72P13	掘り方上面	26.5	外:2.5Y7/2灰黄色 内:10YR5/1褐灰色		72ROt160
237	渥美	壺	胴部	72P47	堆積土上位	7.3	外:5Y5/3灰オリーブ色 内:5Y7/1灰白色	外面に降灰釉	72ROt161
238	須恵器	甕	胴部	72P48	堆積土	228.2	外:N3/暗灰色 内:10GY4/1暗緑灰色		72ROt204
239	須恵器	甕	胴部	72P66	堆積土	25.2	外:N4/灰色 内:5BG4/1暗青灰色		72ROt205
240	須恵器	甕	胴部	72P218	堆積土上位	12.6	外:N4/灰色 内:10GY4/1暗緑灰色		72ROt206
241	渥美	甕	胴部	72SK3	堆積土上位	29.5	外:5Y5/1灰色 内:2.5Y7/1灰白色	押印(格子文)	72ROt157
242	渥美	壺	胴部	72SK3	堆積土下位	15.4	外:7.5Y5/2灰オリーブ色 内:5RP7/1明紫灰色	外面に降灰釉	72ROt159
243	常滑	甕	胴部	72SK3	堆積土	20.3	外:5Y4/3暗オリーブ色 内:2.5Y5/1黄灰色	外面に降灰釉	72ROt156
244	常滑	壺	胴部	72SK3	堆積土上位	10.9	外:10YR7/2にぶい黄褐色 内:2.5Y7/1灰白色		72ROt158
246	渥美	甕	胴部	72SD3	検出面	121.0	外:5Y4/2灰オリーブ色 内:5Y6/1灰色	押印(縦長格子文)、外面に降灰釉	72ROt154
247	常滑	甕	胴部	72SD3	堆積土	35.1	外:2.5Y5/1黄灰色 内:2.5Y6/2灰黄色	押印(縦長格子文)	72ROt155
248	須恵器	甕	胴部	72SD3	堆積土	44.1	外:N3/暗灰色 内:5B4/1暗青灰色		72ROt202
249	常滑	甕	胴部	53-40	表土	20.9	外:5YR4/2灰褐色 内:7.5YR4/3褐色		72ROt162
250	渥美	甕	胴部	53-42	表土	12.2	外:2.5Y7/1灰白色 内:5Y7/1灰白色		72ROt163
252	常滑	片口鉢	底部	58-40	表土	106.0	外:5Y7/1灰白色 内:5Y8/1灰白色	外面ケズリ、高台部欠損	72ROt167
254	渥美	甕	胴部	北区下段	表土	73.7	外:2.5Y5/1黄灰色 内:10YR7/2にぶい黄褐色		72ROt165

掲載番号	産地・種別	器種	部位	出土地点	層位	重量(g)	色調	備考	登録番号
255	常滑	甕	胴部	北区下段	表土	14.0	外：5YR5/3にぶい赤褐色 内：10YR5/2灰黄褐色		72RO166
257	渥美	甕	胴部	北区上段	表土	8.1	外：7.5YR5/3にぶい褐色 内：2.5Y6/2灰黄色		72RO171
258	渥美	甕	胴部	北区上段	表土	36.6	外：5Y4/3暗オリーブ色 内：5PB7/2明青灰色	外面に降灰釉	72RO173
259	渥美	甕	胴部	北区下段 第70次試掘トレンチ	埋め戻し土	84.7	外：5Y6/1灰色 内：5Y8/2灰白色	内面に降灰釉	72RO164
260	渥美	甕	胴部	北区上段	表土	60.0	外：2.5Y8/1灰白色 内：2.5Y7/1灰白色		72RO168
261	渥美	甕	口縁	北区上段	表土	15.8	外：N4/灰色 内：5Y7/2灰白色		72RO176
262	渥美	甕	胴部	北区上段	表土	181.3	外：10YR5/1褐灰色 内：5Y6/1灰色		72RO175
263	渥美	甕	口縁	北区上段	表土	38.0	外：5YR5/2灰褐色 内：5YR4/1褐灰色	二次被熱	72RO180
264	渥美	甕	胴部	北区上段	表土	231.1	外：10YR6/2灰黄褐色 内：2.5Y6/3にぶい黄色		72RO185
265	渥美	甕	胴部	北区上段	表土	38.6	外：2.5Y6/2灰黄色 内：2.5Y6/1黄灰色	外面に降灰釉	72RO183
266	渥美	甕	胴部	北区上段	表土	26.2	外：2.5Y6/1黄灰色 内：2.5Y5/1黄灰色		72RO186
267	常滑	甕	口縁	北区上段	表土	12.0	外：5Y5/3灰オリーブ色 内：5Y4/3暗オリーブ色	内外面に降灰釉	72RO170
268	常滑	甕	胴部	北区上段	表土	24.3	外：5Y4/1灰色 内：2.5Y6/2灰黄色		72RO172
269	常滑	甕	胴部	北区上段	表土	41.3	外：N3/1オリーブ黒色 内：5Y5/2灰オリーブ色	押印(平行条線文?)	72RO177
270	常滑	甕	胴部	北区上段	表土	46.9	外：7.5Y2/2オリーブ黒色 内：5Y4/1灰色	外面に降灰釉	72RO178
271	常滑	甕	胴部	北区上段	表土	125.5	外：5YR6/2灰褐色 内：10YR7/2にぶい黄褐色	押印(縦長格子文)	72RO174
272	常滑	甕	胴部	北区上段	表土	63.0	外：10YR4/2灰黄褐色 内：2.5Y6/2灰黄色	押印(縦長格子文)	72RO184
273	常滑	片口鉢	胴部	北区上段	表土	10.8	外：2.5Y7/1灰白色 内：2.5Y7/1灰白色	内外面に降灰釉	72RO179
274	常滑	片口鉢	口縁	北区上段	表土	14.1	外：2.5Y7/1灰白色 内：10YR7/2にぶい黄褐色	内面に降灰釉	72RO181
275	常滑	片口鉢	底部	北区上段	表土	87.5	外：10YR7/1灰白色 内：2.5Y6/1黄灰色	内面に降灰釉、高台部欠損	72RO182
276	須恵器系	甕	胴部	北区上段	表土	25.5	外：7.5Y4/1灰色 内：5Y7/1灰白色		72RO169
277	須恵器	甕	胴部	北区上段	表土	20.1	外：7.5GY4/1暗緑灰色 内：10GY4/1暗緑灰色		72RO207
278	須恵器	甕	胴部	北区上段	表土	7.5	外：N3/暗灰色 内：10GY4/1暗緑灰色		72RO208
284	須恵器系	壺	胴部	南区	表土	44.9	外：5Y6/1灰色 内：N7/灰白色	外面ケズリ	72RO187
	常滑	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	3.5	外：5YR4/1にぶい赤褐色 内：2.5Y8/2灰白色	写真のみ	72RO119
	渥美	甕	頸部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	5.5	外：7.5Y8/1灰白色 内：7.5YR4/3にぶい褐色	内面に降灰釉、写真のみ	72RO125
	渥美	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	18層	5.7	外：10YR4/1褐灰色 内：2.5Y7/1灰白色	外面に降灰釉、内面剥落、写真のみ	72RO137
	常滑	壺	頸部	72SD2	検出面	3.3	外：5Y5/3灰オリーブ色 内：5Y5/2灰オリーブ色	内外面に降灰釉、表掲載	72RO152

表18 出土遺物観察表(輸入陶磁器)

掲載番号	種別	器種	部位	出土地点	層位	重量(g)	色調	胎土	備考	登録番号
86	白磁	壺	胴部	72SD1 Aトレンチ	1層	5.9	灰白色		Ⅲ類	72ROg6
87	白磁	皿	口縁	72SD1 Aトレンチ	1層	2.4	灰白色			72ROg7
88	白磁	椀	胴部	72SD1 Aトレンチ	1・3層	4.1	灰白色		下半部露胎	72ROg8
89	青白磁	壺?	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	2.4	灰白色		二次被熱	72ROg9
90	白磁	甕	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	2.6	外：2.5YR6/3にぶい黄色 内：2.5Y7/2灰黄色		Ⅱ類、釉剥落	72ROg13
91	中国陶器	壺	胴部	72SD1 Aトレンチ	11・13・19層	14.3	外：2.5Y6/4にぶい黄色 内：5Y7/2灰白色			72ROg14
173	中国陶器	不明	胴部	72SD1 Cトレンチ	1層	3.1	外：N2/黒色 内：N1.5/黒色		内外面褐釉	72ROg1
174	中国陶器	壺	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	7.1	外：5YR4/3にぶい赤褐色 内：7.5YR6/1褐灰色			72ROg10
175	中国陶器	壺	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	7.5	外：5YR4/3にぶい赤褐色 内：10YR6/2灰黄褐色			72ROg11
176	中国陶器	壺	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	6.2	外：2.5Y7/3浅黄色 内：2.5Y7/2灰黄色			72ROg27
177	青白磁	椀	底部	72SD1 Cトレンチ	14層	6.4	明緑灰色		割花文	72ROg2
178	青白磁	壺?	胴部	72SD1 Cトレンチ	14層	1.2	明緑灰色		二次被熱	72ROg4
179	青白磁	水注?	肩部	72SD1 Cトレンチ	14層	4.0	明緑灰色		耳部欠損	72ROg5
180	青白磁	小壺?	口縁	72SD1 Cトレンチ	14層	8.0	明緑灰色		二次被熱	72ROg3
188	中国陶器	甕	胴部	72SD1 (54-41)	黒褐色土	48.2	外：5YR4/3にぶい赤褐色 内：10YR6/4にぶい黄褐色			72ROg12
210	白磁	椀	口縁	72SD2 Aトレンチ	15層	4.1	明緑灰色			72ROg17
232	白磁	壺	胴部	72SD2 (54-39)	1層	10.1	灰白色		Ⅲ類	72ROg16
235	白磁	皿	口縁	72P9	2層	1.7	灰白色			72ROg18
251	白磁	壺	胴部	54-41	表土	6.0	灰白色		Ⅲ類	72ROg24
279	白磁	皿	口縁	北区上段	表土	0.6	灰白色			72ROg19
280	白磁	壺	胴部	北区上段	表土	3.6	灰白色		Ⅱ類	72ROg20
281	白磁	壺	肩部	北区上段	表土	20.6	明緑灰色		Ⅲ類	72ROg21
282	白磁	壺	胴部	北区上段	表土	1.8	灰白色		Ⅲ類	72ROg23
283	白磁	壺	胴部	北区上段	表土	6.4	灰白色		Ⅱ類、釉剥落	72ROg26
285	白磁	壺	胴部	南区	表土	8.4	灰白色		Ⅲ類	72ROg25

表19 出土遺物観察表 (瓦)

掲載番号	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色 調	その他	登録番号
286	瓦	72SD1 Cトレンチ	2層	(8.0)	(6.3)	2.0	104.4	2.5Y7/1灰白色・2.5Y8/1灰白色		72RT1
287	瓦	72SD1 Cトレンチ	14層	(4.3)	(8.6)	2.1	79.8	10YR4/1褐灰色		72RT2
288	瓦	72SD1 Cトレンチ	14層	(9.9)	(5.6)	2.4	112.1	2.5Y5/1黄灰色・2.5Y5/2暗黄灰色		72RT3
289	瓦	72SD1 Aトレンチ	3層	(8.2)	(7.2)	2.0	134.7	N7/灰白色・N4/灰色		72RT4
290	瓦	72SD1 Aトレンチ	6層	(3.2)	(3.3)	0.9	8.7	N5/灰色・2.5GY6/1オリーブ灰色		72RT5
	瓦?	北区上段	表土	(5.8)	(6.5)	1.2	37.9	10YR5/1褐灰色・10YR4/1褐灰色	近世の瓦器か、写真のみ	72RT6
	瓦	57-42	表土				15.4	7.5Y8/1灰白色		72RT7
	瓦	北区上段	表土				5.6	7.5Y8/1灰白色	3片接合	72RT8

表20 出土遺物観察表 (金属製品ほか)

掲載番号	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考	登録番号
291	鉄釘	72SD1 Cトレンチ	14層	(4.3)	0.7	0.7	9.4		72RM3
292	鉄釘	72SD2 Aトレンチ	15層	(5.8)	0.6	0.4	4.1		72RM11
	板状鉄製品	72SK2	堆積土	(2.7)	(3.4)	0.5	5.5	写真のみ	72RM13
	椀形滓	72SD1 Cトレンチ	14層	-	-	-	334.2	写真のみ	72RM2
	鉄鏃	72P47	堆積土上位	(3.8)	0.6	0.6	9.6	表掲載	72RM17
	羽口	72SD1 Bトレンチ	1層	(4.5)	(4.4)	1.6	27.4	写真のみ、RP2と同一個体だが接合せず	72RP3
	羽口	72SX1	堆積土	(4.3)	(4.4)	1.6	30.6	写真のみ	72RP4

表21 出土遺物観察表 (木製品)

掲載番号	種別	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考	登録番号
293	木製品	杭	72SD1 Aトレンチ	1・3層	21.8	2.5	2.4	両端部欠損	72RW7
294	木製品	折敷	72SD1 Aトレンチ	19層	12.0	2.0	0.3		72RW5
295	木製品	棒状	72SD1 Aトレンチ	25層	9.8	1.6	1.0	側面炭化	72RW6
296	木製品	杭	72SD1 Aトレンチ	3層	4.6	2.4	0.7	先端部の欠損品	72RW3
297	木製品	不明	72SD1 Aトレンチ	20層	3.6	2.0	0.5	ほぼ全面炭化	72RW4
298	漆製品	椀	72SD2 Aトレンチ	16層	器高6.0	底径6.0		内外面黒漆	72RW8
299	漆製品	蓋?	72SD2 Aトレンチ	10層	3.1	1.9	1.1	小破片	72RW29
300	漆製品	椀	72SD2 Aトレンチ	16層	6.7	6.4	0.9	接合しないが同一個体に漆膜残存	72RW14
301	木製品	杭	72SD1 Cトレンチ	32層	39.9	2.4	2.2	両端部欠損	72RW1
302	木製品	部材	72SD1 Cトレンチ	32層	36.0	5.3	2.8	側面一部炭化	72RW2
303	木製品	部材	72SD2 Aトレンチ	16層	35.4	3.1	2.2	角材の欠損品	72RW9
304	木製品	部材	72SD2 Aトレンチ	8層	21.1	2.5	0.7	加工痕有	72RW20
305	木製品	部材	72SD2 Aトレンチ	8層	12.8	3.4	1.1		72RW19
306	木製品	折敷	72SD2 Aトレンチ	9~12層	15.7	2.7	0.4		72RW27
307	木製品	部材	72SD2 Aトレンチ	16層	13.0	3.4	0.6	板材か、腐朽著しい	72RW10
308	木製品	杭	72SD2 Aトレンチ	8層	8.9	3.5	2.9	先端部か、炭化	72RW16
309	木製品	板状	72SD2 Aトレンチ	16層	6.4	4.3	0.8	断面不整形	72RW21
310	木製品	棒状	72SD2 Aトレンチ	6層	7.1	1.0	1.2	棒状	72RW28
311	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	9~12層	7.4	1.2	0.5		72RW38
312	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	不明	20.9	1.5	0.3	A類	72RW46
313	木製品	折敷	72SD2 Aトレンチ	堆積土中位	23.3	1.8	0.3		72RW25
314	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	10層	23.0	1.8	0.3		72RW34
315	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	8層	15.8	2.0	0.2	C類	72RW18
316	木製品	折敷	72SD2 Aトレンチ	10層	18.0	2.7	0.2		72RW33
317	木製品	籌木?	72SD2 Aトレンチ	16層	12.5	1.3	0.4		72RW23
318	木製品	籌木?	72SD2 Aトレンチ	16層	11.2	1.3	0.4		72RW22
319	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	16層	9.8	1.8	0.4		72RW37
320	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	1層	6.6	1.6	0.5		72RW35
321	木製品	折敷	72SD2 Aトレンチ	9~12層	8.0	2.5	0.3		72RW39
322	木製品	折敷	72SD2 Aトレンチ	16層	6.2	1.6	0.5		72RW40
323	木製品	折敷	72SD2 Aトレンチ	15層	5.4	2.7	0.1		72RW17
324	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	10層	6.0	2.2	0.1		72RW31
325	木製品	籌木	72SD2 Aトレンチ	10層	5.0	3.7	0.1		72RW30
326	木製品	不明	72SD2 Aトレンチ	10層	4.1	4.5	1.7		72RW32
327	木製品	下駄(歯)	72SD2 Aトレンチ	16層	8.9	7.9	1.6		72RW15
328	木製品	円盤状	72SD2 Aトレンチ	15層	6.4	3.4	0.8	紡輪か	72RW12
329	木製品	部材	72SD2 Aトレンチ	16層	19.6	1.5	1.2	棒状、先端炭化	72RW24
330	木製品	棒状	72SD2 Aトレンチ	15層	8.8	1.1	1.0	棒状、先端炭化	72RW26
331	木製品	棒状	72SD2 Aトレンチ	1層	9.4	0.9	0.4	先端炭化	72RW36
332	木製品	不明	72SD2 Aトレンチ	16層	7.4	1.6	0.8	側面炭化	72RW13
333	木製品	不明	72SD2 Aトレンチ	16層	2.5	1.7	0.5	全面炭化	72RW11
334	木製品	折敷	72SD2 Bトレンチ	4層	38.3	20.6	1.0	棧付属、加工痕有	72RW50
335	漆製品	椀	72SD2 Bトレンチ	2層上位	器高2.3	底径7.8		腐朽著しい	72RW52
336	木製品	部材	72SD2 Cトレンチ	7層	5.3	6.8	5.8	角材	72RW57
337	木製品	籌木	72SD2 Cトレンチ	7層	21.5	1.4	0.3	A類	72RW56
338	木製品	部材	72SD2 Cトレンチ	7層	29.6	3.5	0.6		72RW58

表22 北区柱穴一覧表

柱穴No.	グリッド	精査	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱痕規模 (cm)	遺物	備考
1	58-42	×	141×98	—	—	98×58	かわらけ	72SB1
2	58-41	×	106×92	—	—	34×32	かわらけ	72SB1
3	58-41	×	100×98	—	—	68×40	かわらけ	72SB1
4	58-40	○	98×85	27.9	28.617	31×28	かわらけ	72SB1
5	59-40	×	(96)×(55)	—	—	38×30	かわらけ	72SB1
6	58-42	○	109×104	38.0	28.540	30×(13)	かわらけ、須恵器 (234)、壁土	72SB1
7	59-41	×	89×78	—	—	36×34	かわらけ	72SB1
8	59-41	×	101×82	—	—	67×42		72SB1
9	59-40	○	100×95	44.1	28.402	26×29	かわらけ、白磁 (235)	72SB1
10	59-40	×	103×93	—	—	36×28	かわらけ	72SB1
11	59-42	×	103×96	—	—	35×33	かわらけ	72SB1
12	59-42	×	87×85	—	—	63×48	かわらけ	72SB1
13	59-42	×	93×76	—	—	25×33	かわらけ、陶器 (236)	72SB1、P78に切られる
14	60-42	×	92×85	—	—	35×33		72SB1、P76を切る
15	60-41	×	85×77	—	—	33×27		72SB1
16	60-41	×	82×(77)	—	—	29×23	鉄滓?	72SB1、P63に切られる
17	60-40	×	(70)×(55)	—	—	—		72SB1
18	59-41	○	58×38	27.9	28.604	84×67	かわらけ	72SA2、SK6に切られる
19	58-41	×	97×70	—	—	70×61		72SA1
20	58-42	○	103×79	39.0	28.560	—		72SA1
21	58-42	○	115×73	35.3	28.577	—	かわらけ	72SA1
22	58-43	○	59×55	34.0	28.555	—		72SA1、P23を切る
23	58-43	○	42×33	10.3	28.782	—		P22に切られる
24	58-43	×	100×97	—	—	—	かわらけ	72SA1
25	58-44	×	57×57	—	—	—		72SA1、P26を切る?
26	58-44	×	96×59	—	—	—		P25に切られる?
27	59-41	○	63×54	53.2	28.351	—	かわらけ	72SA2
28	59-42	○	51×47	64.0	28.220	—	かわらけ	72SA2、P47に切られる
29	59-42	×	65×58	—	—	—	かわらけ	72SA2
30	59-43	×	58×47	—	—	—		72SA2、SX1に切られる
31	58-43	×	75×47	—	—	—	かわらけ	72SA2、2個連結?
32	58-44	×	44×40	—	—	—	かわらけ	72SA2
33	58-40	×	36×35	—	—	—		
34	59-41	×	39×33	—	—	—		72SA1
35	59-41	×	38×34	—	—	—		72SA1
36	58-41	×	38×30	—	—	—		
37	58-41	×	40×34	—	—	—		
38	58-42	×	71×51	—	—	47×47		
39	59-41	×	24×21	—	—	—		
40	59-41	×	70×61	—	—	—		
41	59-40	×	38×28	—	—	—		
42	59-40	×	50×24	—	—	—		
43	59-41	×	30×28	—	—	—		
44	59-41	×	38×31	—	—	—		
45	59-42	×	68×66	—	—	—	かわらけ	
46	59-42	×	28×25	—	—	—		
47	59-42	○	134×102	161.0	27.320	—	かわらけ、陶器 (237)、鉄製品(RM17)、木製品	P28を切る
48	59-42	×	96×68	—	—	65×63	かわらけ、須恵器 (238)	
49	59-42	×	60×55	—	—	—		
50	60-41	×	44×41	—	—	—		
51	60-41	×	62×61	—	—	30×23	かわらけ	P52を切る
52	60-41	×	42×37	—	—	16×13	かわらけ	P51に切られる
53	60-41	×	34×31	—	—	—		
54	60-41	×	27×24	—	—	—		
55	60-41	×	28×25	—	—	—		
56	60-41	×	38×32	—	—	21×21		
57	60-41	×	38×33	—	—	21×19		
58	59-41	×	30×26	—	—	—		
59	59-41	×	40×27	—	—	—		
60	59-41	×	23×21	—	—	—		
61	59-41	×	51×41	—	—	—		
62	60-41	×	53×37	—	—	—	かわらけ	

柱穴No.	グリッド	精査	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱痕規模 (cm)	遺 物	備 考
63	60-41	×	35×29	—	—	—		P16を切る
64	60-41	×	40×35	—	—	32×28		P65を切る
65	60-41	×	44×32	—	—	—		P64に切られる
66	60-41	×	30×23	—	—	—	かわらけ、須恵器 (239)	
67	59-41	×	47×33	—	—	—	かわらけ	
68	59-41	×	40×33	—	—	—		
69	59-41	×	32×27	—	—	—		
70	59-41	×	30×23	—	—	—		
71	59-41	×	36×36	—	—	—		
72	59-41	×	28×22	—	—	—		
73	59-42	×	57×45	—	—	36×24	かわらけ	
74	59-42	×	55×48	—	—	—		
75	59-42	×	67×62	—	—	48×46		
76	59-42	×	50×42	—	—	—		P14に切られる
77	59-42	×	84×75	—	—	—	かわらけ	
78	59-42	×	48×43	—	—	—		P13を切る
79	59-42	×	33×25	—	—	—		
80	59-42	×	30×26	—	—	—		
81	60-41	×	42×37	—	—	—		
82	60-41	×	35×30	—	—	—		
83	60-41	×	37×37	—	—	—	かわらけ	
84	60-41	×	40×32	—	—	—	かわらけ	
85	61-41	×	37×34	—	—	—	かわらけ	
86	60-41	×	61×47	—	—	—	かわらけ、鉄製品	
87	61-41	×	41×36	—	—	—		
88	60-41	×	40×32	—	—	—		
89	60-41	×	40×38	—	—	23×23		
90	60-42	×	55×45	—	—	—	かわらけ	
91	60-42	×	33×30	—	—	—		
92	60-42	×	44×33	—	—	—		
93	60-42	×	44×38	—	—	—	かわらけ	
94	60-42	×	31×25	—	—	—		
95	60-42	×	25×20	—	—	—		
96	60-42	×	55×40	—	—	—		
97	60-42	×	42×40	—	—	—	かわらけ	
98	59-42	×	38×34	—	—	—		
99	59-42	×	40×36	—	—	—		
100	59-42	×	64×36	—	—	—		
101	59-42	×	26×21	—	—	—		
102	59-43	×	28×25	—	—	—		
103	58-42	×	28×25	—	—	—		
104	58-42	×	58×48	—	—	—	かわらけ	
105	57-42	×	30×27	—	—	—		
106	57-42	×	37×35	—	—	—		
107	59-44	×	45×34	—	—	—	かわらけ	P108を切る
108	59-44	×	47×41	—	—	—	かわらけ	P107に切られる
109	59-43	×	32×23	—	—	—		P110を切る
110	59-43	×	56×42	—	—	—		P109に切られる
111	59-43	×	50×43	—	—	—		
112	59-43	×	29×26	—	—	—		
113	58-43	×	27×21	—	—	—		
114	58-43	×	25×18	—	—	—		
115	59-44	×	43×41	—	—	—		
116	58-43	×	124×91	—	—	—	かわらけ	72SD3に切られる
117	58-44	×	80×61	—	—	—		
118	58-44	○	87×78	16.4	28.676	69×66	かわらけ、鉄製品、炭	
119	58-44	×	36×34	—	—	—		
120	58-44	×	27×24	—	—	—	かわらけ	
121	59-44	×	28×25	—	—	—	かわらけ	
122	59-44	×	42×38	—	—	—		
123	59-44	×	30×29	—	—	—		
124	59-44	×	25×22	—	—	—	かわらけ	

柱穴No.	グリッド	精査	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱痕規模 (cm)	遺物	備考
125	59-44	×	26×23	—	—	—	かわらけ、壁土	
126	59-44	×	68×47	—	—	—		
127	59-44	×	31×26	—	—	—		
128	58-44	×	33×25	—	—	—		
129	58-44	×	44×42	—	—	—		
130	58-44	×	51×46	—	—	—		
131	58-44	×	34×28	—	—	—		
132	58-44	×	33×30	—	—	—		
133	58-44	×	47×45	—	—	—		
134	58-44	×	31×30	—	—	—		
135	58-44	×	35×28	—	—	—	かわらけ	
136	58-44	×	29×26	—	—	—	かわらけ	
137	58-44	×	26×21	—	—	—		
138	59-44	×	36×35	—	—	—		
139	59-44	×	54×49	—	—	24×18		
140	59-44	×	32×29	—	—	—		
141	61-41	×	39×37	—	—	14×11		
142	61-41	×	41×38	—	—	—	かわらけ	
143	61-41	×	35×29	—	—	—		
144	61-42	×	21×17	—	—	—	かわらけ	
145	61-42	×	48×38	—	—	—		
146	61-42	×	36×34	—	—	—	かわらけ、炭	
147	61-42	×	27×21	—	—	—		
148	61-42	×	65×41	—	—	—		
149	61-42	×	26×20	—	—	—	かわらけ	
150	61-42	×	23×21	—	—	—	かわらけ、炭	
151	61-42	×	33×30	—	—	—	かわらけ	
152	61-42	×	32×30	—	—	—		
153	61-43	×	37×29	—	—	—		
154	61-42	×	27×22	—	—	—		
155	61-42	×	67×35	—	—	—	かわらけ	
156	61-42	×	36×31	—	—	—		
157	61-42	×	38×36	—	—	38×36	かわらけ	
158	62-43	×	33×30	—	—	—		
159	62-42	×	26×20	—	—	—		
160	62-43	×	26×21	—	—	—		
161	62-42	×	24×20	—	—	—		
162	62-42	×	25×21	—	—	—		
163	62-42	×	21×20	—	—	—		
164	61-43	×	42×31	—	—	—		
165	61-43	×	23×20	—	—	—	かわらけ	
166	61-43	×	23×23	—	—	—		
167	61-43	×	32×32	—	—	—		
168	61-43	×	25×23	—	—	—		
169	60-43	×	34×29	—	—	—		
170	60-43	×	45×43	—	—	—	かわらけ	
171	60-43	×	30×23	—	—	—		
172	61-43	×	35×32	—	—	—		
173	61-44	×	37×34	—	—	—	かわらけ	
174	61-44	×	46×30	—	—	—	かわらけ、炭	
175	61-44	×	39×31	—	—	—		
176	61-44	×	37×33	—	—	—	かわらけ	
177	61-44	×	26×22	—	—	—		
178	60-44	×	39×39	—	—	—	かわらけ	
179	61-44	×	28×21	—	—	—		
180	60-44	×	27×27	—	—	—		
181	60-44	×	49×45	—	—	—		
182	60-44	×	38×35	—	—	—		
183	60-44	×	44×40	—	—	—	鉄製品	
184	60-44	×	31×29	—	—	—		
185	60-44	×	31×29	—	—	—	かわらけ	
186	60-44	×	40×29	—	—	—		

柱穴No.	グリッド	精査	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱痕規模 (cm)	遺物	備考
187	60-44	×	37×32	—	—	—		
188	60-44	×	21×18	—	—	—		
189	60-44	×	35×34	—	—	—	かわらけ	
190	59-44	×	38×33	—	—	25×24		P191と重なる
191	59-44	×	16×14	—	—	—		P190と重なる
192	59-44	×	52×50	—	—	31×30		
193	60-44	×	27×25	—	—	—		
194	59-44	×	42×30	—	—	—		
195	59-44	×	27×23	—	—	—		
196	60-44	×	36×21	—	—	—		
197	60-45	×	29×24	—	—	—		
198	59-45	×	36×31	—	—	—	かわらけ	
199	59-44	×	26×25	—	—	—		
200	59-44	×	24×22	—	—	—		
201	59-45	×	36×31	—	—	23×18		
202	59-45	×	33×30	—	—	—		
203	59-45	×	86×65	—	—	—		
204	58-44	×	37×36	—	—	—		
205	58-45	×	48×37	—	—	—		
206	58-44	×	33×31	—	—	—		
207	58-44	×	28×27	—	—	—		
208	58-44	×	36×32	—	—	—		
209	60-45	×	21×20	—	—	—		
210	57-43	×	42×32	—	—	—		
211	57-43	×	42×38	—	—	—		
212	欠番	—	—	—	—	—	—	—
213	欠番	—	—	—	—	—	—	—
214	59-41	×	28×21	—	—	—		
215	59-40	×	22×18	—	—	—		
216	59-40	×	24×23	—	—	—		
217	60-40	×	24×17	—	—	—		
218	60-40	×	35×28	—	—	—	須恵器 (240)	
219	60-41	×	25×23	—	—	—		
220	60-41	×	24×22	—	—	—		
221	62-42	×	20×17	—	—	—		
222	62-43	×	27×24	—	—	—		
223	62-43	×	26×25	—	—	—		
224	62-43	×	21×20	—	—	—		
225	62-43	×	19×18	—	—	—		
226	60-40	—	—	—	—	—		59次調査で精査済だが、遺構として認定していなかったもの。
227	61-44	×	30×26	—	—	—		
228	60-43	×	16×15	—	—	—		
229	59-41	×	22×21	—	—	—		
59P198	60-40	×	47×38	—	—	—		

表23 北区土坑一覧表

土坑No.	グリッド	精査	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	遺物	備考
72SK1	57-42	×	181×123	—	—		
72SK2	61-43	×	93×87	—	—	かわらけ、鉄製品 (RM13)	
72SK3	57-44	○	94×96	87.8	27.916	かわらけ、陶器 (241-244)、炭	
72SK4	62-42	×	260×205	—	—		72SD5に切られる
72SK5	58-44	×	99×62	—	—		
72SK6	59-41	○	109×78	14.7	28.725		P18を切る

表24 72SD1出土かわらけ数量表

72SD1 Aトレンチ			ロクロ									手づくね									不明
			大			小			不明			大			小			不明			
			口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
上層 (6層)	破片数	429	1	4	0	1	3	1	7	28	1	2	1	0	20	2	0	14	32	0	312
	重量	1,803.3		107.6	3.0		26.6	13.2		247.5	3.2										
	重量比1		381.7	21.2																	
	重量比2		401.1	22.2				46	71												
かわらけ種別比			154																		
6 ~ 11層	破片数	38	0	4	3	1	4	0	0	0	0	2	2	1	9	0	0	0	2	0	10
	重量	516.5		122.8	134.9		49.2	0.0		0.0	0.0										
	重量比1		172.0	33.3																	
	重量比2		306.9	59.4																	
かわらけ種別比			133																		
11 ~ 19層	破片数	797	1	9	1	5	8	5	9	32	0	3	4	0	29	5	4	40	29	1	612
	重量	3,099.0		270.7	19.7		162.0	29.8		304.2	0.0										
	重量比1		643.0	20.7																	
	重量比2		692.5	22.3																	
かわらけ種別比			154																		
下層 19 ~ 20層	破片数	127	1	1	0	2	3	0	3	7	0	4	4	4	9	2	0	7	21	0	59
	重量	965.8	0.0	23.5	0.0		36.3	0.0		74.3	0.0										
	重量比1		134.1	13.9																	
	重量比2		134.1	13.9																	
かわらけ種別比			300																		
20 ~ 25層	破片数	127	1	7	0	1	2	2	0	10	0	1	4	0	7	1	1	5	11	1	79
	重量	1,126.5		236.9	0.0		35.3	52.0		110.5	0.0										
	重量比1		372.7	33.1																	
	重量比2		424.7	37.7																	
かわらけ種別比			135																		

72SD1 Cトレンチ			ロクロ									手づくね									不明
			大			小			不明			大			小			不明			
			口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
上層 (6層)	破片数	12	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	7
	重量	67.1		0.0	0.0		25.4	0.0		0.0	0.0										
	重量比1		25.4	37.9																	
	重量比2		25.4	37.9																	
かわらけ種別比			150																		
14層	破片数	83	0	0	0	1	2	2	0	2	0	0	0	0	6	0	0	0	3	0	67
	重量	354.9		0.0	0.0		28.6	29.9		12.3	0.0										
	重量比1		40.9	11.5																	
	重量比2		70.8	19.9																	
かわらけ種別比			129																		
22層	破片数	312.1	0	0	0	0	0	1	2	5	0	0	0	0	10	0	0	1	4	0	86
	重量	312.1		0.0	0.0		0.0	10.8		57.9	0.0										
	重量比1		57.9	18.6																	
	重量比2		68.7	22.0																	
かわらけ種別比			188.0																		
下層 27 ~ 29層	破片数	60	0	0	1	0	0	0	2	4	0	0	2	1	9	0	1	4	7	0	29
	重量	455.8		0.0	42.2		0.0	0.0		26.7	0										
	重量比1		26.7	5.9																	
	重量比2		68.9	15.1																	
かわらけ種別比			343																		
29 ~ 32層	破片数	125	0	0	0	5	7	0	4	12	0	2	0	1	19	1	0	16	21	0	37
	重量	835.3		0.0	0.0		34.9	0.0		92.4	0.0										
	重量比1		127.3	15.2																	
	重量比2		127.3	15.2																	
かわらけ種別比			214																		

表25 72SD2出土かわらけ数量表

72SD2 A トレンチ			ロクロ									手づくね									不明
			大			小			不明			大			小			不明			
			口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
2層	破片数	155	0	0	0	0	0	2	1	2	0	2	1	0	4	0	0	13	11	0	119
	重量	502.8		0.0	0.0		0.0	36.9		10.3	0.0										
	重量比1	10.3	2.0																		
	重量比2	47.2	9.4																		
かわらけ種別比	620																				
6~8層	破片数	482	9	14	0	17	10	6	18	51	0	12	18	1	50	6	2	24	30	0	214
	重量	3,503.9		395.9	0		83.4	59.4		365.2	0										
	重量比1	844.5	24.1																		
	重量比2	903.9	25.8																		
かわらけ種別比	114																				
8~9層	破片数	25	0	0	0	0	1	0	0	2	9	0	0	1	4	3	0	0	0	0	5
	重量	150.0		0.0	0.0		18.5	0.0		27.0	9.0										
	重量比1	45.5	30.3																		
	重量比2	54.5	36.3																		
かわらけ種別比	67																				
9~13層	破片数	603	9	19	2	8	7	6	27	62	0	11	3	2	72	15	1	35	62	0	262
	重量	3,738.1		674.4	189.2		76.5	86.6		408.8	0.0										
	重量比1	1159.6	31.0																		
	重量比2	1435.5	38.4																		
かわらけ種別比	144																				
15~16層	破片数	424	5	9	1	12	5	8	33	56	0	12	6	2	49	3	0	16	48	0	159
	重量	2,807.1		252.3	20.9	0	89.2	144.9	0	410.5	0										
	重量比1	752	26.8																		
	重量比2	917.8	32.7																		
かわらけ種別比	105																				

72SD2 B トレンチ			ロクロ									手づくね									不明
			大			小			不明			大			小			不明			
			口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
1層	破片数	337	1	10	5	3	1	4	9	16	0	4	3	0	29	3	0	3	4	0	242
	重量	2,301.7		359.2	415.3		5.1	50.1		142.7	0										
	重量比1	507.0	22.0																		
	重量比2	972.4	42.2																		
かわらけ種別比	94																				
2層	破片数	1	0	0	1	1	2	6	7	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	13
	重量	403.0		0.0	0.0		27.1	106.0		122.7	0.0										
	重量比1	149.8	37.2																		
	重量比2	255.8	63.5																		
かわらけ種別比	17																				
3層	破片数	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	重量	45.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	重量比1	0.0	0																		
	重量比2	0.0	0																		
かわらけ種別比																					
4層	破片数	10	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	重量	50.0		0.0	0.0		33.6	0.0		0.0	0.0										
	重量比1	33.6	67.2																		
	重量比2	33.6	67.2																		
かわらけ種別比																					
6~7層	破片数	5	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	重量	120.8		0.0	33.5		0.0	28.1		0.0	0.0										
	重量比1	0.0	0																		
	重量比2	61.6	51.0																		
かわらけ種別比																					

72SD2 C トレンチ			ロクロ									手づくね									不明
			大			小			不明			大			小			不明			
			口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	口縁	底	口~底	
1層	破片数	65	2	1	1	2	0	0	0	3	0	0	0	0	7	3	1	0	1	0	44
	重量	571.9		47.7	123.6		0	0		8.9	0										
	重量比1	56.6	9.9																		
	重量比2	180.2	31.5																		
かわらけ種別比	133																				
3層	破片数	18	1	0	2	0	1	2	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	7
	重量	367.9		0	234.1		7.6	52.4		13.5	0										
	重量比1	21.1	5.7																		
	重量比2	307.6	83.6																		
かわらけ種別比	133																				
7層	破片数	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	2	1	0	0	0	0	0
	重量	150.5		0	0.0		0	0		0	0										
	重量比1	0	0																		
	重量比2	0	0																		
かわらけ種別比																					

圖 版



北区全景① (SW→)



北区全景② (SW→)



72SD1・2 (N→)



72SD1・2 (S→)

72SD1 検出 (N→)



72SD1 Aトレンチ断面
(N→)



72SD1 Cトレンチ断面
(N→)



72SD2 検出 (NE→)



72SD2 Aトレンチ断面
(N→)



72SD2 Aトレンチ
山茶碗出土状況 (S→)



72SD2 Bトレンチ断面
(S→)



72SD2 Cトレンチ断面②
(N→)



72SD2 54-38グリッド
かわらけ出土状況 (W→)





72SB1 (S→)



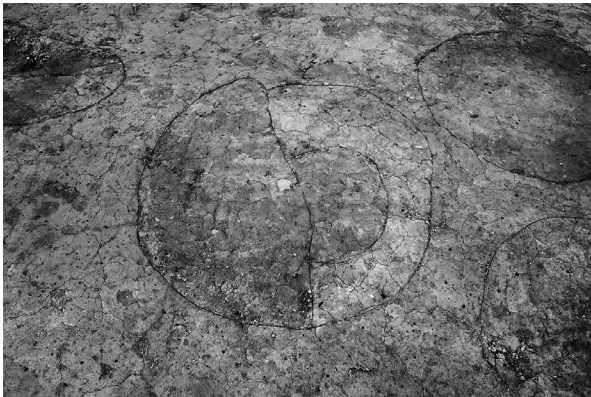
72SB1 (N→)



P1 検出 (W→)



P4 断面 (W→)



P6 検出 (N→)



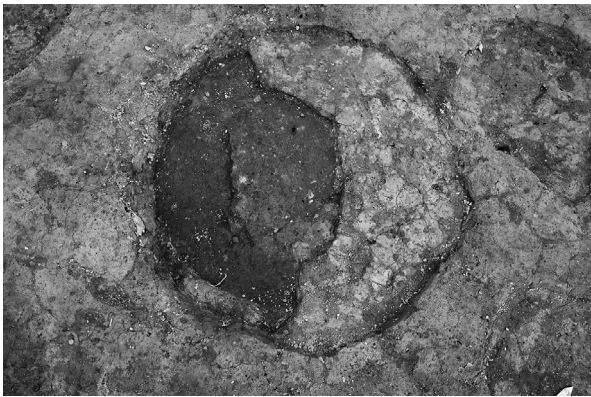
P6 断面 (S→)



P9 断面 (W→)



P10 検出 (S→)



P12 検出 (S→)



P16・63 検出 (S→)



72SA1・2① (N→)



72SA1・2② (N→)



P20 検出 (S→)



P20 断面 (W→)



P21 検出 (S→)



P21 断面 (S→)



P22・23 断面 (S→)



P27 断面 (E→)

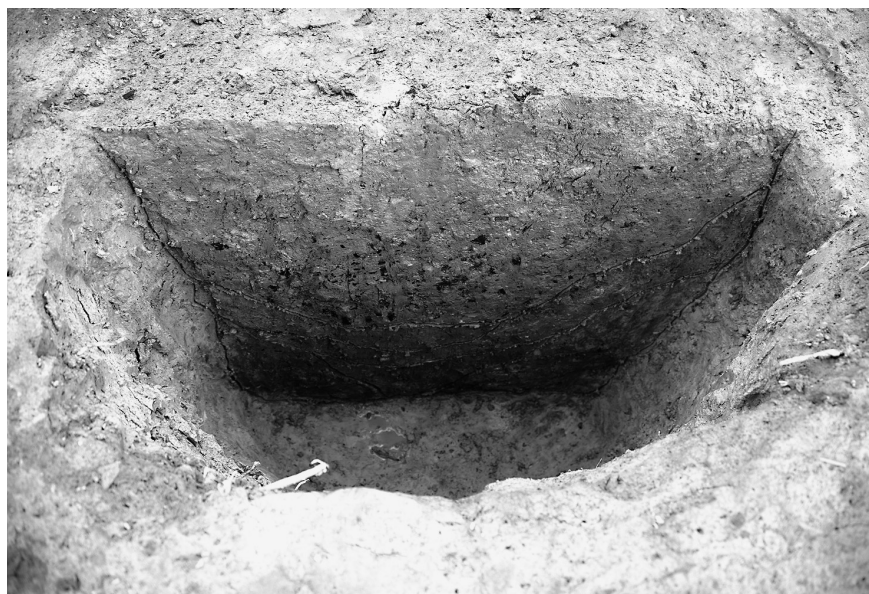


P28 断面 (N→)



P30 検出 (S→)

72SK3 断面 (S→)



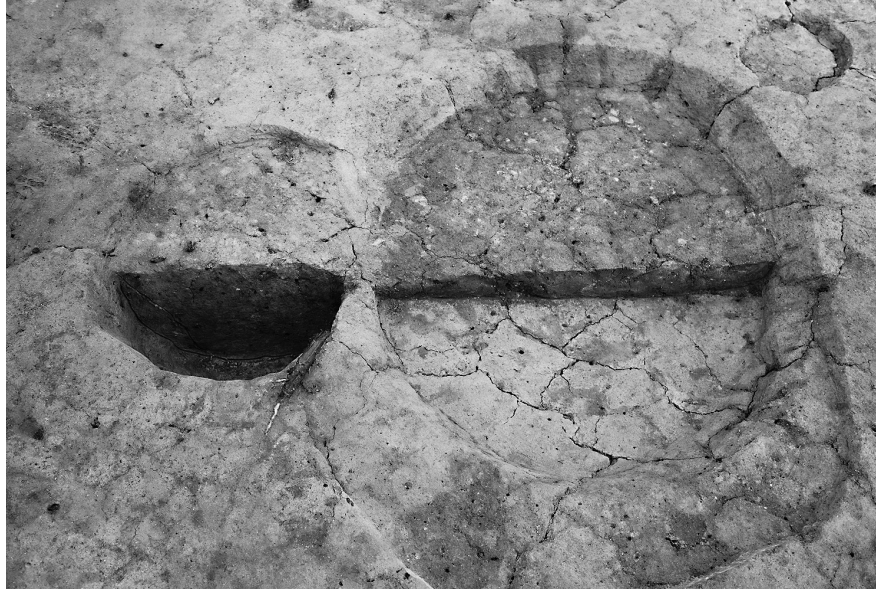
72SD3 検出 (N→)



72SD3 断面 (E→)



72SK6・P18 断面 (S→)



P47 断面 (N→)



P47 10層検出 (N→)



72SX1 完掘 (E→)



72SX1 断面 (E→)



72SE1 検出 (S→)



南区全景 (S→)

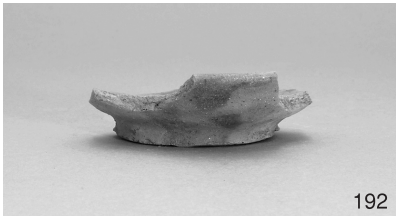


南区断面 (W→)

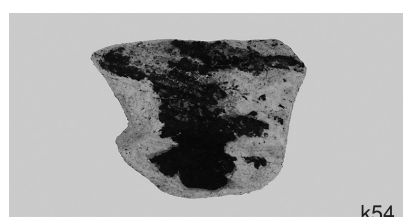


作業風景

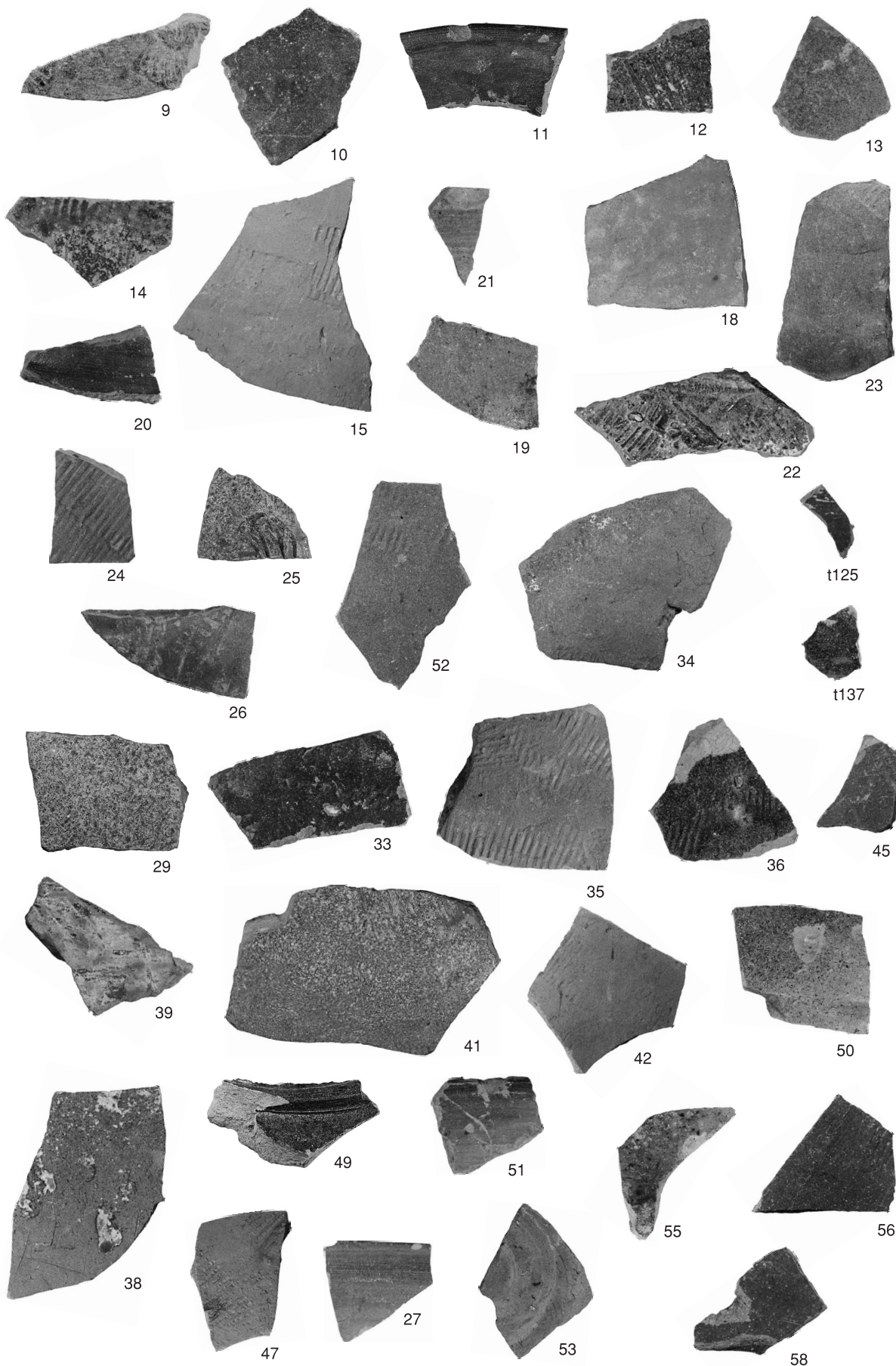


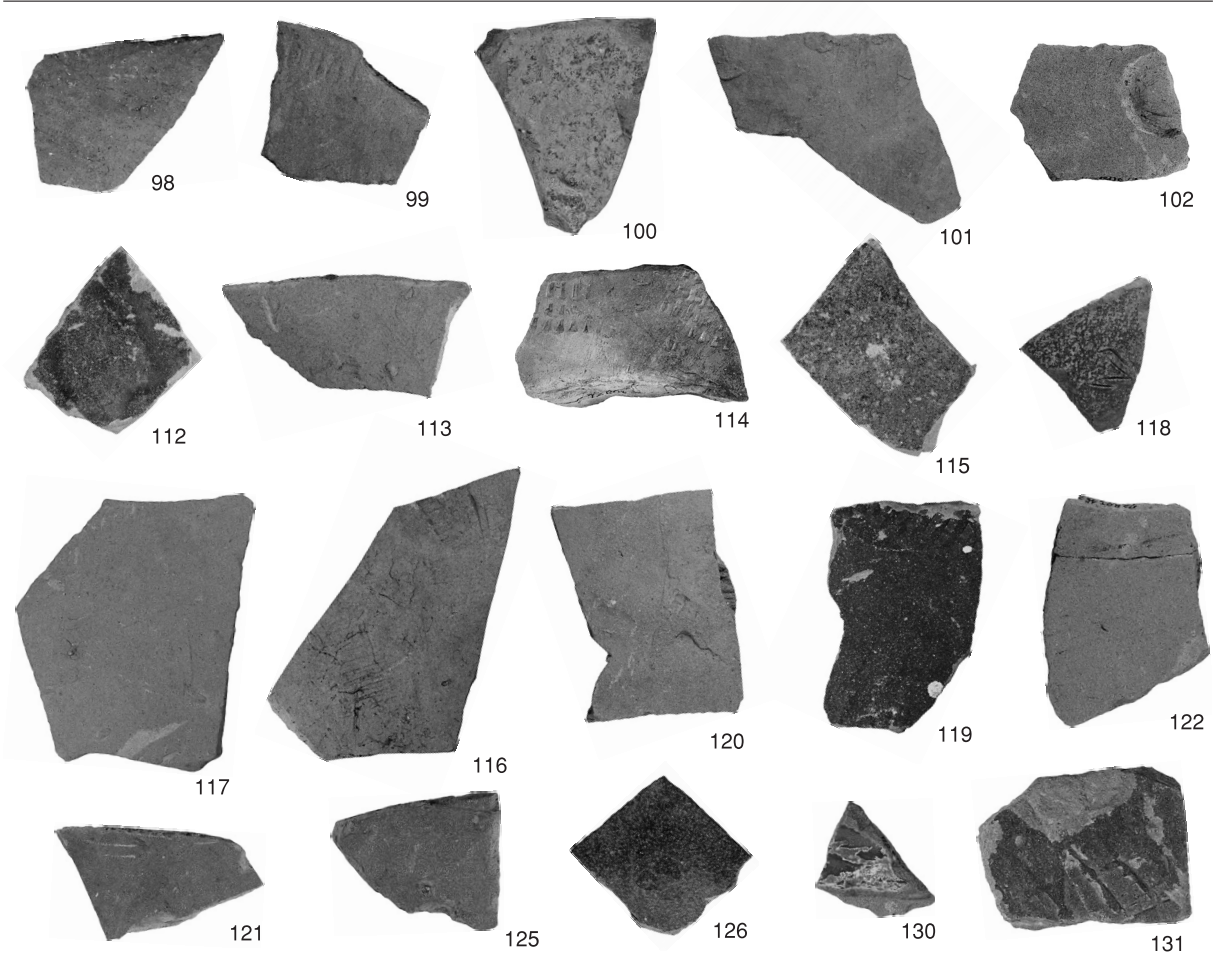
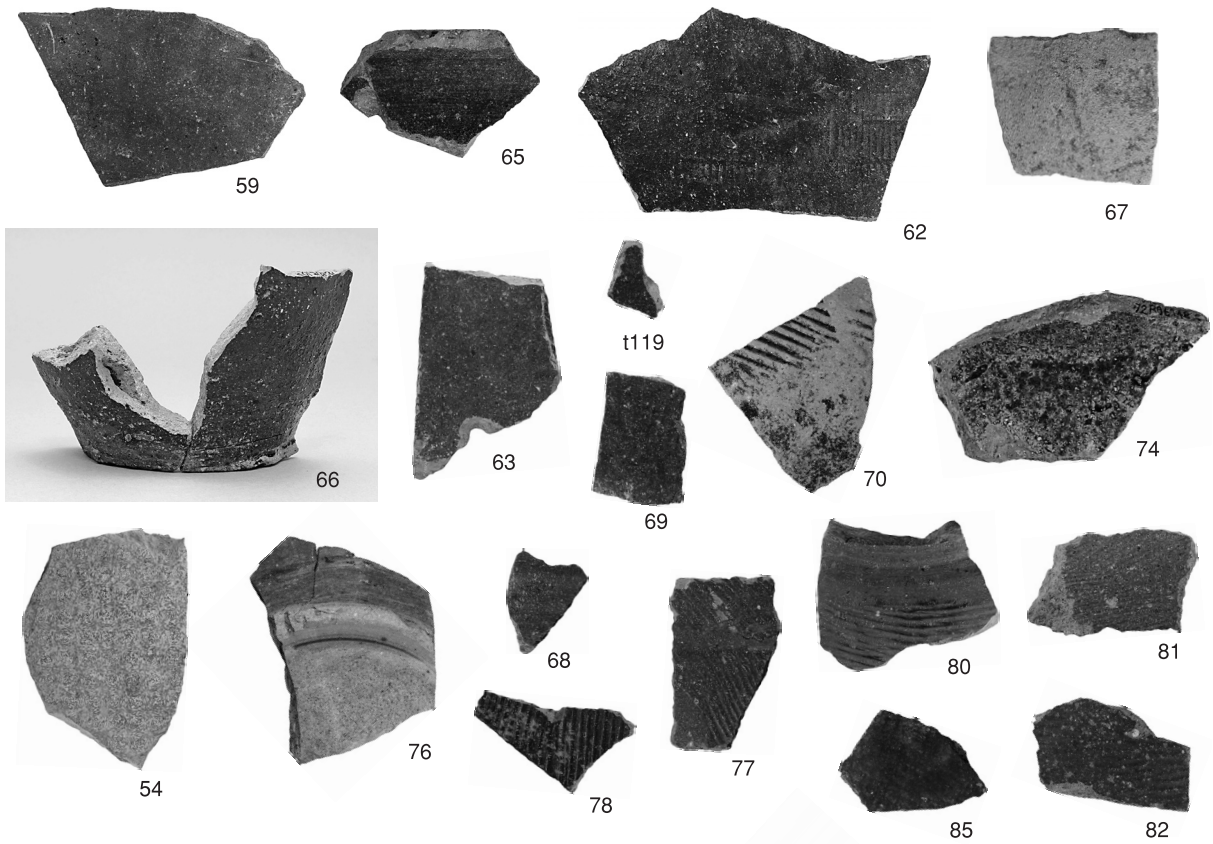


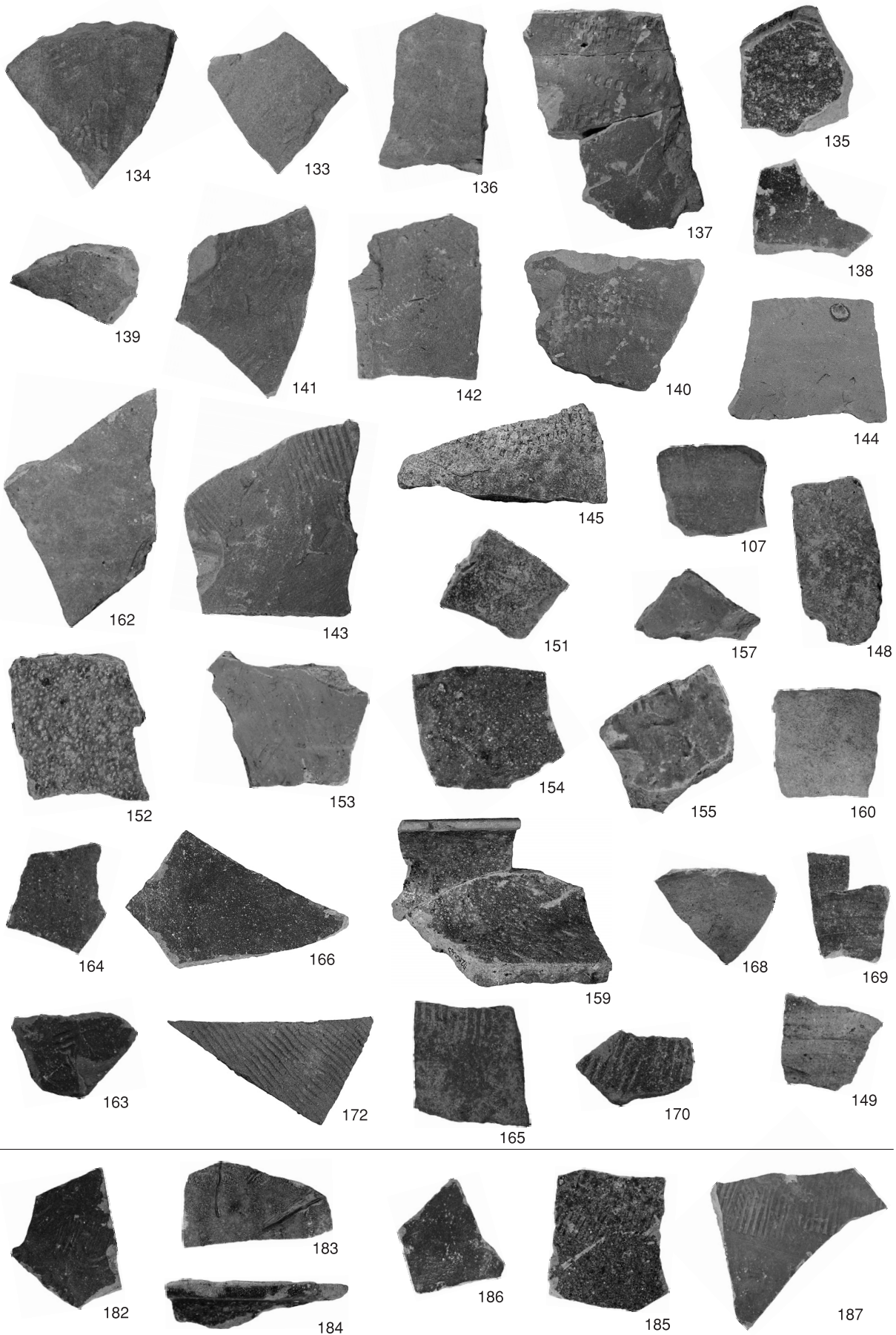
かわらけ①

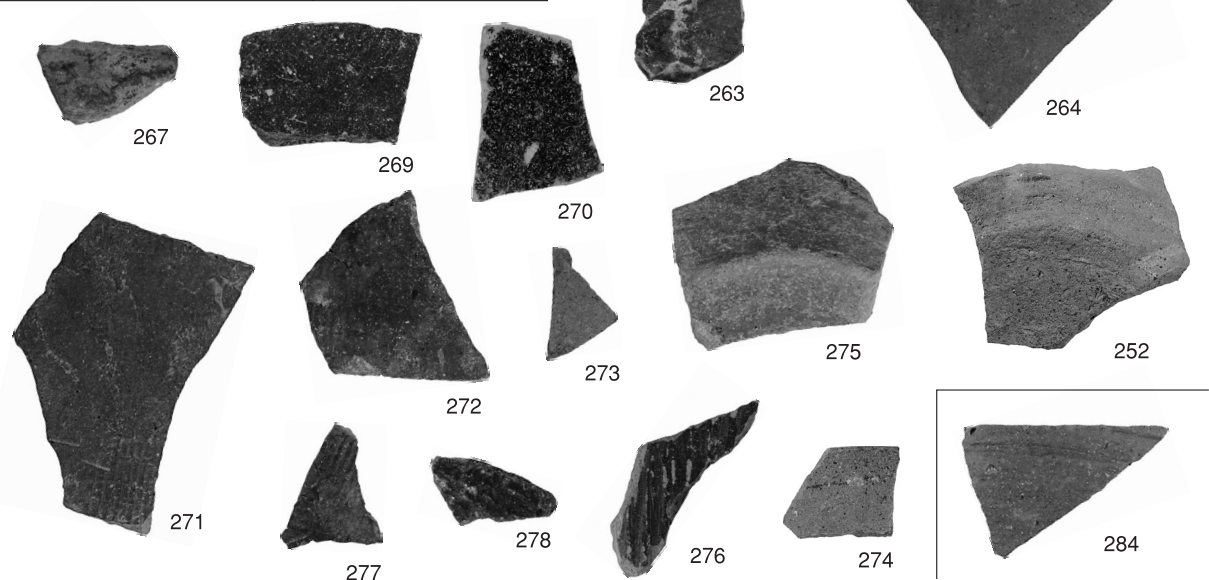
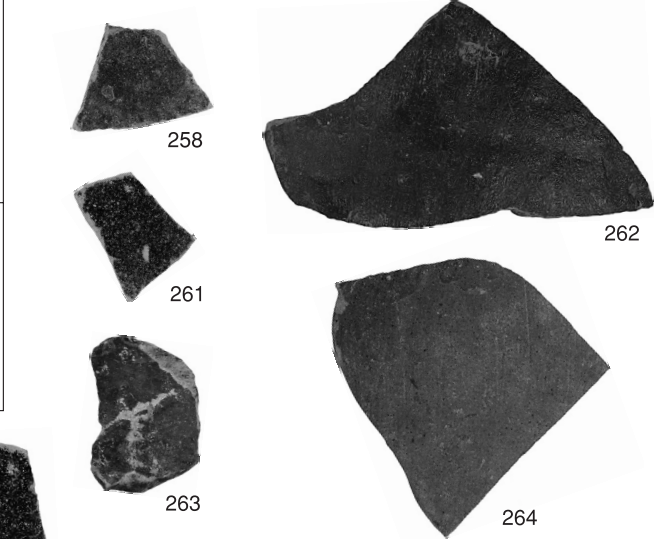
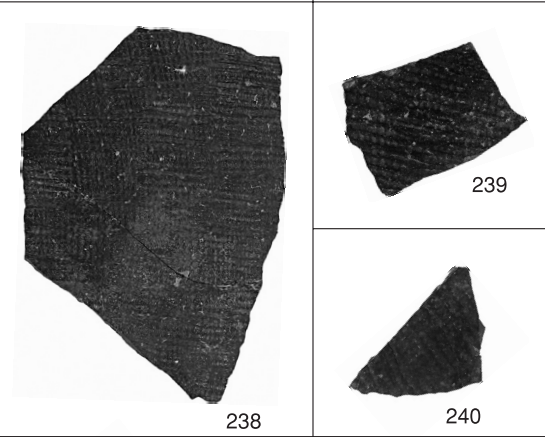
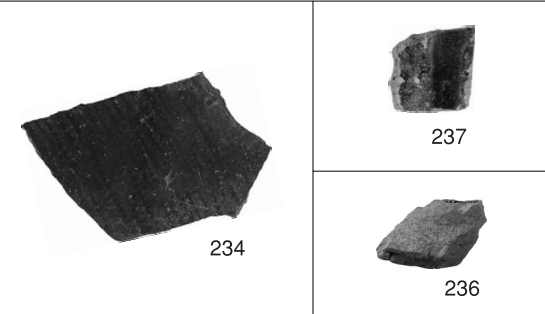
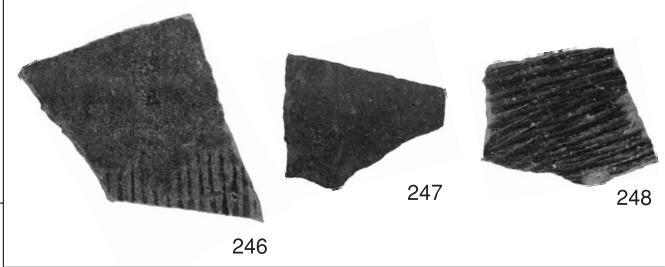
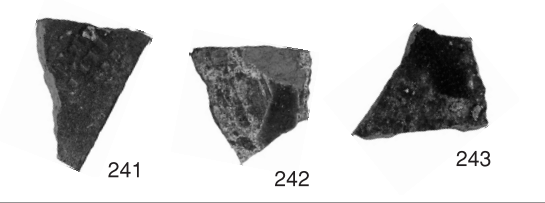
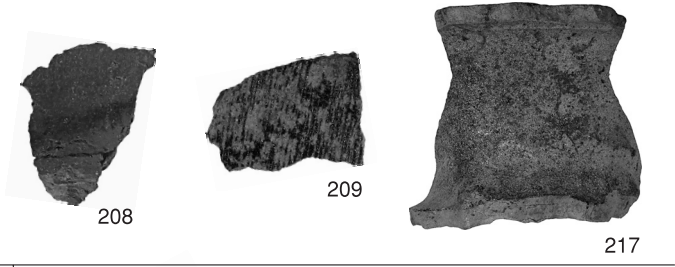


かわらけ②

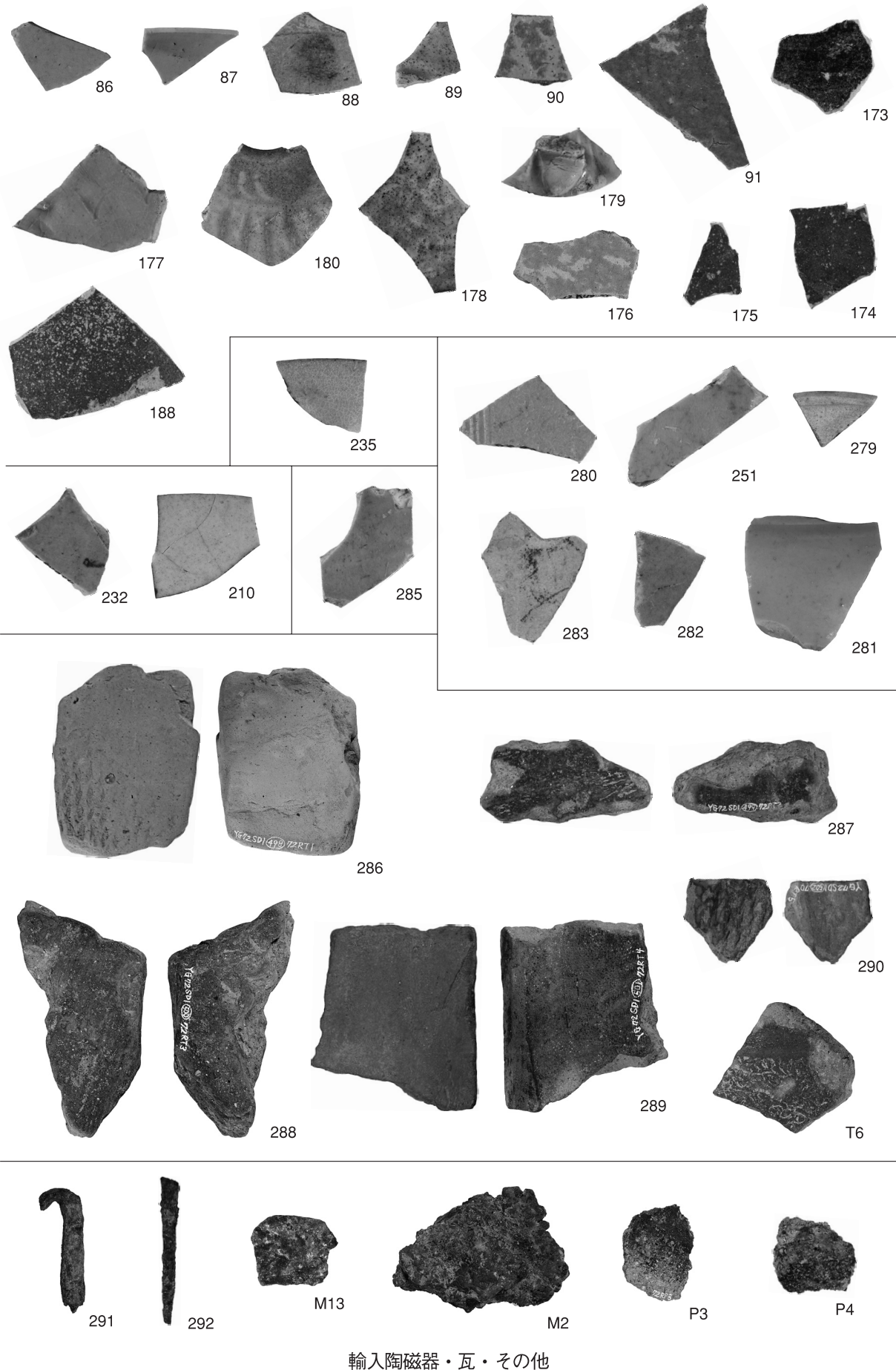




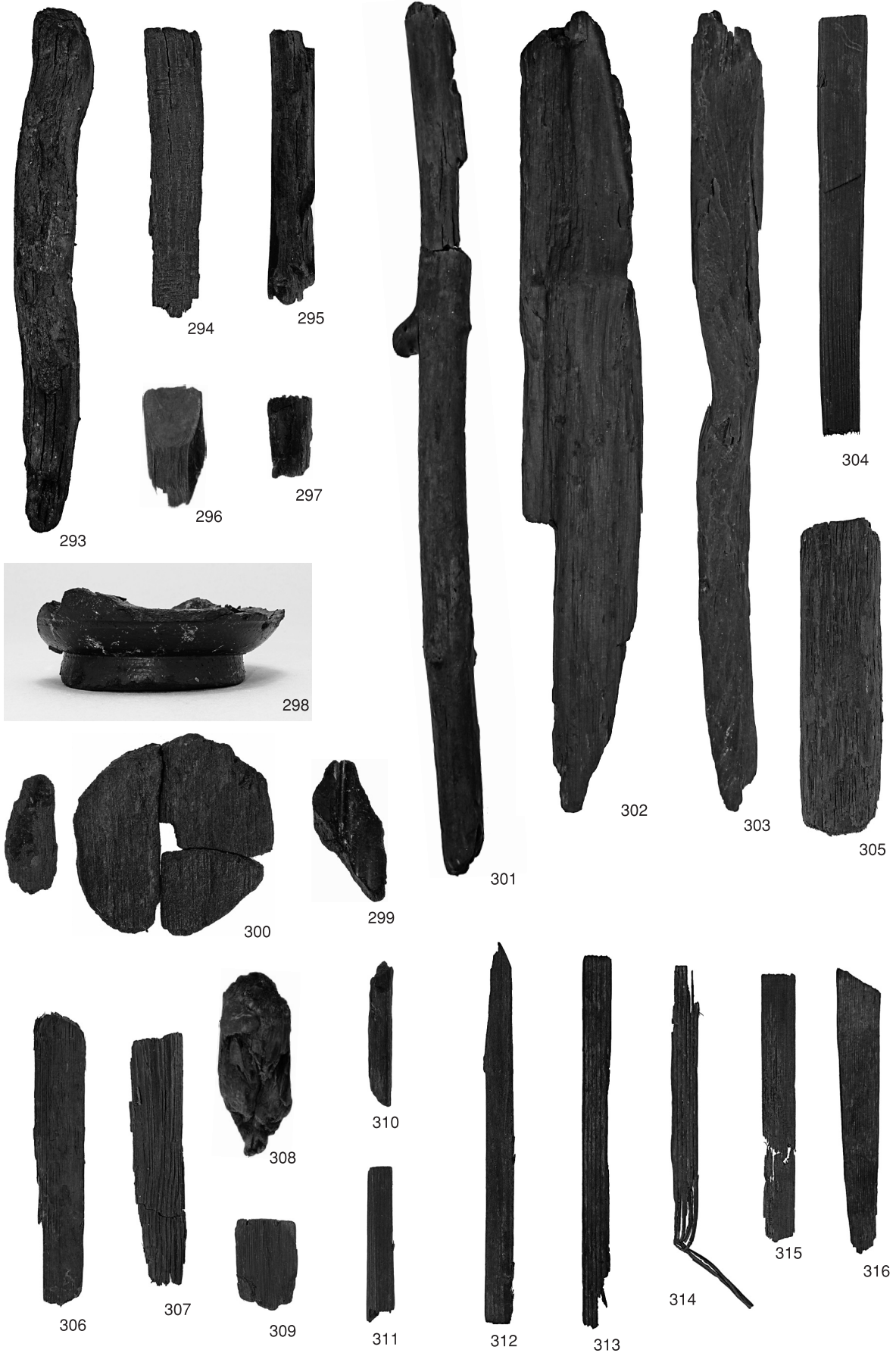




国産陶器④

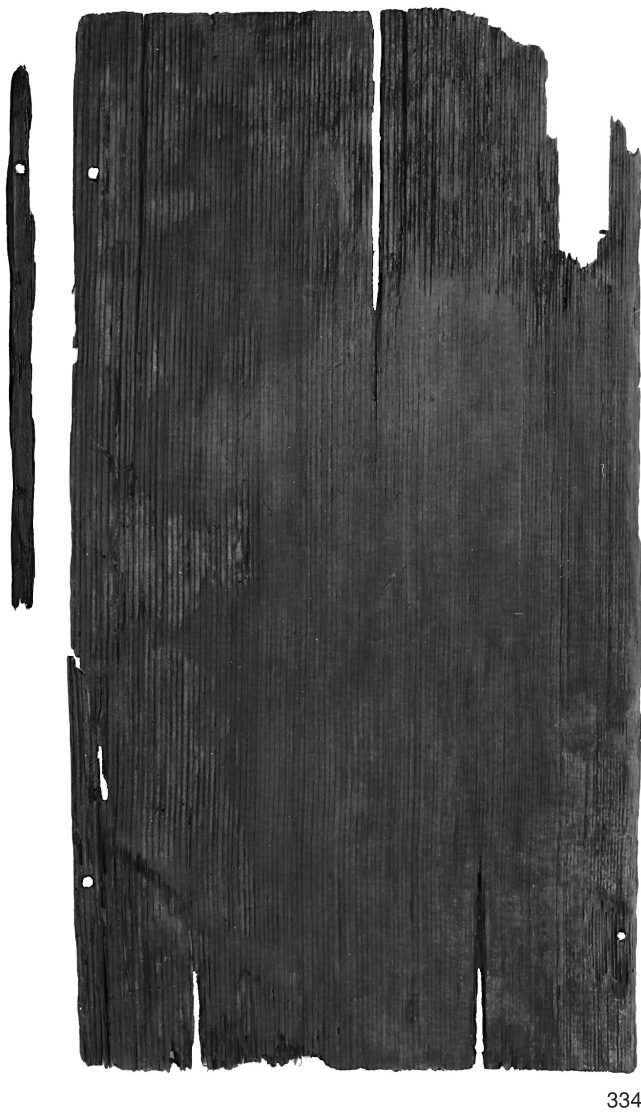
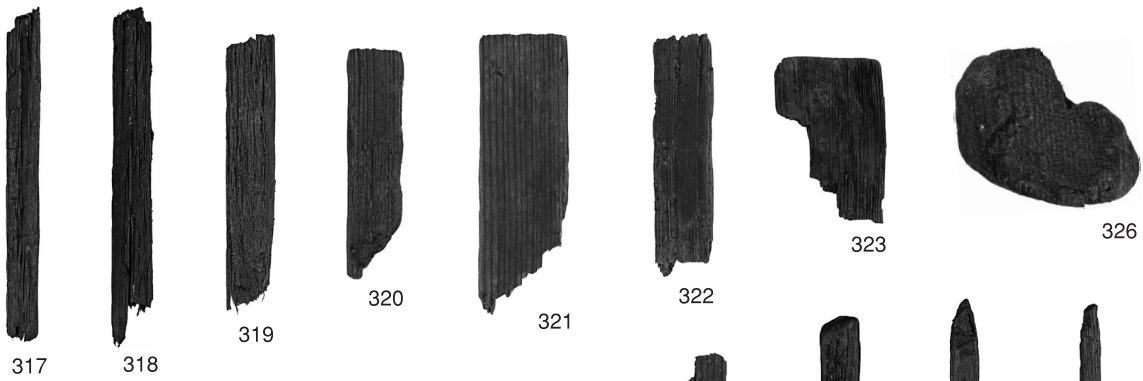


輸入陶磁器・瓦・その他



木製品①

図版22
遺物



木製品②

報告書抄録

ふりがな	ひらいずみいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ やなぎのごしょいせき							
書名	平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡							
副書名	第72次発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第135集							
編著者名	村田 淳 櫻井友梓							
編集機関	岩手県教育委員会							
所在地	〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1							
発行年月日	西暦2012年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やなぎのごしょいせき 柳之御所遺跡	いわてけん 岩手県 にしいわいぐん 西磐井郡 ひらいずみちょう 平泉町 ひらいずみあざ 平泉字 やなぎのごしよちない 柳御所地内	03402	NE76-0190	38度59分 28秒	141度7分 35秒	20100507～ 20101031	1,500㎡	史跡整備に 向けた内容 確認調査
所収遺跡名	種別	おもな 時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項			
柳之御所遺跡	居館跡	平安 時代	堀跡2条 掘立柱建物跡1棟 柱列2条 柱穴 土坑など	かわらけ 国産陶器（渥美・常 滑など） 中国産陶磁器（白磁・ 青白磁・中国陶器） 木製品など	遺跡内を区画する2条 の堀跡を北端部分でも 確認できた。明確な切 り合い等は確認されな いが、遺物や内容を把 握することができた。			
要 約	<p>柳之御所遺跡第72次調査の概報である。</p> <p>柳之御所遺跡は2条の大規模な堀跡で区画されることがわかっていたが、これまで未調査だった北端部の範囲でも堀跡を確認することができ、堀跡が全体を囲むように存在したことが明確になった。また、2条の堀跡は遺跡南端部では時期差をもつことが示されていたが、今回の範囲では平行に走っており、遺構同士の関係からは示すことができていない。今回の調査では両者の堆積する土層の状況や遺物の様相にはそれぞれで差がみられることを確認しており、今後の調査を含めて前後関係を把握するために有益な情報を得ることができた。</p> <p>また、遺跡堀内部の北端部にも掘立柱建物跡が存在することが明らかとなった。遺構の密度は削平などもあり濃くないが、遺構の分布が確認できたことは遺跡内全体の様相を検討する上でも注目される成果となった。</p>							

岩手県文化財調査報告書 第135集

平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

—第72次発掘調査概報—

印刷日 平成24年 3月29日

発行日 平成24年 3月29日

発行 岩手県教育委員会生涯学習文化課
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1
電話 (019) 629-6171 (代表)

印刷 株式会社 一関プリント社
〒021-0031 岩手県一関市青葉一丁目7-24
電話 (0191) 23-4586 (代表)